

令和 6 年度
野洲市文化財調査概要報告書

2025 年 3 月
滋賀県野洲市教育委員会

序 文

野洲市は、琵琶湖の東南部に位置し、野洲川と近江富士の三上山に代表される自然豊かなまちです。埋蔵文化財では、大岩山出土の銅鐸 24 個をはじめ、国史跡大岩山古墳群や重要文化財西河原遺跡群出土木簡などが広く知られ、これらを支えた人々の営みが市内各地の遺跡として周知されているところです。

本報告書に収容する主な調査として寄贈資料（鏡山古窯址群）の報告・検討・分析があげられます。こうした文化財の分析調査は、未解明の部分を残す地域史の研究に寄与するとともに、野洲市の文化財が広く普及される重要な事業であります。

本書が郷土の歴史、文化財への理解と保護に寄与することができれば幸いと存じます。最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

令和 7 年（2025）3 月

野洲市教育委員会

教育長 北 脇 泰 久

例 言

- 1 本書は、令和5年度から令和6年度に実施した、野洲市内の文化財調査の概要報告書である。
- 2 調査は野洲市教育委員会文化財保護課が実施した。調査体制は以下のとおりである。

令和5年度 教育長 西村 健 教育部長 馬野 明 教育部次長 北脇康久
教育部次長兼文化財保護課長兼歴史民俗博物館館長 行俊 勉
課長補佐 河合順之 課長補佐 福永清治 専門員 進藤 武
主任 鈴木 茂 技師 渡邊貴洋

令和6年度 教育長 北脇泰久 教育部長 田中明美 教育部次長 行俊 勉
文化財保護課長兼歴史民俗博物館館長 福永清治
課長補佐 河合順之 主任 鈴木 茂
主任 岡山仁美 技師 渡邊貴洋

- 3 本書の執筆は調査補助員の協力を得て、各調査担当者が行い、各文末に明記した。一部の遺物の写真撮影については寿福写房（寿福 滋）の協力を得た。
編集は課員の協力のもと岡山が行った。
- 4 現地調査における基準方位は、特に設定しない限り真北を示す。磁北や座標北を用いる場合はその旨を図中に表記する。
- 5 標高は、野洲市公共下水道台帳図の水準を基準としている。
- 6 遺構の表示記号は、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の略号を準用した。
- 7 遺跡名や遺跡範囲については、『野洲市遺跡地図』（野洲市教育委員会 令和2年8月5日改訂）による。
- 8 土色は、「新版標準土色帖」（1993年版）などを参考にした。
- 9 出土した遺物および記録などは、野洲市教育委員会では保管している。
- 10 現地発掘調査および整理事業は、下記の方々の参加・協力を得た。（敬称略）
山崎 馨 大黒康弘 松下嘉暢 中川九英 公益社団法人野洲市シルバー人材センター

目 次

序 文	
例 言	
目 次	

第1章 虫生遺跡	1
第2章 鏡山古窯址群関連資料寄贈報告及び若干の考察	7
第3章 野洲市内出土の小型釜とその周辺	52
第4章 西河原森ノ内遺跡第1次発掘調査出土遺物報告補遺	72
報告書抄録	

第1章 虫生遺跡

調査地 野洲市八夫 2479 番地

調査原因 室外機用架台設置

調査期間 令和5年10月16日～令和5年11月10日

調査経過

虫生遺跡は弥生時代から江戸時代にかけての集落跡として周知されている。

虫生遺跡における調査例は、現集落の縁辺部が多いことから、あまり遺構や遺物は確認されていないが、集落の中心である虫生神社周辺の平成28年度調査（虫生字里ノ内216番地、218番地）では、13世紀頃の所産と思われる土師器、黒色土器等の遺物が出土し、掘立柱建物や、柱穴の遺構が確認している。なお、遺構面は表土下0.5m（標高約87.4m程度）である。

本調査地の南隣では平成17年度に調査を行っており、溝や建物跡など多くの遺構が検出されている。遺物は土師器、須恵器、黒色土器などが出土している。なお、主に遺構、遺物は調査区の東側にて確認されており。遺構面は標高約86.9m程度である。

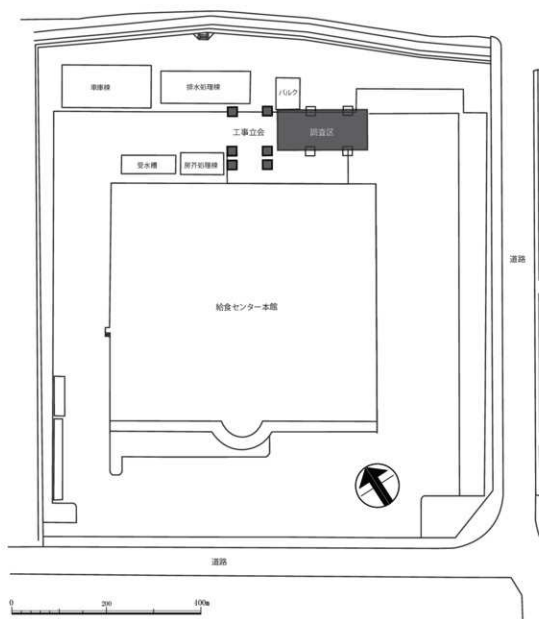
また、本調査地北の所では、昭和44年（1969）に総数3,900枚を超える銅銭が入られた信楽焼の壺が自宅改修工事の際に発見されている（『滋賀文化財だより』54号1981）

発掘調査は、対象地のうち室外機用架台の建設範囲に調査区を設定して実施した。

調査面積は約167㎡である。なお、土置き場等の関係上反転調査し調査区西側をT1、東側をT2と設定した。



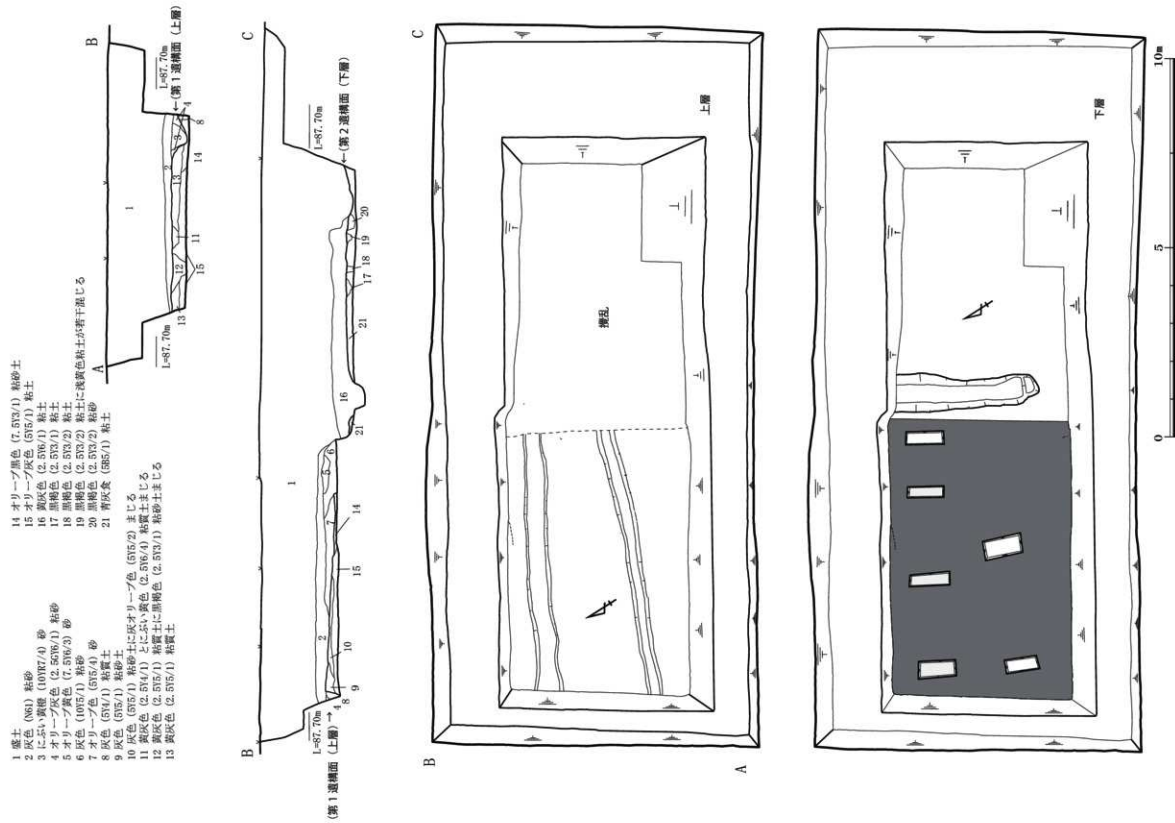
第1図 調査地位置図



第2図 調査区配置図

基本層序 調査区は現地表面下約2.5m（標高約86.7m）の青灰色粘土層まで掘り下げた。その結果、現地表面下約1.6m（標高約87.6m）の黄灰色粘質土層（上層）で溝を検出し、その直下、青灰色粘土層2.5m（標高約86.7m）（下層）でも溝を検出した。この2層が遺構面相当面と思われる。遺物は、土師器、灰釉陶器、焼き締め陶器等が出土した。

調査対象である西端側や南端側に関しては、ガス管や水道管が密集して埋設されており調査が困難であった。また主たる調査区では遺構や遺物が希薄であったため、工事立会の対応とした。その結果、遺構・遺物は確認できなかった。



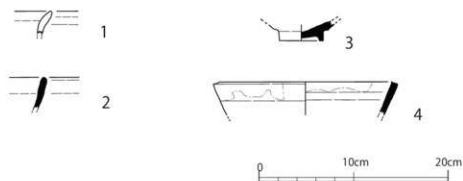


図4図 土器実測図

調査の概要 上層面の東側の多くは近年の造成による攪乱を受けていた。また、調査区西側では浸水が激しく崩落を防ぐため上層面より断割りをおこない下層面を確認した。そのため一部分の確認となったが、調査区東側では全面を確認することができた。

上層面にて確認した溝は2条である。2条とも平行に東西にはしる。SD-1は幅0.6m、深さ0.4mを測る。埋土はにぶい黄橙色(10YR7/4)砂層である。

SD-2は幅0.4m、深さ0.4mを測る。埋土は黄灰色(2.5Y5/1)粘質土に黒褐色(2.5Y3/1)粘砂土が混じる層である。

遺物はSD-1、2ともに埋土から近世頃の陶器他、土師器、須恵器、灰釉陶器などの小片が出土した。

下層面では溝(SD-3)を確認した。SD-3からの遺物等の出土はなかった。SD-3は幅0.8m、深さ0.4mを測る。埋土は黄灰色(2.5Y6/1)粘土層である。

遺物 1は土師器甕である。2は常滑の片口鉢である。3は天目茶碗の高台部である。4は瀬戸美濃のすり鉢である。いずれも細片であり判然としない。

まとめ 先述のとおり、本調査地に南隣は平成17年に調査を行っており、建物跡や溝等を確認している。その際には本調査地周辺にかけて遺構密度が高いものであったが、今回の調査では後世による攪乱部分も多いため、遺物、遺構ともに希薄であった。

以上のことから、本調査地は中世頃の集落の近辺部であったものと思われる。

(鈴木)



調査前



調査区西側 (T1) 全景写真 (東から)



調査区西側 (T1) 全景写真 (北から)



調査区西側 (T1) 北壁土層写真 (南から)



調査区東側（T2）全景写真（西から）



調査区東側（T2）北壁写真（南から）



工事立会

第2章 鏡山古窯址群関連資料寄贈報告及び若干の考察

1. はじめに

鏡山古窯址群とは、滋賀県野洲市から竜王町にかけて広がる鏡山一帯に分布している県下最大級の須恵器古窯址群である。窯の分布状況からほぼ南北方向に縦走する尾根を境に、西側を北西麗、東側を北東麗と大別することができる。なお、北西麗は野洲市側、北東麗は竜王町側となる。

これまでの分布調査結果から、約50基以上の窯跡が確認されているが、人為的あるいは自然災害などで破壊されているものを含めれば100基以上存在していたと考えられている。また、日本書紀垂仁天皇三年の条に「近江国鏡谷陶人。則天日槍之従人也。」と記載されており、渡来人と鏡山古窯址群との関連を示している。

以上の様に、鏡山古窯址群は一地方窯でも特異であり、鏡山古窯址群の様相を解明することは、滋賀県の歴史のみでなく古代窯業史においても重要である。

これまで鏡山古窯址群に関する研究は、平安学園（当時）による分布調査が行われ、その後、昭和53（1987）年に丸山章平氏が『野洲町史』にて鏡山北西麗側の集成を行い、同年の『竜王町史』にて鏡山北東麗側の集成を行った。その後も、角建一氏、林純氏、畑中英二氏、富田尚弘氏、佐野由美子氏など多くの研究者によって鏡山古窯址群に関する検討が行われた。

しかし、鏡山古窯址群の調査例が少ないことから、資料の実態はあまり明らかにされておらずまた、いくつかの調査例の中でも当時の報告書紙面等の制約から報告されていない遺物も多い。さらに資料が少ないことから、鏡山古窯址群独自の須恵器編年を組む必要性が指摘されているにも関わらずあまり研究が進んでいない。

今回、龍谷大学付属平安高等学校より昭和45（1970）年度から昭和46（1971）年度に行われた分布調査資料が野洲市に寄贈された。

本稿は寄贈された資料の報告を行い合わせてこれまでの調査成果等を含めて鏡山古窯址群内出土須恵器の変遷について若干の考察を行いたい。なお寄贈された資料について、主に野洲市に位置する資料を中心に詳細を報告する。

2. 調査経緯等について

分布調査は昭和45（1970）年度から昭和46（1971）年度に、田辺昭三氏を団長として平安学園が野洲市辻町から竜王町薬師周辺までを対象として行われた。昭和45（1970）年度の調査では篠原駅近辺にあった公民館に宿泊しながら調査を行い、昭和46（1971）年度は竜王町内の公民館に宿泊しながら調査を行ったとのことである。（註1）

資料は採取した場所や様相により、窯・古墳・散布地の3つに分類されている。なお「窯18」、「窯19」、「窯42」、「散布地63」は番号が重複しておりどちらかの採取資料なのかは判然としない。表採した場所は1/3000の地図に手書きで記入しているが、窯番号等が記入されている場合であっても資料が無いところもある。

3. 寄贈資料について

寄贈された資料は鏡山古窯址群内に表採された資料（コンテナ箱8個分）、1/3000スケールの地図（昭和35年8月測図）10枚、1/25,000スケールの地図（昭和31年11月30日発行）2枚を

1枚に合成したものである。

1/3000スケールの地図（昭和35年8月測図）10枚のうち8枚には表採箇所等を手書きで明記してある。また「野洲町図(-)」、「竜王町図其(-)」、「竜王町図其三」は2枚ありそれぞれに表採箇所や所見等を明記している。（図18～26）1/25,000スケールの地図には分布調査範囲が色付けされている。なお、記された情報を現在の地図に落とし込んだのが図27～29である。

以下に図化した資料について報告する。

窯資料（図1～11）

窯1（図1）竜王町

1は杯H蓋である。口縁端部に段をもち天井部付近はナデ調整を施す。2～6は杯H身である。口径は10cm～12.5cm程度を測る。立ち上がりは低く、端部は丸い。底部はヘラキリ不調整である。7は壺で口径18.2cmを測る。

窯2（図1）竜王町

1～3は杯H蓋である。1、3は端部に若干の段をもつが2はほとんど丸くおさめる。3はかなり焼き歪みしている。4は杯H身である。立ち上がりは低く端部は丸い。

窯4（図1）竜王町

1、2杯H蓋である。1は体部から口縁部にかけての稜線はほとんど認められないが2は明瞭に認められる。また2には端部の丸い身の立ち上がりが溶着している。3は杯H身である。立ち上がり端部は丸く、底部はヘラキリ不調整である。4～6は高杯である。5はスリット状にスカシをあけている。7は大型の提瓶口縁部の可能性があるが判然としない。

窯5（図1）竜王町

1は壺である。口縁部端部は内面に折り曲げる。2は脚部である。長脚高杯と思われるが判然としない。

窯6（図1）竜王町

1は杯B蓋である。かえりはもたない。

窯7（図1）竜王町

1は杯H身である立ち上がりは低く、端部は丸くおさめる。2は高杯である。端部は鋭く成形し特徴的である。

窯8（図1）竜王町

1は杯B身である。2は高台部であり、おそらく壺に伴うものと思われる。3は短頸壺で端部はやや沈線をもつ。

窯10（図2）竜王町

1は壺の底部と思われるが判然としない。

窯11（図2）竜王町

1は杯H身である立ち上がりは低く端部は丸い。一部に蓋が溶着しており蓋の端部は丸い。2、3は不明器種である。3は口縁部の立ち上りは短い。表面には摩耗しており判然としないがハケ目調整を施している。

窯12（図2）竜王町

1は杯H蓋である。体部から口縁部にかけての稜線が若干認められる。口縁端部は丸い。2は蓋である。杯H蓋とも思われるが器高が高いため判然としない。3は大型の杯H身である立ち上がりは低く、端部は丸い。

窯 13 (図2) 竜王町

1 はかえりが付く蓋である。身は浅く、天井部に摘まみが付くかは判然としない。2 は長脚高杯である透かしはなく端部は下方に伸びる。

窯 14 (図2) 竜王町

1、2 は杯 H 蓋である。1 は端部に段を持つ。2 は体部から口縁部にかけての稜線が若干認められる。口縁端部は丸い。

窯 15 (図2) 竜王町

1 は短頸壺である。口径は 5 cm を測る。

窯 16 (図2) 竜王町

1 は杯 H 蓋である。体部から口縁部にかけての稜線が若干認められる。口縁端部は段をもつ。2 はかえりが付く蓋である。身は浅く、天井部に摘まみが付くかは判然としない。3 は平瓶である。4 は提瓶の口縁部と思われる。5、6 は器台や壺等の脚部である。5 の脚部端部は中に折り込む。6 は器壁がかなり薄く器台杯の可能性があるが判然としない。7 は瓶である。内面は灰が多量にかかっており、判然としないがおそらくナデ調整が施されている。

窯 17 (図2) 竜王町

1 は杯 H 蓋である。体部から口縁部にかけての稜線が若干認められる。2 はかえりが付く蓋である。身は浅く、天井部に摘まみが付くかは判然としない。3 ～ 6 は杯 H 身である。全て立ち上がりは低く端部は丸い。4 は体部が丸く立ち上がりは内向きに伸びる。なお体部下部はナデ調整である。7 は脚部である。

窯 19 (図3～5) 竜王町

1 ～ 26 は杯 H 蓋である。体部から口縁部にかけての稜線が認められるものと認められないものが混在する。天井部はヘラケズリ不調整が大半である。口縁端部に段を持つものが多い。27 ～ 50 は杯 H 身である。口径が 9 cm 程度の小型から 14 cm 程度的大型品まで幅広い。42 にはヘラ記号が刻まれる。すべて立ち上がりは低く端部は丸い。51 ～ 53 は杯であるが判然としない。53 は蓋付き碗の可能性もある。54 ～ 59 は高杯である。56 はハソウの口縁部の可能性がある。57、59 は上段にスリット状の貫通しない透かしをもつ。60 ～ 62 は提瓶である。63 ～ 67 は壺である。68 は甕などの口縁を成形する際にできた切れ端が焼成されたものと思われる。69、70 は器台の口縁部である。

窯 21 (図6～7) 野洲市

1 ～ 13 は杯 H 蓋である。体部から口縁部にかけての稜線が認められず、天井部はヘラケズリ不調整のものが大半である。また口縁端部に段をもたない。13 は口径から大型杯 H 蓋と思われる。14 ～ 34 は杯 H 身である。すべて立ち上がりは低く端部は丸い。35 ～ 45 は高杯である。35、36 は脚部との接合付近にヘラケズリ調整を施す。脚部はラッパ状に広がるものが多い。46 ～ 49 は提瓶である。口縁部はやや反しながら上方に伸びる。把手部分は口縁部に近い。50 はハソウの口縁部と思われるが判然としない。51、52 はかえりをもつ蓋である。53、54 は増である 53 は底部にヘラケズリ調整を施す。55 ～ 60 は壺である。55 は端部にやや面をもつ。60 はやや長胴気味に伸びる可能性がある。

窯 22 (図8) 野洲市

1 は杯 H 蓋である。体部から口縁部にかけての稜線が認められず、口縁端部に段をもたない。2 は杯等の口縁部であるが判然としない。3 は高台付き壺等の可能性があるが判然としない。

窯 23 (図8) 野洲市

1～4 杯 H 蓋である。1, 2 は体部から口縁部にかけての稜線がやや認められるが, 3, 4 では認められない。4 は天井部にヘラケズリ調整が施されている。(註 2) 7～9 は高杯である。7 は端部をやや鋭く下方に伸ばす。

窯 24 (図 8) 竜王町

1 は杯 H 蓋である。体部から口縁部にかけての稜線は認められない。端部は丸い。2, 3 は杯 H 身である。立ち上がりは低く内向し端部は丸い。4 は高杯である。5 は提瓶などの口縁部と思われる。6 は脚部である。7 は壺である。口縁部には特徴的な段をもつ。8 は甕または甔等の口縁部である。

窯 25 (図 8) 竜王町

1 は杯 H 身である。底部はヘラケズリ調整を施す。立ち上がりは短く内向し端部は丸い。口径は 8.2cm を測り小振りである。

窯 26 (図 8) 野洲市

1 は杯 H 蓋である。1 体部から口縁部にかけての稜線は認められない。端部は丸い。2 高杯の蓋である。体部から口縁部にかけての稜線は認められないが端部に若干の段を持つ。天井部に剝離痕がみられる。

窯 27 (図 8) 野洲市

1, 2 は杯 H 蓋である。体部から口縁部にかけての稜線は認められる。端部にはやや段を持つ。3, 4 は杯 H 身である。立ち上がり端部は丸い。

窯 28・29 (図 8) 野洲市

表採時のメモに「28・29」と明記がありどちらかの窯で表採したものと思われるが詳細は不明である。

1, 2 は杯 H 蓋である。体部から口縁部にかけての稜線は若干認められる。端部には段を持つ。3 は無蓋高杯と思われる。

窯 30 (図 8) 野洲市

1 はかえり付蓋である。天井部にはカキメを施す。

窯 31 (図 8) 野洲市

1 は甔の口縁部の可能性があるが判然としない。2 は杯 H 身である。体部に杯 H 身の口縁部と思われる破片が溶着している。立ち上がりは低く端部は丸い。

窯 32 (図 8) 野洲市

1, 2 は杯 H 蓋である。体部から口縁部にかけての稜線は認められない。1 は口縁端部に段を持つ。2 の端部は丸い。

窯 33 (図 8) 野洲市

1～3 は杯 H 蓋である。体部から口縁部にかけての稜線は認められる。口縁端部には段をもつ。4 は天井部にヘラケズリ調整が施される。4 は杯 H 身である。立ち上がりは高いが、端部は丸い。

窯 34 (図 9) 野洲市

1 は杯 H 蓋である。体部から口縁部にかけての稜線は若干認められる。口縁端部には段を持つ。2 は壺の口縁部である。

窯 35 (図 9) 野洲市

1, 2 は杯 H 蓋である。体部から口縁部にかけての稜線は若干認められる。口縁端部には段を持つ。3 は杯 H 身である。立ち上がり端部は丸い。4 は高杯の脚部である。

窯 36 (図 9) 野洲市

1は杯H身である。2は壺などの口縁部と思われるが判然としない。波状紋が施される。

窯37(図9) 野洲市

1,2は杯H蓋である。体部から口縁部にかけての稜線は若干認められない。口縁端部には段を持つ。

窯38(図9) 野洲市

1～6は杯H蓋である。体部から口縁部にかけての稜線が認められる。口縁端部には段を持つ。3は天井部にヘラケズリ調整を施す。7～10は杯H身である。立ち上がり端部は丸い。10の外面底部にはヘラケズリ調整を施す。

窯39(図9) 竜王町

1,2は杯H身である。立ち上がりは低く端部は丸い。1の底部は粗いヘラケズリ調整を施す。

窯40(図9) 竜王町

1は杯H蓋である。体部から口縁部にかけての稜線は若干認められない。口縁端部には段を持たない。

窯42(図9) 竜王町

1は杯H身である。立ち上がりは低く端部は丸い。

窯43(図19) 野洲市

1は摘まみが付く蓋である。2は小型の蓋と思われるが器壁が厚く、小片であり判然としない。3,4は杯H蓋である。3は体部から口縁部にかけての稜線がほとんど認められないが4はやや認められる。どちらも口縁端部には段を持つ。5,6は杯H身である。立ち上がりはやや高いが端部は丸い。6は底部外面に須恵器片が溶着する。7～10は高杯である。7,8は脚部に透かしがなくカキメが施される。脚部外側端部にはやや稜線をもつ。9,10は脚部に方形、円形透かしをもつ。9の脚部端部は丸くおさめるが10は段をもつ。

窯44(図10) 野洲市

1は杯H蓋である。体部から口縁部にかけての稜線は認められる。口縁部端部に段を持つ。2,3は杯H身である。2は立ち上がりが2.0cmを測るが端部は丸い。4は壺である口縁部端部は鋭く上方に伸ばす。5は土鍾である。

窯45(図10) 野洲市

1は甔の把手と思われるが判然としない。2は高台部であると思われるが判然としない。

窯46(図10) 不明(※地図に記入なし)

1はかえりを持つ蓋である。壺等の蓋と思われるが判然としない。摘まみが付く可能性もある。2は杯H蓋である。体部から口縁部にかけての稜線はほとんど認められず、口縁端部に段を持たない。天井部はヘラケズリ不調整である。3～7はかえりを持つ蓋である。杯Gに伴うものと思われる。天井部にはヘラケズリ調整が施される。9～13はかえりをもたない蓋である。杯Bに伴うものと思われる。14は杯H身である。立ち上がりはかなり短い。16は杯Aまたは杯Bは口縁部である。

17～19は杯Bである。20は提瓶の口縁部と思われる。21,22は壺である。23,24は甔である。25は器台脚部と思われる。波状紋が施される。

窯47(図11)(※地図に記入なし)

1～11は杯H蓋である。体部から口縁部にかけての稜線は認められるものと認められないものが混在する。また口縁端部に段を持つものと持たないものが混在する。天井部はヘラケズリ不調整である。12,13はかえりをもつ蓋である。天井部にはヘラケズリ調整を施す。14～21は杯H身である。すべて立ち上がりは低く端部は丸い。22～31は壺・甔である。

散布地資料（図12～14）

散布地2（図12）竜王町

1は杯H身である。立ち上がりは低く端部は丸い。

散布地3（図12）竜王町

1～4は杯H蓋である。体部から口縁部にかけての稜線は認められない。口縁端部に段を持つ。3は器高が高く椀の可能性はあるが判然としない。5は高杯の蓋である。天井部にはカキメを施す。6は宝珠系つまみである。7～13は杯H身である。立ち上がりは低く端部は丸い。14、15は高杯である。14の脚部にはカキメを施す。15は透かしをもつ。16は杯Bであると思われるが判然としない。17、18は壺である。

散布地4（図12）竜王町

1は杯H蓋である。体部から口縁部にかけての稜線は認められず、口縁端部は丸い。

2は高杯である。立ち上がり端部は丸い。

散布地5（図12）竜王町

1は杯H蓋である。体部から口縁部にかけての稜線は認められず、口縁端部にはやや段をもつ。2は杯であると思われるが判然としない。口縁は外反する。

散布地11（図12）竜王町

1は杯H身である。2は高杯である。

散布地14（図12）竜王町

1は提瓶の口縁部と思われる。

散布地16（図13）竜王町

1は杯H身である底部にはヘラケズリ調整を施す。

散布地17（図13）竜王町

1は高杯の脚端部と思われるが判然としない。

散布地22（図13）竜王町

1は壺等の底部と思われるが判然としない。

散布地24（図13）竜王町

1、2は杯H身である。立ち上がりは低く端部は丸い。2の器壁は分厚い。

散布地27（図13）竜王町

1はかえりを持たない蓋である。2、3は杯H身と思われるが蓋の可能もあり、判然としない。

散布地32（図13）竜王町

1は杯である。小片であるため判然としないが杯G身と思われる。

散布地36（図13）竜王町

1は杯H身である。立ち上がりは低く端部は丸い。2は脚部と思われるが判然としない。

散布地37（図13）竜王町

1は杯H身である。立ち上がりは低く端部は丸い。

散布地40（図13）竜王町

1は横瓶等の口縁部と思われる。

散布地42（図13）竜王町

1は杯H身である。立ち上がりは低く端部は丸い。

散布地43（図13）竜王町

1は小型の蓋である。小型の壺に伴うものであろうか。2は杯H身である。立ち上がりは低く端部は丸い。

散布地 47(図13) 竜王町

1は高杯等の脚部と思われる。

散布地 48(図13) 竜王町

1は大型杯の蓋と思われる。口縁端部は丸い。

散布地 51(図13) 竜王町

1は高杯である。

散布地 52(図14) 竜王町

1は器台である。

散布地 55(図14) 竜王町

1は杯である。2は杯H身である。立ち上がりは低く端部は丸い。底部はヘラケズリ不調整である。

散布地 56(図14) 竜王町

1は杯H蓋である。体部から口縁部にかけての稜線は認められず、口縁端部には段をもたない。2、3は杯H身である。立ち上がりは低く端部は丸い。4は壺等の口縁部である。

散布地 58(図14) 野洲市

1、2はかえりを持たない蓋である。3は杯Aである。4は高杯の脚部である。5は小壺である。

散布地 63(図14) 野洲市

1、2は杯H身である。立ち上がりは低く端部は丸い。

古墳資料(図15)

古墳 36(図15) 竜王町

1はかえりを持たない蓋である。

古墳 47(図15) 竜王町

1は大型杯の蓋である。体部から口縁部にかけての稜線は認められず、口縁端部には段をもつ。

古墳 51(図15) 野洲市

1、2は小型短頸壺である。

古墳 53(図15) 野洲市

1は脚部と思われる。2～4は杯H身である。3、4は同一個体の可能性がある。5は壺等の口縁部と思われる。6は直口壺と思われるが判然としない。外面にはカキメが施される。

古墳 55(図15) 野洲市

1は杯H身である。立ち上がりは低く端部は丸い。

4. 資料の採取場所について

以上、今回図化できた資料を報告した。次に現在の野洲市に位置する場所にて表採された資料やその位置について詳しく報告する。(註3)

今回報告した資料野洲市に位置する窯は21～23、26～38、43～45、49、散布地は53、54、58～63、71～74である。古墳は51～60、62である。

なお、前述のとおり鏡山古窯址群は北西麓(野洲市)と北東麓(竜王町)に大別でき、さらに北西麓は①成橋支群・②入町支群・③大篠原支群・④大篠原東支群・⑤大篠原南支群に区分されている。各支群に位置する遺跡と今回表採された窯・散布地が位置する支群は以下の通りである。

成橋支群（夕日ヶ丘遺跡・夕日ヶ丘北遺跡）（図27）

窯26～38、43、44、散布地63（註4）は成橋支群に位置する。野洲市においては夕日ヶ丘北遺跡（昭和57年度調査）夕日ヶ丘遺跡（平成8年度調査）の調査を行っている。

現在、成橋支群が鏡山古窯址群内の最古の支群であり、TK47型式頃に窯業生産を開始したと考えられており、その根拠資料として夕日ヶ丘21号資料があげられる。（林1996、畑中1998、鈴木2022など）なお、窯資料の最古扱資料は2-2号資料（鈴木2022）や成橋11号資料（畑中2002）が挙げられ、これらは成橋支群の東側で確認されたものであった。しかし今回報告した成橋支群西側に位置する窯44資料が古相を示していることから、およそ6世紀初頭頃には成橋支群全体で窯業生産が開始されていたと推察できる。

また夕日ヶ丘北遺跡（昭和57年度調査）資料が、調査地周辺に位置する窯38や窯43と様相が類似しており、これらの窯から流出した可能性がある。

なお、成橋支群では現在のところ杯Gは確認されていない。（註5）

以上のことから成橋支群では遅くとも6世紀初頭頃には窯業生産を開始し、6世紀中頃から後半にかけて生産量は増加したが7世紀にはかなり少なくなっていくと考えられる。

入町支群（小山遺跡）（図28）

窯21～23は入町支群に位置する。窯21は野洲市が平成6年度に調査行った範囲の近辺であり資料の様相も似ており、窯22、23も同時期頃と考えられる。なお散布地58はかえりのない杯蓋や杯A、小壺等が表採されていることから、他の窯資料等よりもかなり新しい様相を示す。散布地とされていることから、判然としないもののこの地にて生産されていた可能性はあろうか。なお、散布地53は現在考えられている入町支群よりも南に位置しており入町支群が南に拡大する可能性を示している。

大篠原支群（大篠原東遺跡）（図28）

窯45は胴塚遺跡に位置している。すぐに南には大篠原支群が広がっており、窯45もこの支群に含まれるものと考えられる。

大篠原南支群（大篠原南遺跡）（図29）

窯49は大篠原南遺跡の範囲内に位置する。当遺跡は昭和63年度にほ場整備に伴う発掘調査を行っており、散布地71、72周辺もこの時に調査を行っているが、主だった遺物、遺構は確認されていない。なお、窯49周辺については、未調査であり詳細は不明である。

吉祥寺遺跡周辺（図29）

鏡山古窯址群の範囲外ではあるが、西側に位置する現在の吉祥寺遺跡範囲内においても分布調査を行っている。散布地73、74が該当する。なお、古墳の状況や石室の開口方向などが地図に明記されている。

以上、各表採地について報告した。

なお、各資料の詳細な時期等については、資料に地域色が色濃くみられることから判然としない。（註6）前述のとおり鏡山古窯址群内での変遷については、これまで鏡山古窯址群資料が少ないことから、あまり研究が進んでいない状況であった。しかし、今回多くの資料が寄贈されたことによって変遷をある程度追える可能性がある。

そこで、鏡山古窯址群の変遷について今回報告した資料とこれまでに野洲市が行った調査成果（註7）や先行研究の成果等を踏まえて、若干の考察を試みたい。

5. 鏡山古窯址群資料の特徴について

鏡山古窯址群資料の変遷を考察するにあたって、まずは鏡山古窯址群の資料の特徴についてまとめた。

鏡山古窯址群資料の特徴については、田辺昭三氏（田辺 1981）、畑中英二氏（畑中 2002）我妻裕哉氏（我妻 2024）などの研究者が検討している。以下にこれまでに指摘された鏡山古窯址群資料の特徴をまとめる。

- ①杯の身蓋ともに、口径に比して器高が深く全体的にずんぐりした形状である。（畑中 2002）
 - ②杯身の立ち上がり端部は成橋 11 号窯（6 世紀前半頃）において面をもつが、以降は立ち上がり端部を丸く収めるものが主体となる。（畑中 2002）
 - ③杯蓋の口縁端部の面および稜も沈線化しつつも成橋 5 号窯（7 世紀前半）まで残る。（畑中 2002）
 - ④ロクロ回転方向は大篠原窯後第 1 地点（7 世紀中葉頃）に右回転に固定される。（畑中 2002）
 - ⑤生産地の原料土は鉄分の含有量が多く、焼き上がりの色調がやや黒味を帯びる傾向を持っている。（田辺 1981）
 - ⑥夕日ヶ丘北遺跡から、土鈴や棒状須恵器、大型杯等が生産され、その後も小山遺跡などで、て状口縁須恵器（写真 1）、蓋付き碗など特異な器形が生産される。（鈴木 2021）（註 8）
 - ⑦陶邑古窯址群では杯身の口径の縮小化が進む TK43、TK209 型式以後も鏡山古窯址群では大型杯が生産されている。なお縮小化の傾向は陶邑古窯址群と同様である。（鈴木 2021）
 - ⑧ヘラケズリ未調整の技法が鏡山古窯址群にて杯 G.B が出現する以前からみられる。（写真 2）（鈴木 2021）
 - ⑨杯身は大型杯以外にも立ち上がりが高いものを生産し続ける。（鈴木 2022）
 - ⑩杯は身蓋共に器壁が厚いものがみられる。（鈴木 2022）
 - ⑪夕日ヶ丘北遺跡出土ハソウなど杯以外にも大型の器形がみられる。（鈴木 2021）
 - ⑫須恵器蓋杯が口径に対して器高が高い深手の形態を示すこと。（我妻 2024）※①と関連
 - ⑬全体的に細部の形状が鈍く杯蓋肩部の稜や杯身の口縁端部の段が早くに失われること。（我妻 2024）※②と関連
 - ⑭陶邑窯谷山池地区を除く大部分でロクロ右回転による須恵器製作が行われていた畿内の生産地に対して、ロクロ左回転での製作が主流であったほか、蓋杯外面に回転ヘラケズリをほとんど施さない個体も散見されること。（我妻 2024）※④、⑧と関連
 - ⑮鏡山系高杯（写真 3）など独自器種を生産していたこと。（我妻 2024）※⑥と関連（註 9）
- 以上が鏡山古窯址群の特徴である。（註 10）

6. 鏡山古窯址群北西麓（野洲市）の変遷について

鏡山古窯址群資料の変遷については、畑中氏が過去に野洲市地域において採取された資料の整理・資料化を行うとともに考察をおこなった。その結果、4つのグループに大別された。（畑中 2002）その後、辻川哲朗氏が夕日ヶ丘北・大篠原西遺跡の発掘調査報告書にて概要をまとめられた。（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2007）概略として以下の通りである。（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2007 P361～362 参照）

1 群（6 世紀前半頃）（※成橋 11 号窯）

杯 H 蓋は口径 12cm 程度で口縁端部に段をもつ。体部から口縁部にかけての稜は明瞭である。身の

立ち上り端部には面をもつ。蓋、身ともにヘラケズリ調整が施される。短脚高杯の脚は3方向透かしでカキメ調整が施される。

2群（6世紀後半頃）（※夕日ヶ丘窯址、夕日ヶ丘北遺跡、成橋4号窯、小山2or3号）

杯H蓋は口径11.5cm～17.5cmを測る。なお主体は14cm～15cm台である。口縁の端部を丸くおさめ、稜には沈線をめぐらす例がある。身の立ち上がりはまるくおさめ、底部内面に同心円文当て具痕跡を残すものがある。いずれも回転ヘラケズリを施す。高杯には長・短があり、円形・長方形スカシを3もしくは4方向に入れる。

3群（7世紀前半頃）（※成橋5号窯、成橋3号窯、小山1号窯、小山窯跡、小山2or3号）

杯H蓋は口径11cm～14cm台で、主体は12cm台である。口縁端部を丸くおさめ、稜には沈線をめぐらすとともに、稜がみられない例もある。身の立ち上がりもまるくおさめている。いずれも回転ヘラケズリ不調整。高杯には長・短があり、2段に2もしくは3方向で長方形スカシをいれる。杯Gが確実に出現している。

4群（7世紀後半頃）（※大篠原東窯跡第1地点、小山八田窯跡・大篠原窯跡村田製作所用地D区、大篠原東窯跡A地点西・同A地点南）

杯H蓋は口径10cm～13cm台である。口縁端部を丸くおさめ、稜はみられない。身の立ち上がりも丸くおさめている。いずれも回転ヘラケズリ不調整。この段階で杯A・Bが主体となり杯G・Hがそれに伴う。杯Bの蓋にはかえりをもつがあらわれる。

以上の様に変遷案をまとめられた。

上記の変遷案では、2群の特徴として「（杯Hに）回転ヘラケズリ調整を施す」とされているが2群に属する夕日ヶ丘北遺跡（野洲1983）からは少数ながらヘラケズリ不調整の資料が散見され、夕日ヶ丘遺跡（野洲市1996）では、杯H蓋の口縁端部に段を持ちながらも蓋身ともにヘラケズリ不調整が一定数みられる。また我妻氏が指摘する鏡山系高杯が夕日ヶ丘遺跡のみで見られることから夕日ヶ丘北遺跡と夕日ヶ丘遺跡には時期差が認められる。さらに、その他の大型杯や蓋付き椀等の特異な器形の出現時期等も考慮する必要があるだろう。

そこで、上記の変遷案を基に以下の様に変遷案を考えてみた。（図16、17）（註11）

また少々強引ではあるが目安として陶邑編年（田辺編年）との比較も明記する。なお（ ）内は野洲市が調査・所蔵している資料を示している。

鏡山古窯址群資料の変遷私案

1群（夕日ヶ丘北遺跡（一部）、2-2号窯、夕日ヶ丘21号墳、）TK47型式～MT15型（註12）

1群に該当する資料数は他の群と比べると極少数であり、鏡山古窯址群にて窯業生産が開始されて間もない時期と思われる。

杯H蓋は口径12cm程度で口縁端部に段をもつ。体部から口縁部にかけての稜は明瞭である。杯H身の立ち上り端部には面をもつ。夕日ヶ丘21号墳の杯Hは、陶邑古窯群のTK23号TK47号出土須恵器と比較すると、器壁が厚くやぼったい印象を受ける。短脚高杯の脚は3方向透かしで長方形透かしが多く、カキメ調整が施される。

2群（夕日ヶ丘北遺跡、窯33、窯43、窯44）MT15型式～MT85段階

1群と比較する資料数が多い鏡山古窯址群での生産量が增大した時期と思われる。

杯H蓋の口縁の端部は段をもつ。天井部にはヘラケズリ調整を施す。体部から口縁部にかけての稜は明瞭であるものが多い。

杯H身の立ち上り端部は丸くおさめる。なお、少数ではあるが窯44の杯H身のように立ち上

がりが2.0cm程度の高いものがある。外面底部にはヘラケズリ調整を施す。底部内面に同心円文当て具痕跡を残すものがあり、独特な当て具も見られる。

高杯には長・短があり、円形・長方形スカシを3もしくは4方向に入れ、円形透かしのものが多い。甔、土鍾、提瓶が出現する(註13)。なお、提瓶確認できる範囲であるが把手の接合部分が口縁部に近いものが大半である。(註14)

大型杯、大型ハソウ、棒状須恵器、土鈴など特異な器形が出現する。(註15)

3群(夕日ヶ丘遺跡、窯35、窯38) MT85段階～TK 43型式

引き続き生産量は多い時期である。

杯H蓋の口縁の端部は段をもつ。体部から口縁部にかけての稜はやや弱くなり、沈線をめぐらす例もある。杯H身の立ち上がり端部はまるくおさめる。蓋・身のいずれもヘラケズリ不調製のものが多くなる。

高杯は長脚2段高杯が確実に出現する。(註16) 特異器形として、大型のすり鉢や前段階に引き続き大型杯が生産される他、鏡山系高杯(図17)が出現する。

4群(小山遺跡 窯21、窯23、) TK 209型式～TK 217型式

前段階までは主に成橋支群にて主に生産されていたが、この段階になると入町支群での生産量が増大する。

杯H蓋の口縁の端部は段をもつものが激減し段をもたないものが主体となる。体部から口縁部にかけての稜は弱くなり、ほとんど認められないものもある。杯H身の立ち上がりは低く端部はまるくおさめる。蓋・身のいずれもヘラケズリ不調製のものが主体となる。

高杯は、短脚の透かしの無いタイプ(註17)や長脚2段等が見られる。なお長脚の透かしは2、3方向である。さらに長脚高杯には大型のタイプも散見される。

蓋付き椀や小型椀など金属製品の模倣品と思われる器種が出現するが、杯Gの生産量はかなり少ない。(註18)

大型杯は前段階に引き続きが生産され、口径20cm以上のものがみられるようになる。提瓶も多く生産され、把手はボタン状のものも散見されるがリング状のものが主体である。なお把手の位置は口縁部に近い。

5群(大篠原東遺跡) TK 217型式以後 ※検討中

成橋支群での生産量は激減し、大篠原周辺での生産量が増大する。

杯Hがかなり減少し、かえりのない蓋が現れる。また、いわゆるて字状口縁須恵器(註19)が出現する。その他詳細は検討中である。

以上、畑中氏、辻川氏の変遷案を基に今回の寄贈資料から得られた成果を加え変遷案を考えてみた。畑中氏、辻川氏の変遷案との主な相違点は、両氏が設定する鏡山2群を「杯Hにヘラケズリ不調製が見られるか否か」、「鏡山系高杯が認められるか否か」を基準に2つに分け、大別を5グループにしたことがあげられる。(註20)

7. さいごに

以上のように小稿では野洲市に寄贈された鏡山古窯址群資料の報告及び変遷案を提示した。

しかし、今回紙面等の都合より竜王町側資料の詳細な報告が出来なかった。さらに鏡山古窯址群の変遷についても見通しを述べるのみにとどまり、各群における明確な特徴や特異器形の変遷、大篠原

支群を含めた5群の検討、北東麓を含めての検討など多くの課題が残った。別稿にて報告・検討したい。

【謝辞】小稿を執筆するにあたり、岩越陽平氏、我妻佑哉氏の両氏には多大なご指導、ご協力を賜りました。また下記の方々・機関から御協力・御教授いただきました。末筆かつご芳名を列挙する形で恐縮ですが深謝申し上げます。(敬称略)

大西遼、大橋信弥、尾野善裕、金井千紘、金田明大、佐藤亜聖、鈴木久男、辻川哲朗、土橋明梨紗、中里信之、永田信一、畑中英二、花田勝弘、菱田哲郎、水橋公恵、三原翔吾、望月精司、本吉恵理子、森川実、山崎公輔、山田邦和、近江土器検討会、龍谷大学付属平安高等学校、野洲市教育委員会の皆様

[註]

- (1) 調査参加者の聴き取りによる。
- (2) 4を杯身であるとするならば、まさに「杯H身の立ち上がり部分を欠いたような皿状を呈して」おり、図面からの判断ではあるが日置荘遺跡須恵器窯P-1から出土したものの類似する(江浦洋1995)。なお後述する、て字状口縁須恵器とも類似するが器高が低い。
- (3) 窯46、47は地図に明記されていない。
- (4) 散布地63は2か所記入してあるが、どちらも成橋支群に位置する。
- (5) ただし、成橋支群から北に50m程度はなれた所の調査では、集落の溝から杯Gと思われる細片が少数確認されている。(滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2007)
- (6) 鏡山古窯址群の地域色が色濃く陶邑編年(田辺編年)との比較が困難であることは、畑中氏がすでに明快に述べられている。(畑中2002)
- (7) 過去に野洲市が行った鏡山古窯址群関連の調査の概略は以下の通りである。

・夕日ヶ丘北遺跡(昭和57(1983)年度調査)

昭和57(1983)年度調査は、160基近くの土坑が確認されており粘土採掘坑との見解がある。灰原や窯体は確認できていないが、焼き壺みや生焼けの須恵器が大量に出土していることから、調査地上方にある灰原から流出したものであると考えられている。また、須恵質の埴輪も出土している。

・夕日ヶ丘遺跡(平成8(1996)年度調査)

調査では主に中世の建物跡等が検出された。須恵器は谷部の2次堆積層から出土した。須恵器の多くは焼き壺が激しいものなどが複数含まれることから、山の上部より窯、灰原の資料等が流れ込んだものと推察される。

・小山遺跡(平成6(1994)年度調査)

調査では灰原遺構が確認され、焼き壺みの土器や焼土が確認されたが、窯体の発見には至らなかった。なお、灰原は上層・中層・下層のおおよそ3層にわかれており、報告書に掲載されている須恵器は地山直上の最下層から出土したものである。なお調査者によるといくつかの窯の資料が混じりあっている可能性が高いとのことである。

・大篠原東遺跡(平成10年(1998)～12年(2000)度調査)調査

調査では主な成果として室町時代頃の集落が確認された。しかし、調査区東側から南側にかけて大量の須恵器が出土した。なかには重ねやきで融着したものや壺みが激しいものが出土した。なお周辺では滋賀県教育委員会が昭和56年に調査を行っており、その調査では窯壁等が確認されている。

・夕日ヶ丘21号墳

夕日ヶ丘古墳群の西端に位置する古墳である。資料は新幹線工事に伴う土取り工事中には出土したものであり、その詳細は不明であるが、一括して出土したものとされる。また、資料のほとんどが完形であり焼き歪み等が少ないことから、窯からの出土ではなく古墳からの出土品として取り扱われる。

(8) 鏡山古窯址群にて生産されたかは判然としないが、野洲市内出土須恵器の特異器形として、台形型須恵器（中畑・古里遺跡）、小型長脚高杯、蓋の天井部に2カ所穴があけられている蓋付小型壺（木部天神前古墳）等があげられる。

(9) 我妻氏は鏡山系長脚1段有蓋高杯の特徴として①脚部がスカート状に広がる形態をとる、②脚端部はやや外反しながら面あるいは稜をつくる、③脚部に透かし孔が穿たれない、④脚部や杯部下半にカキメの施される場合が多い、⑤脚部と杯部あるいは蓋の天井部とつまみ部に放射状の浅い沈線が施された個体が一定数存在する等をあげている。（我妻2024）

なお鏡山系長脚1段有蓋高杯には脚部が6cm以下のものが散見されるため、岩越陽平氏がその特徴を指摘する「長脚1段有蓋高杯」には含まれるものではない。（岩越2024）しかしながら前段階の高杯と比較すると確実に長脚化は認められるため、本稿では長脚1段か否かについては明言を避け我妻氏が指摘する特徴をもつ高杯は鏡山系高杯と仮称する。

(10) 特徴の中でも陶器編年との比較を困難にさせているものは「③杯蓋の口縁部に段が残っていること」「⑦口径が大型のものが残っていること」「⑨ヘラケズリ不調整が早くみられること」が挙げられる。

(11) 今回寄贈された資料の多くは成橋支群・入町支群の資料であったため、7世紀頃の資料を多く含む大篠原支群資料を考慮出来ていない。そのため5群については検討中とした。

(12) 夕日ヶ丘21号墳資料は古墳資料であるがこれまで鏡山古窯址群で生産されたという指摘もあることから、1群の資料として含めた。なお当古墳資料には地域色は認められるものの甲賀市に位置する泉窯(TK47～MT15型式)にて生産された可能性があるため今後検討が必要である。

(13) 1群の段階から出現している可能性はある。

(14) 我妻佑哉氏にご教授いただいた。

(15) 木部天神前古墳等から出土している小型長脚高杯や小型壺等もこの時期から生産していると思われる。

(16) 長脚2段高杯は2群段階から出現していると思われるが今のところ確認出来ていない。

(17) 前段階でみられた鏡山系高杯の系譜の可能性はあるが、脚部にカキメが無く、脚端部の様相も異なるため直接的な変遷であるかは判然としない。

(18) 野洲市が行った小山遺跡調査資料には確実に杯Gと判断できるものは確認できず、また同時期と思われる窯21にも確認はできなかった。なお杯Gが多く認められるのは大篠原東遺跡からの段階であり、今後の検討によっては4群を杯Gの出現を定点とする新古の2段階に細分できる可能性がある。

(19) 口縁部が「て」字状を呈しており、まるで杯H身の立ち上がりや欠いたような形状。野洲市を中心に県内で散見する器形であり、石神遺跡にも出土しているようである。（徳綱2011）なお、鏡山古窯址群で生産されており産地特定の材料として注目できる。

(20) 地域色の濃淡について

鏡山古窯址群資料の地域色について、1群では「胎土が砂粒を多く含み色調は黒味を帯びる」ことや、「杯Hの器壁の厚みがTK47号窯やMT15号窯と比較すると分厚くやばった印象を受ける」こと等があげられるが、その他調整等についての差異はなかなか認められない。

しかしながら、3群、4群については上記の特徴に加え「杯H身蓋ともにヘラケズリ不調整が早くに見られながらも杯H蓋の段取りは3群まで残る」、「棒状須恵器、大型杯、鏡山系高杯などの特徴的な器種が生産される」など、1群と比較するとかなり地域色が色濃くみられる。その後、5群については検討中ではあるが特徴的な器形である「て字状口縁須恵器」が生産されるものの、杯H、杯G等の調整等の特徴はみられない。

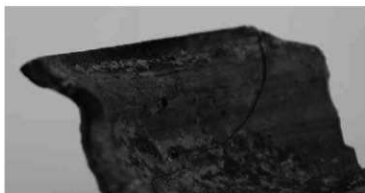
以上のことから、鏡山古窯址群内にて生産が開始した1群では地域色が薄く、2、3群ではかなり色濃くなり、4群になるとやや薄くなるという傾向がある。

参考文献等

- 岩越陽平 「六世紀初頭における地方窯の分布とその背景に関する考察」『待兼山考古学論叢Ⅲ』大阪大学考古学研究室
- 岩越陽平 「南阿田大塚山古墳出土須恵器についての考察」『南阿田大塚山古墳』奈良県立橿原考古学研究所 2022
- 岩越陽平 「須恵器からみた東谷山古墳群の時代の尾張・畿内とその周辺」『東谷山古墳群の時代と須恵器研究』しだみゅー歴史講演会・東海古墳時代研究会、2024
- 江浦 洋 「陶邑周辺部における須恵器生産点描」『日置荘遺跡』財団法人大阪文化財センター 1995
- 角 建一 「古墳時代における須恵器変遷とその背景」『考古学雑誌』第83巻2号 日本考古学会 1998
- 角 建一 「鏡山における須恵器窯跡の分布と実態 一竜王町鏡山出土資料を中心に」『野洲町歴史民俗博物館研究紀要』野洲市歴史民俗博物館 2001
- 北野博司・畑中英二・浅生卓司・穂田和樹・菅原雄一
「須恵器の成形における轆轤回転」『日本考古学協会第68回総会 研究発表要旨』日本考古学協会 2002
- 佐野由美子 「鏡山古窯址群の成立と操業集団」『一山典選暦記念論集 考古学と地域文化』一山典選暦記念論集刊行会 2009
- 鈴木 茂 「鏡山古窯址群の諸様相について 一野洲市所蔵資料の再整理をとおして」『野洲市歴史民俗博物館研究紀要』25号 野洲市歴史民俗博物館 2021
- 鈴木 茂 「夕日ヶ丘21号墳資料及び夕日ヶ丘古窯2-2号資料について 一鏡山古窯址群関連資料の整理」『野洲市歴史民俗博物館研究紀要』26号 野洲市歴史民俗博物館 2022
- 田辺昭三 『陶邑古窯址群1』平安学園考古学クラブ 1966
- 田辺昭三 『須恵器大成』角川書店 1981
- 徳網克己 「西河原遺跡群とその周辺」『琵琶湖と地域文化 一林博通先生退任記念論集』林博通先生退任記念論集刊行会 2011
- 富田尚弘 『鏡山古窯址群址群分布調査報告書』竜王町教育委員会 2008
- 萩本 勝 「山陰東部古墳時代後期の須恵器」『北山茂夫追悼日本史学論集 歴史における政治と民衆』1986
- 畑中英二 「6世紀と7世紀・須恵器生産における質的問題」『近江考古』10号 滋賀考古学研究会 1993
- 畑中英二 「滋賀県下における律令期須恵器生産の動向に関する検討」『紀要』2号 安土考古博物館

1994

- 畑中英二 『Ⅱ 滋賀県』『古墳出土須恵器集成 第2巻 近畿編 中村浩編』雄山閣 1998
- 畑中英二 『鏡山古窯址群（夕日ヶ丘遺跡・夕日ヶ丘北遺跡・小山遺跡・大篠原南遺跡・大篠原東古窯址）』『平成12年度滋賀県埋蔵文化財調査年報』滋賀県教育委員会 2002
- 林 純 『近江における古墳時代須恵器生産の特質』『滋賀考古』第6号 滋賀考古学研究会 1991
- 菱田哲郎 「須恵器生産の拡散と広域編年」『後期古墳研究の現状と課題Ⅱ - 古墳時代後期の須恵器をめぐって -』2024
- 丸山竜平 『野洲町史 上巻』野洲町教育委員会 1987
- 丸山竜平 『竜王町史 上巻』竜王町教育委員会 1987
- 我妻佑哉 「大規模群集墳に対する須恵器の供給とその特質：古墳時代後期の近江・美濃地域を対象に」『待兼山論叢・史学篇』2024
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 辻川哲朗編
『県営農業農村整備関係遺跡発掘調査報告書 夕日ヶ丘北遺跡・大篠原西遺跡』2007
- 野洲市教育委員会『1996年 埋蔵文化財調査年報』野洲市教育委員会 2005
- 野洲町教育委員会『三堂・野々宮遺跡他発掘調査報告書』野洲町教育委員会 1983
- 野洲町教育委員会『野洲町内遺跡分布調査報告書』野洲町教育委員会 1983
- 野洲町教育委員会『平成6年度野洲町内発掘調査報告書』野洲町教育委員会 1995
- 野洲町教育委員会『大篠原東遺跡発掘調査概要報告Ⅱ』野洲町教育委員会 2001
- 野洲町立歴史民俗資料館『須恵器の美と世界 - 鏡山古窯址の時代 -』野洲町立歴史民俗資料館 1999



※口縁部拡大



写真1 小山遺跡出土で字状字口縁須恵器



写真2 杯H身 底部ヘラケズリ不調整（夕日ヶ丘遺跡）



写真3 鏡山系高杯（夕日ヶ丘遺跡）

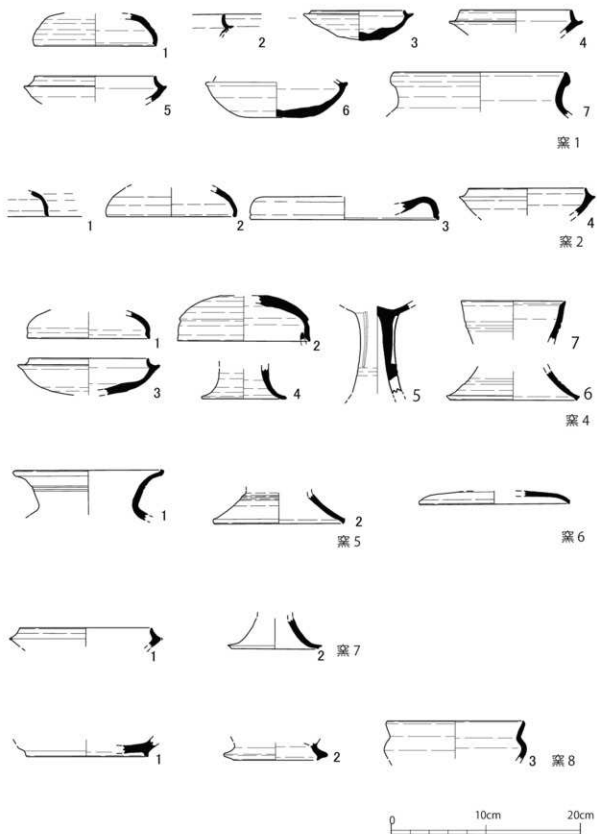


図1 鏡山古窯址群資料実測図

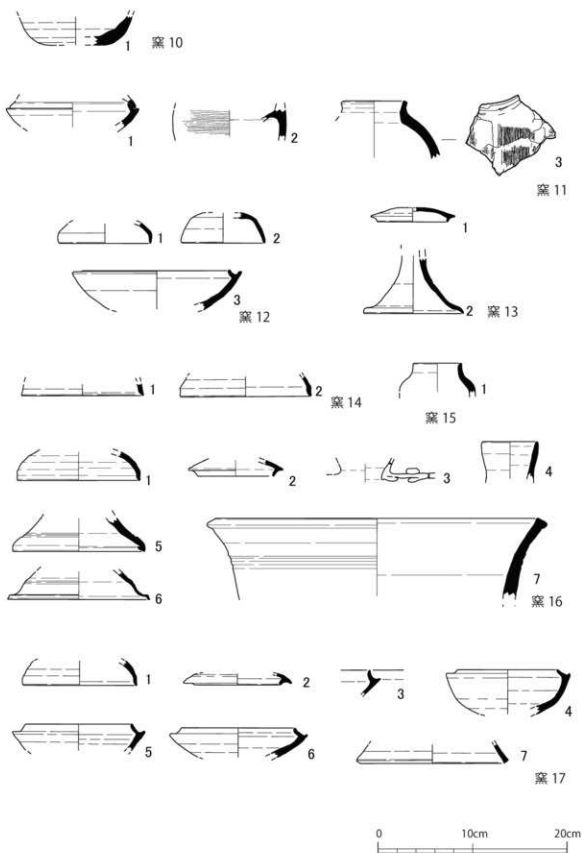


図2 鏡山古窯址群資料実測図

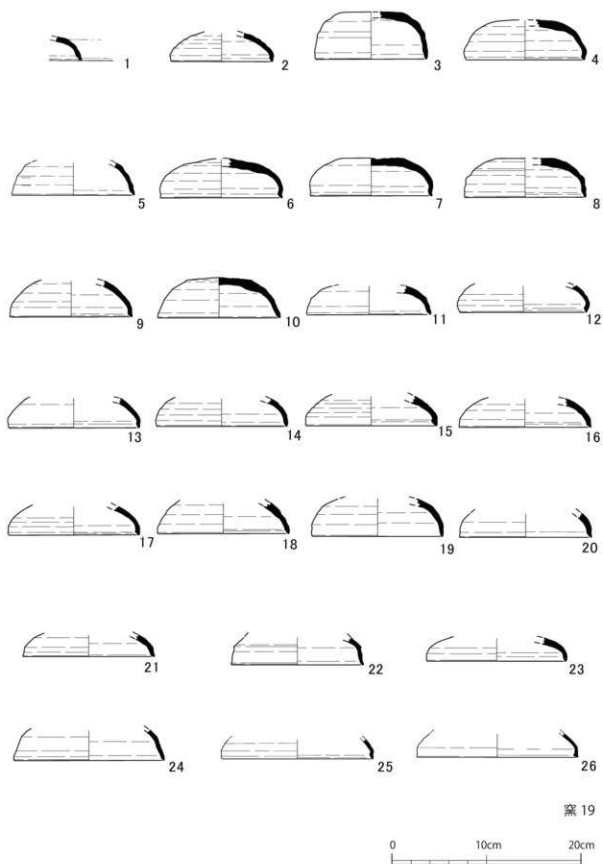


図3 鏡山古窯址群資料実測図

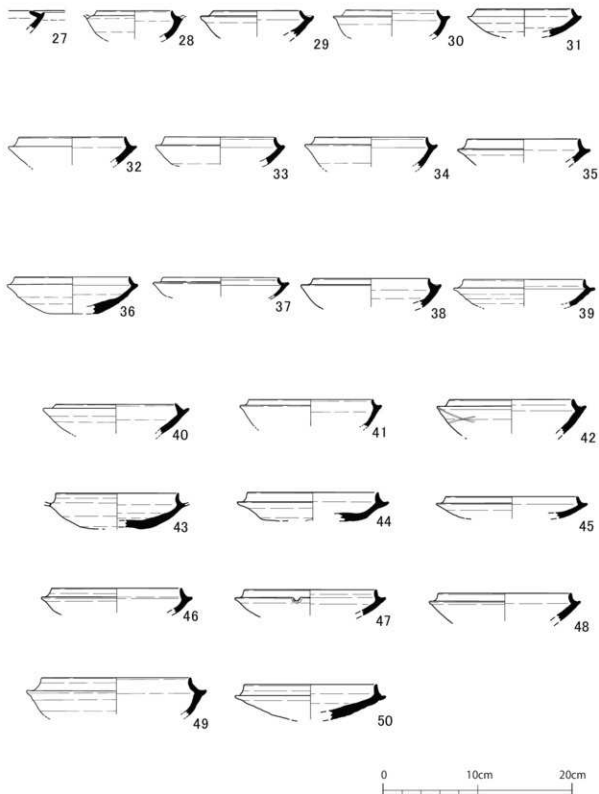


図4 鏡山古窯址群資料実測図

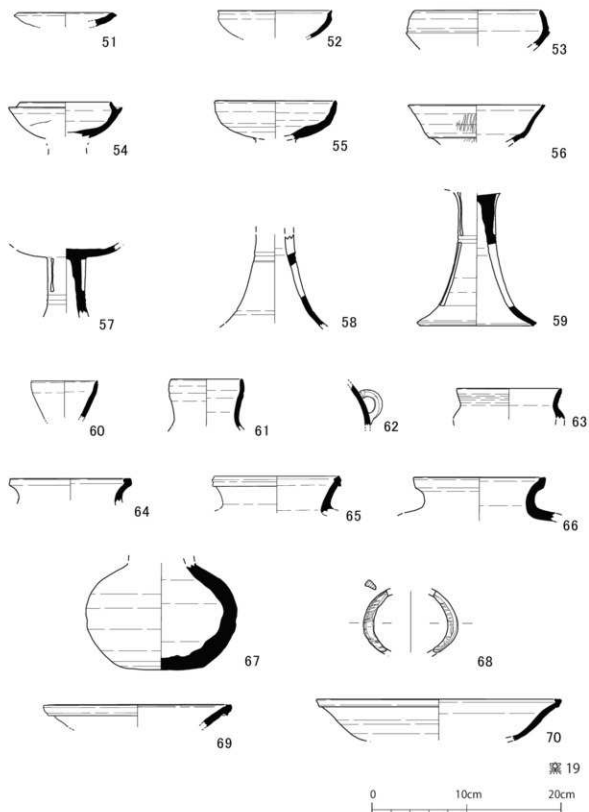


図5 鏡山古窯址群資料実測図

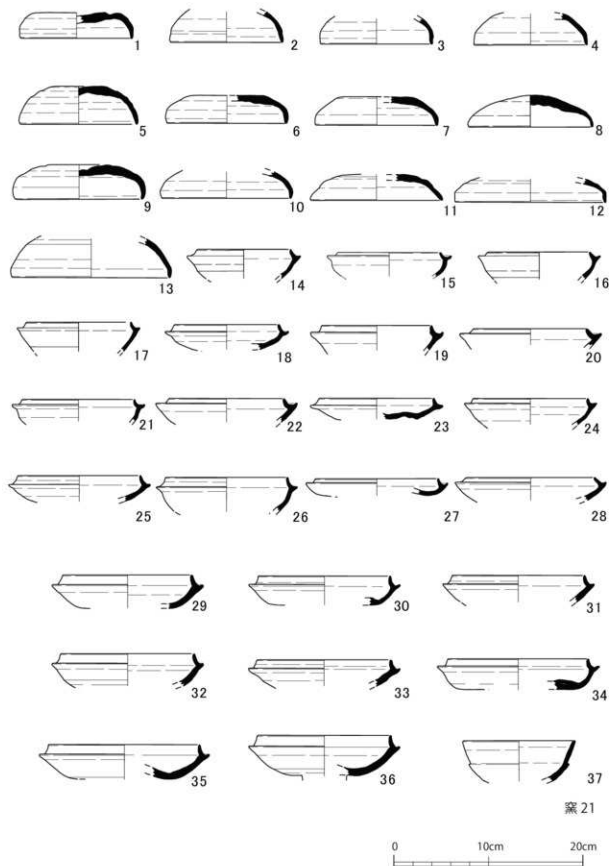


図6 鏡山古窯址群資料実測図

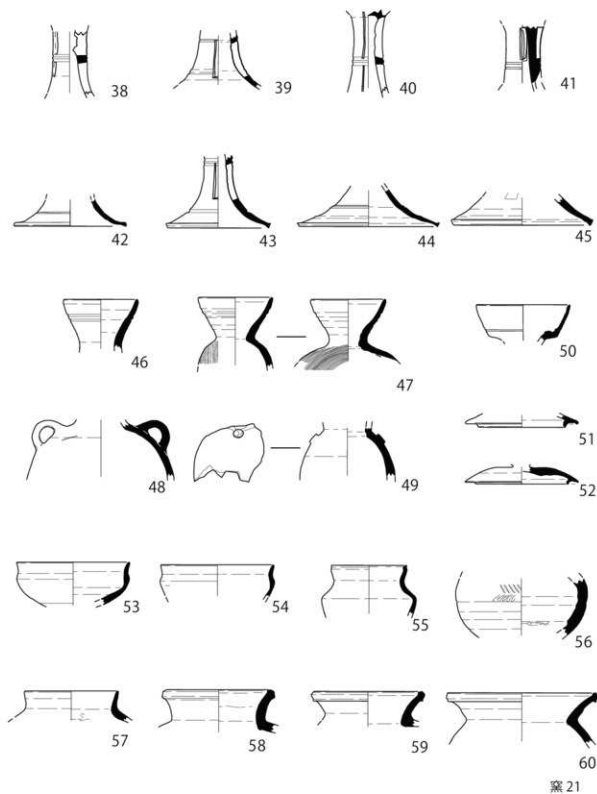


図7 鏡山古窯址群資料実測図

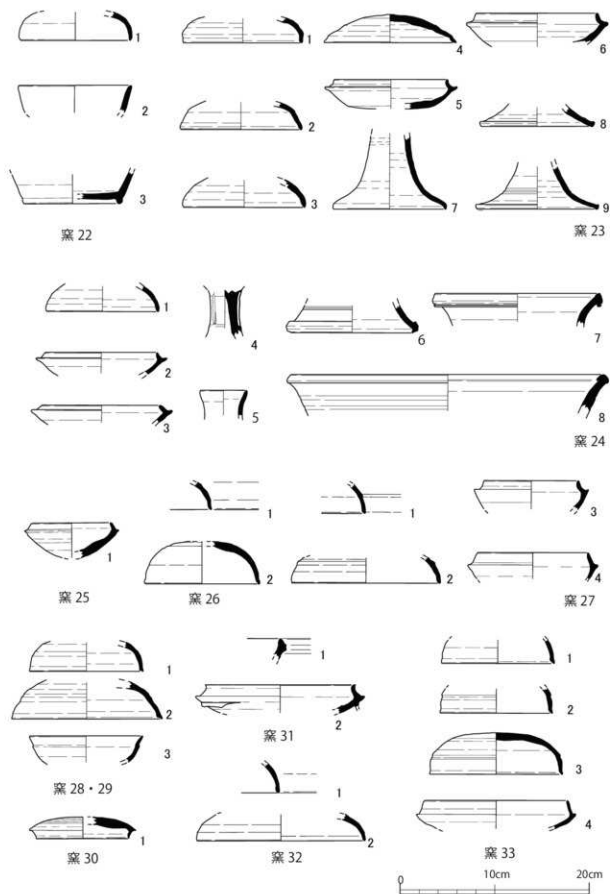


図8 鏡山古窯址群資料実測図

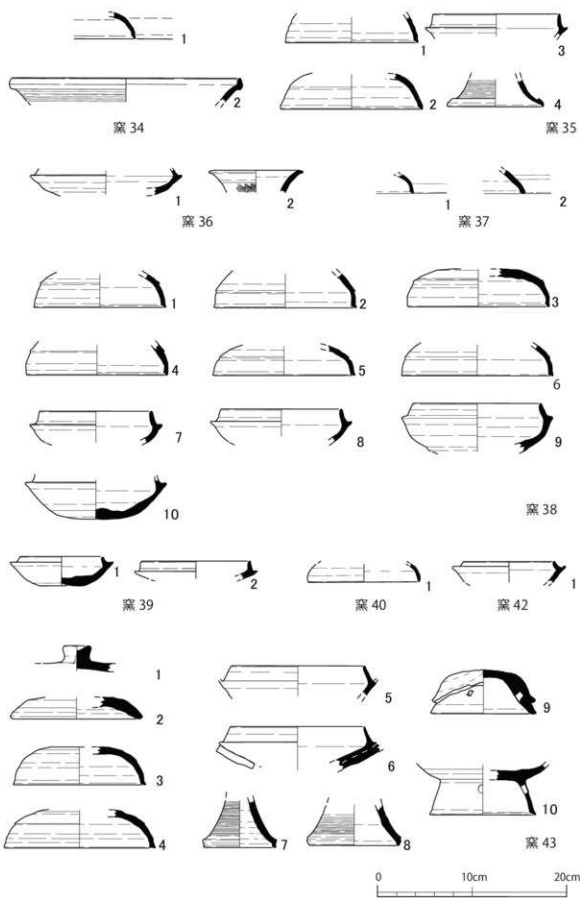


図9 鏡山古窯址群資料実測図

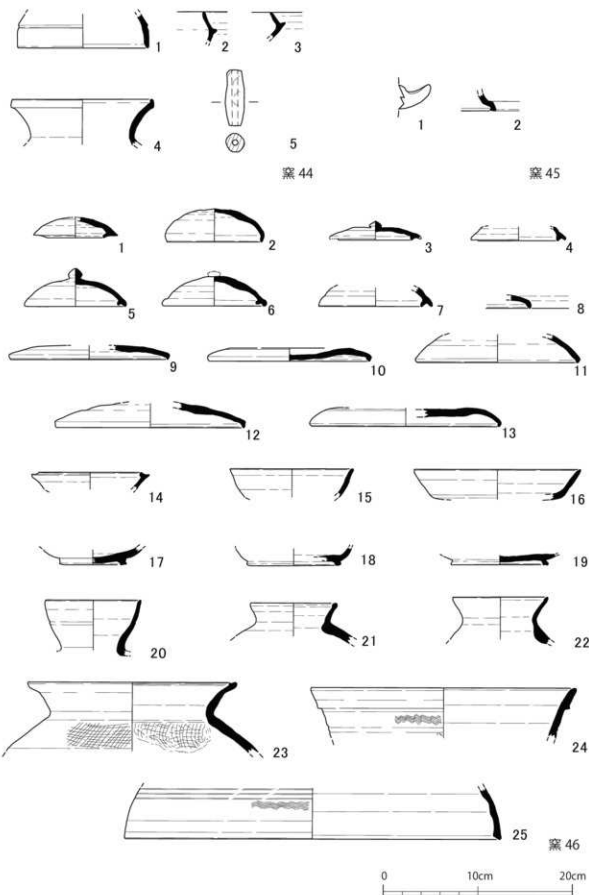


図 10 鏡山古窯址群資料実測図

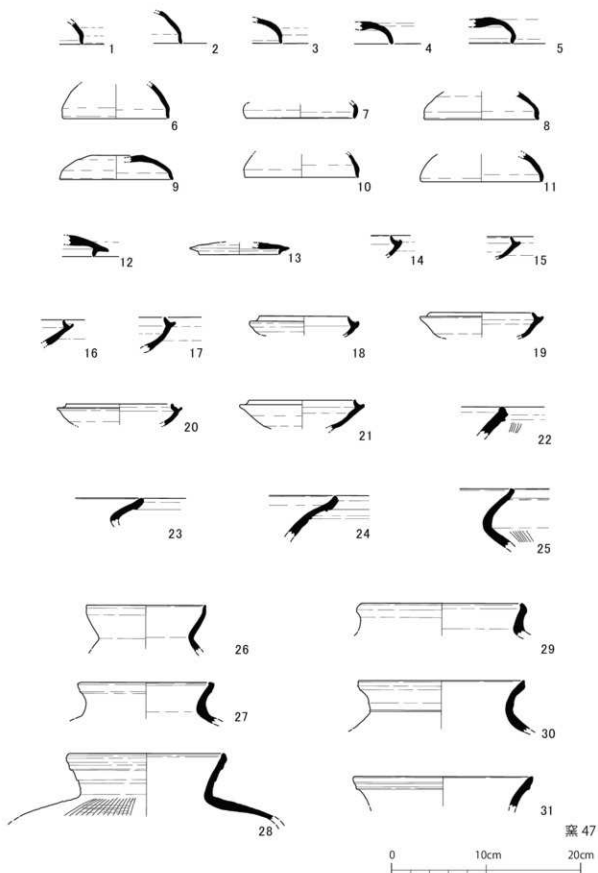


図 11 鏡山古窯址群資料実測図

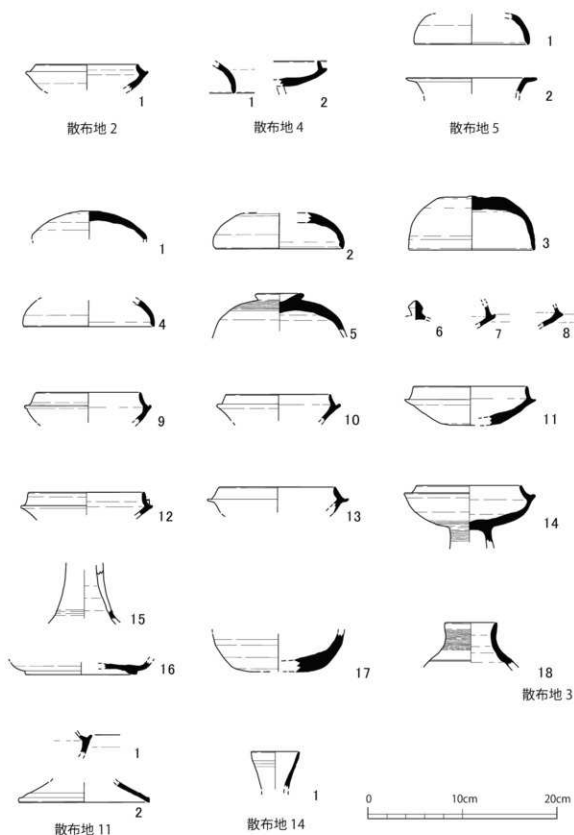


図 12 鏡山古窯址群資料実測図

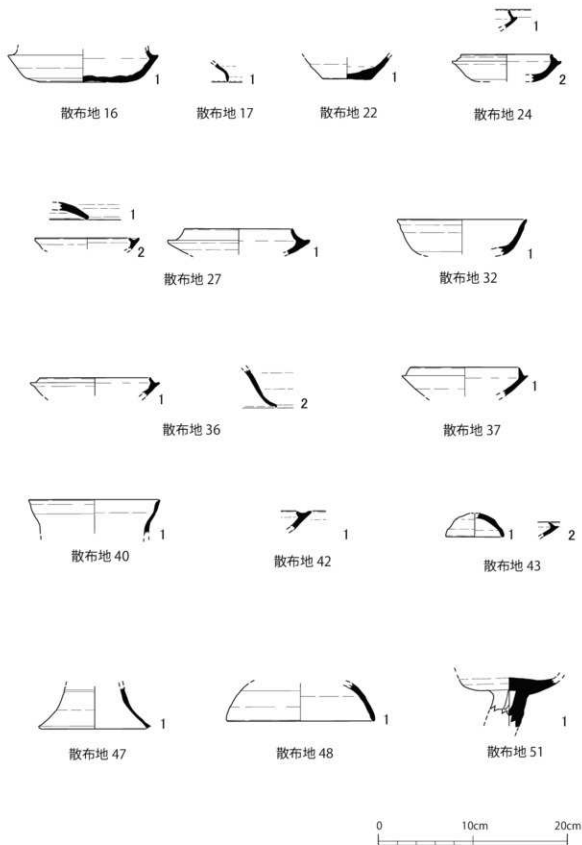


図 13 鏡山古窯址群資料実測図

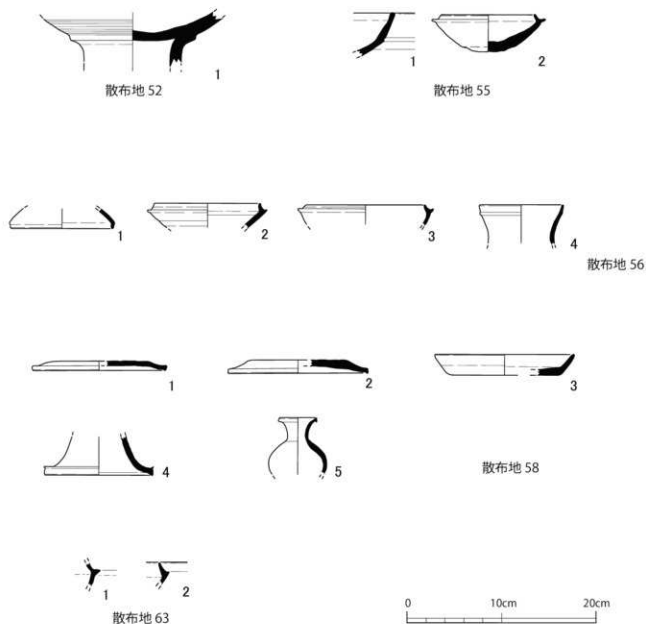


図 14 鏡山古窯址群資料実測図

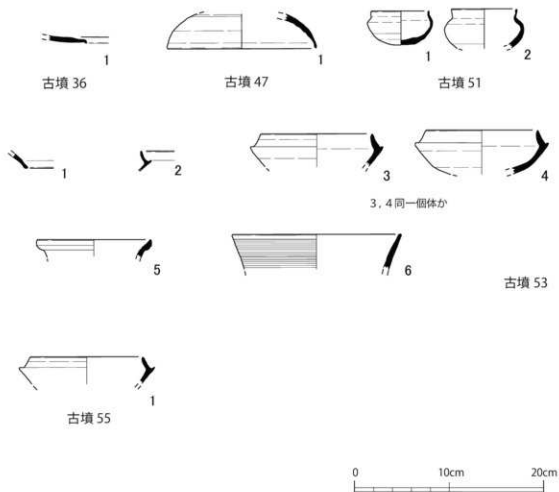


図 15 鏡山古窯址群資料実測図

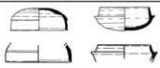
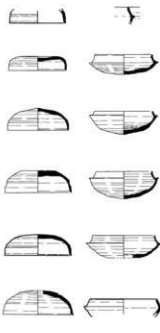
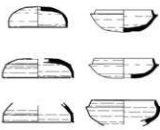
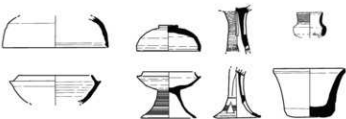
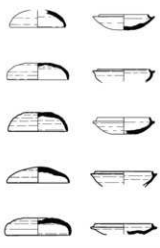
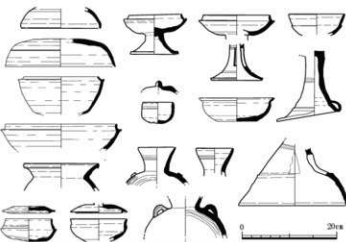
杯	大型杯、高杯、提瓶等	鏡山	陶器 (参考)
		1 群	TK47 型式 MT15 型式
		2 群	TK10 型式 MT85 段階
		3 群	TK43 型式 TK209 型式
		4 群	TK217 型式
検討中	検討中	5 群	

図16 鏡山古窯址群（北西麓）の変遷図（案）

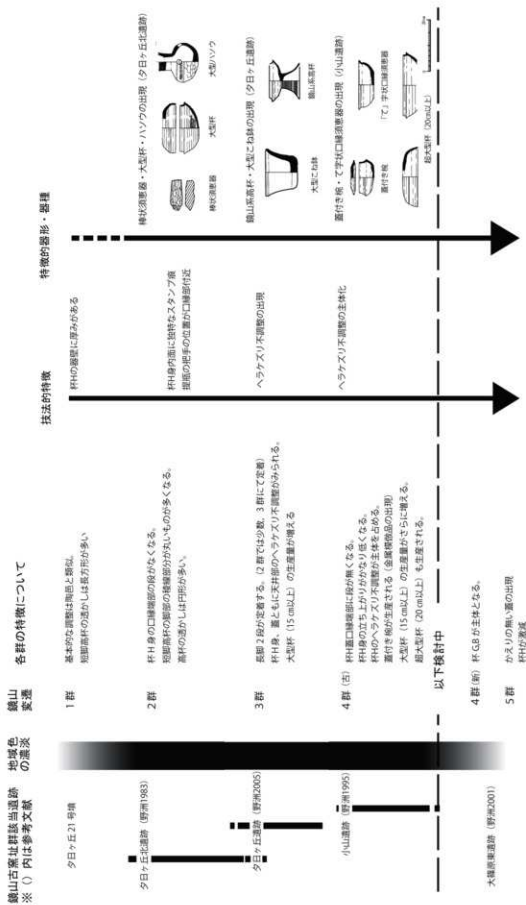


図17 鏡山古窯址群（北西麓）の変遷イメージ図

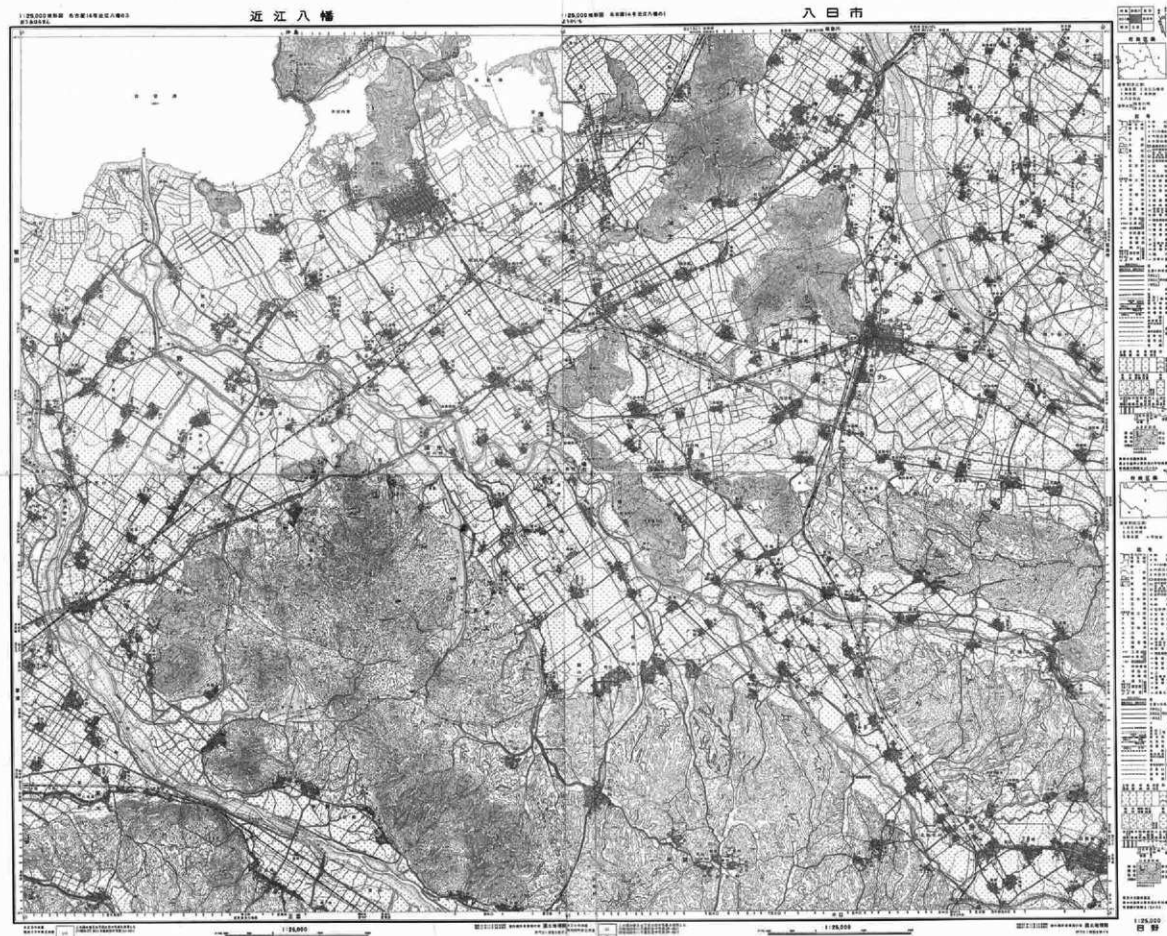


図18 分布調査範囲記入地図 (スケールは任意)

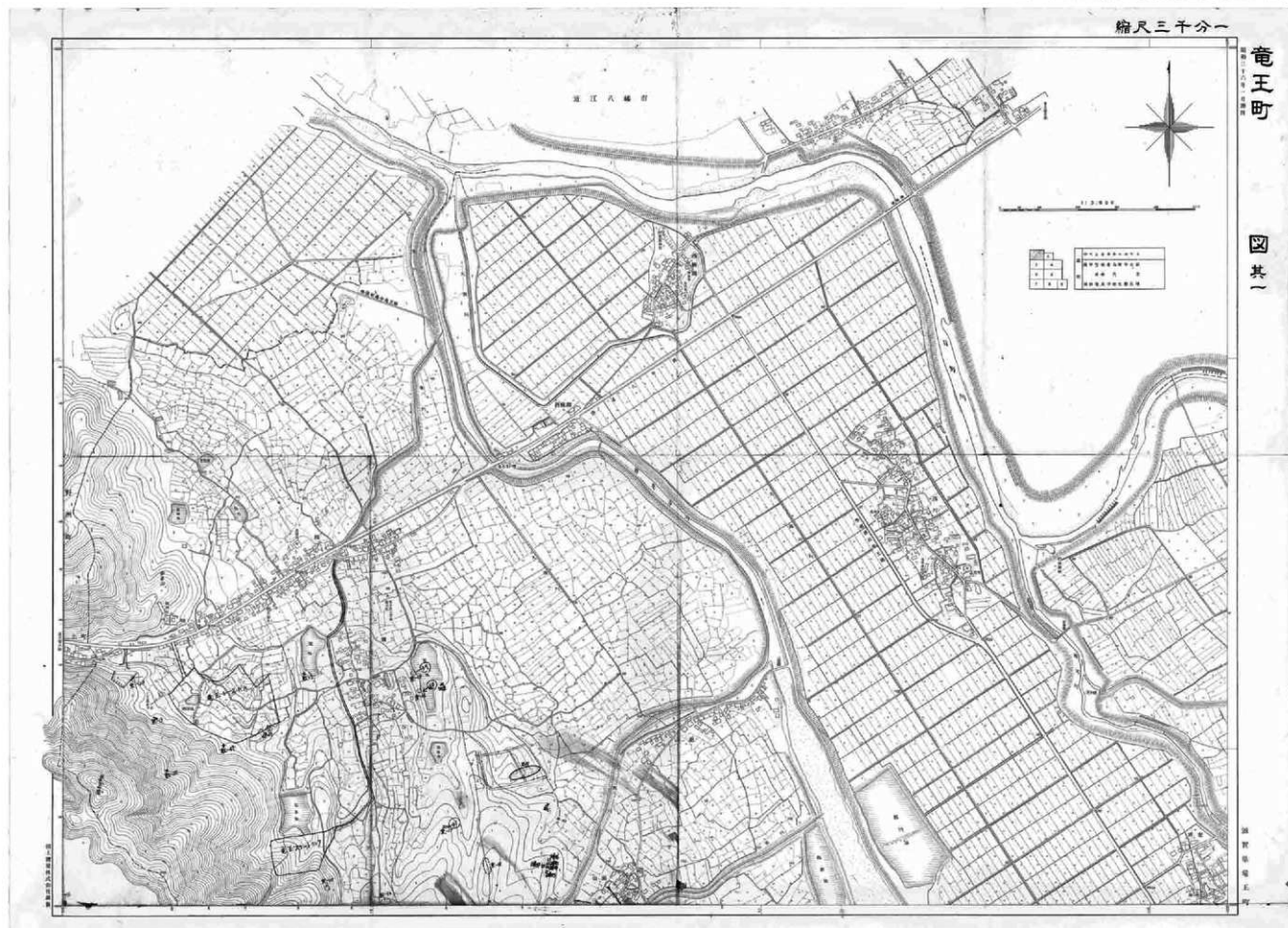


図 19 分布調査時所見等記入地図 竜王町 図其(一) (A) (スケールは任意)

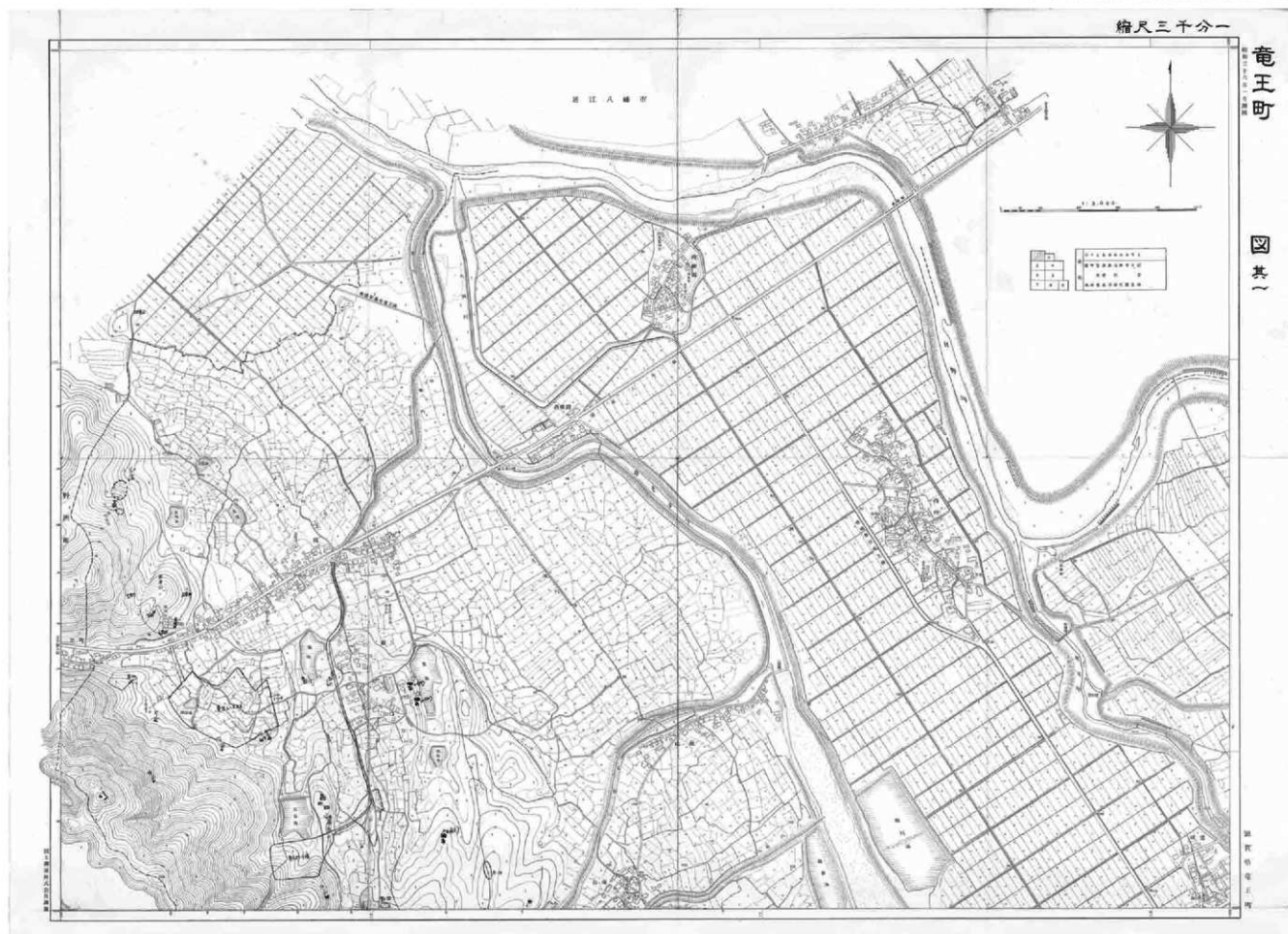


図 20 分布調査時所見等記入地図 竜王町 図其(一) (B) (スケールは任意)

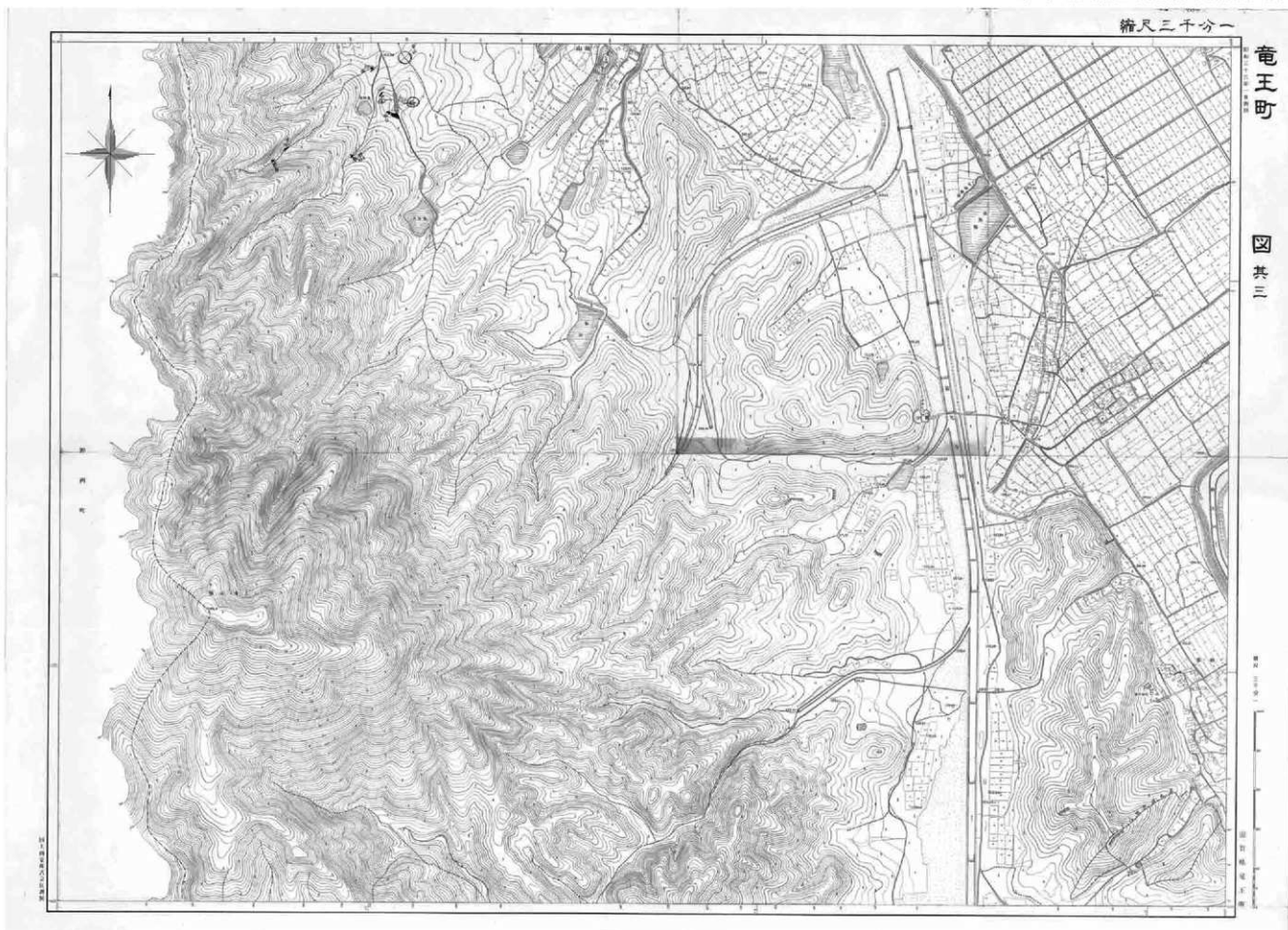
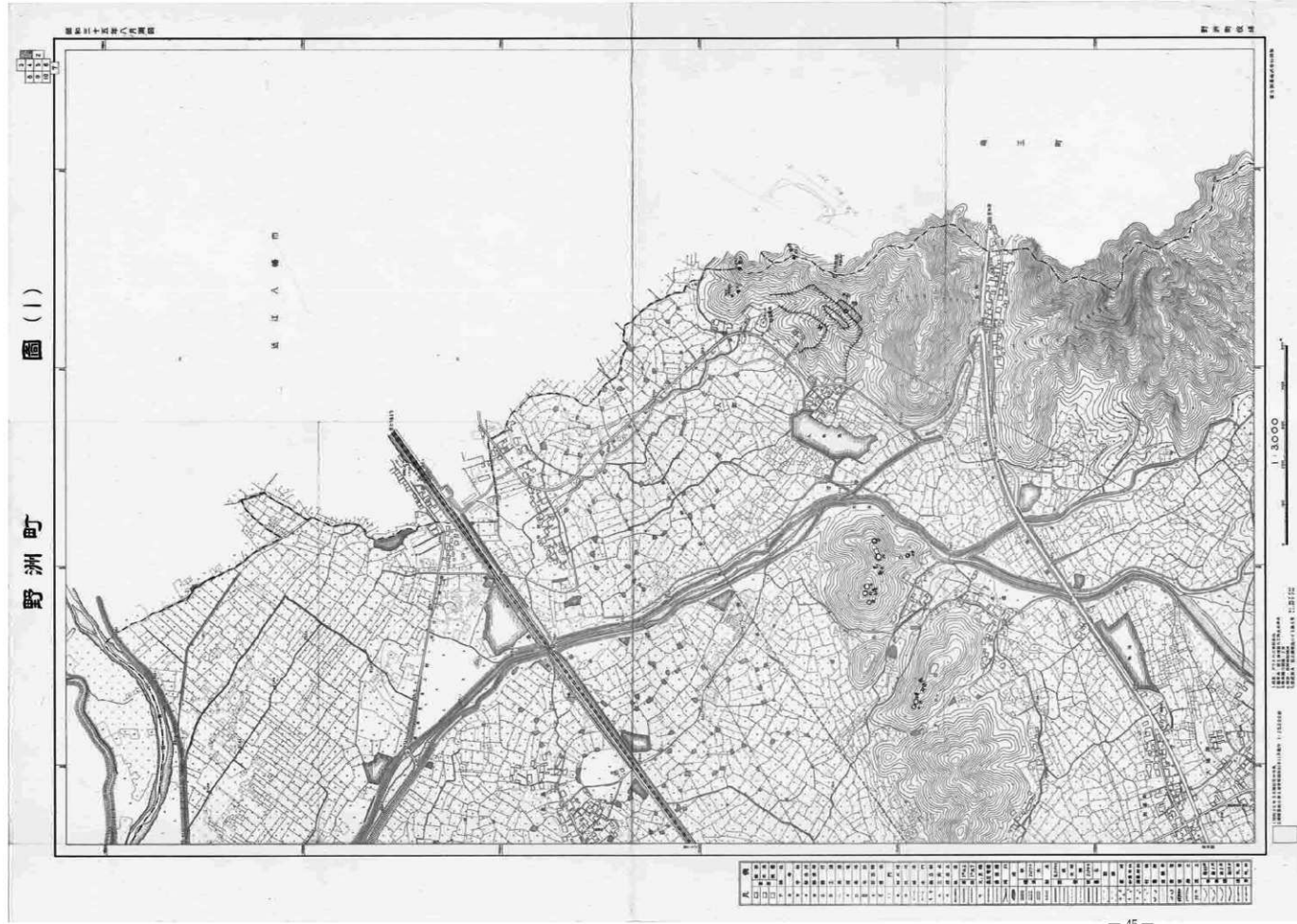


図 21 分布調査時所見等記入地図 竜王町 図其(三) (A) (スケールは任意)



図 22 分布調査時所見等記入地図 竜王町 図其三 (B) (スケールは任意)



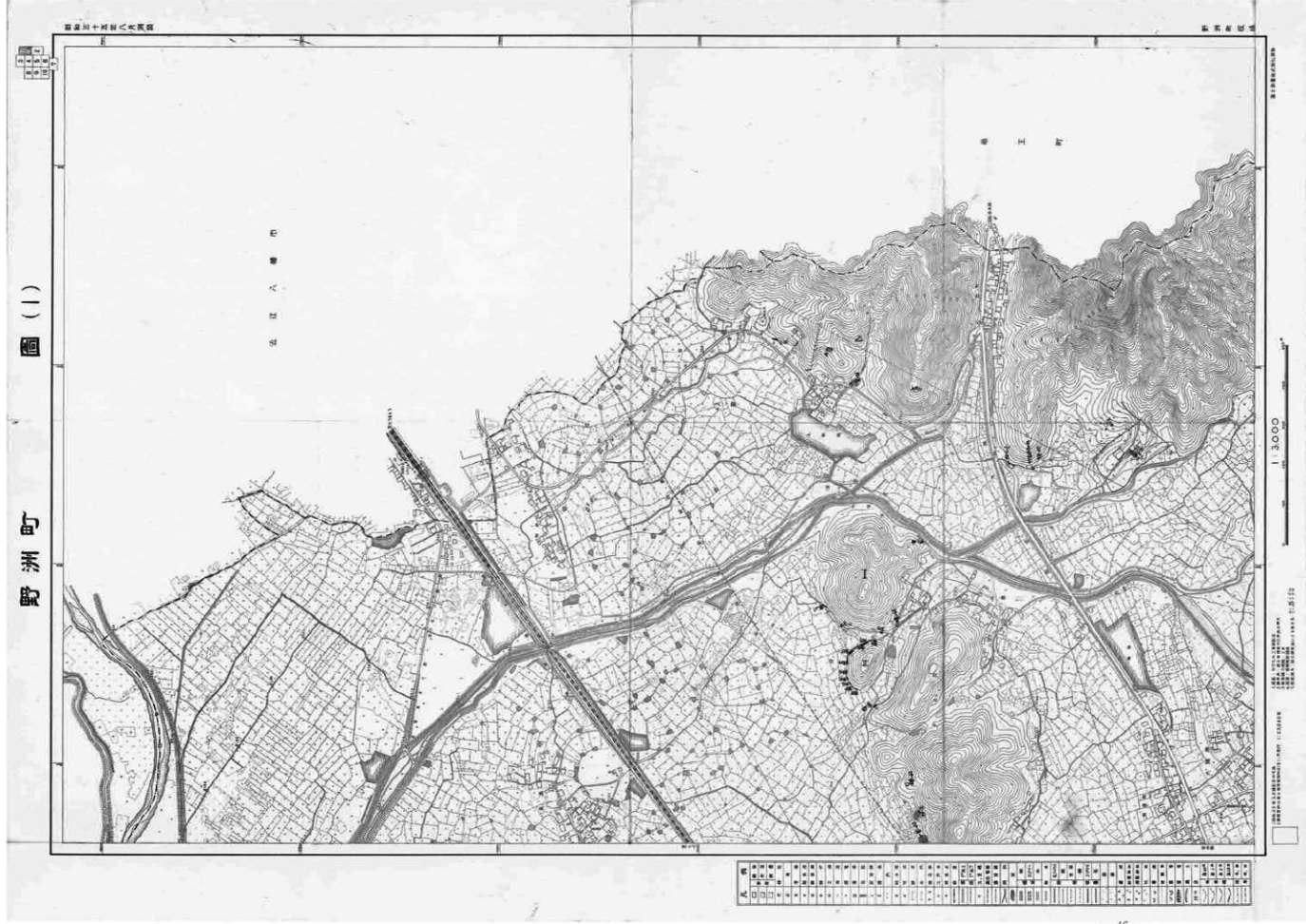


図 24 分布調査時所見等記入地図 野洲町 図其一 (8) (スケールは任意)

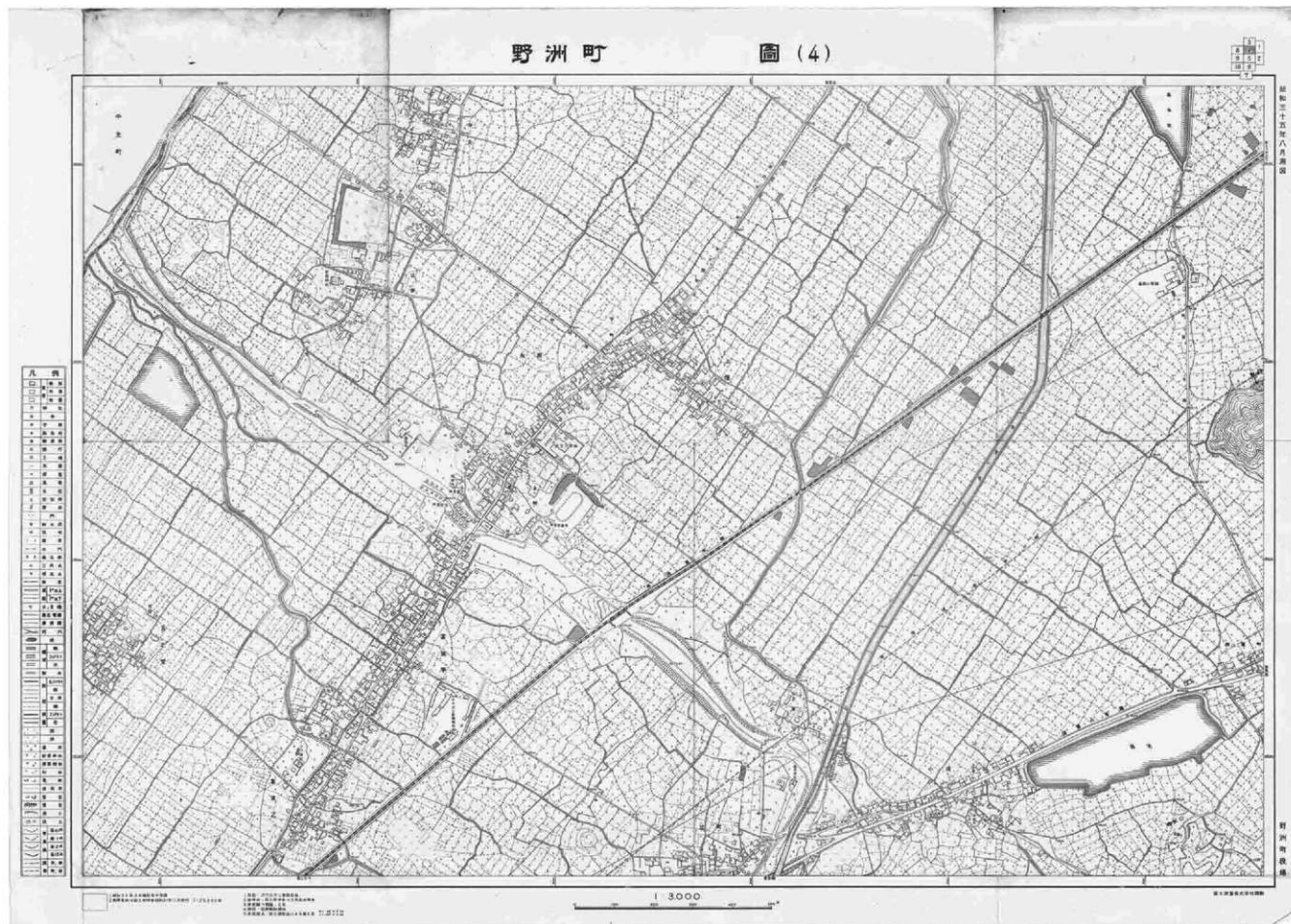


図25 分布調査時所見等記入地図 野洲町 図(4) (スケールは任意)

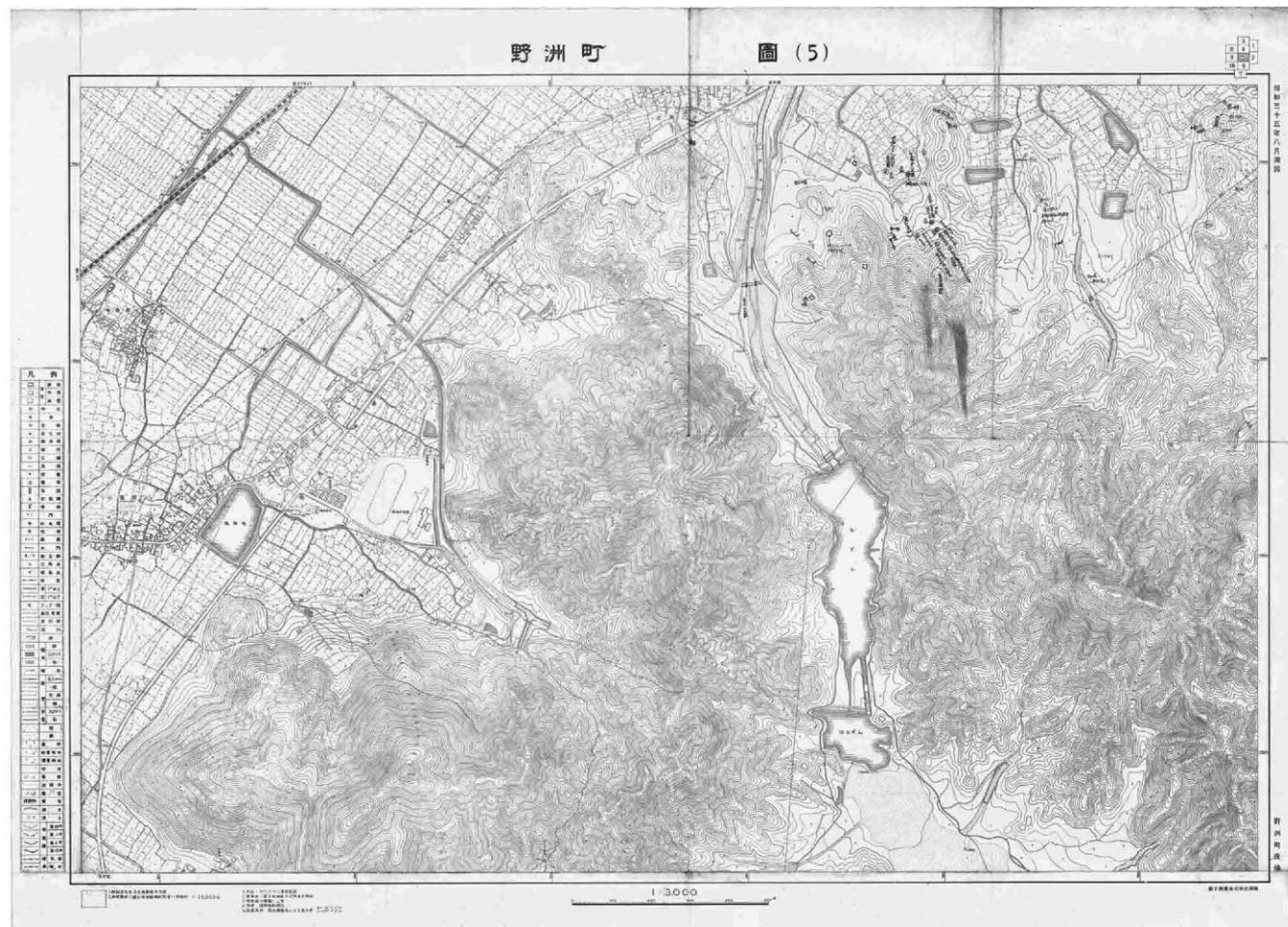


図 26 分布調査時所見等記入地図 野洲町 図(5) (スケールは任意)

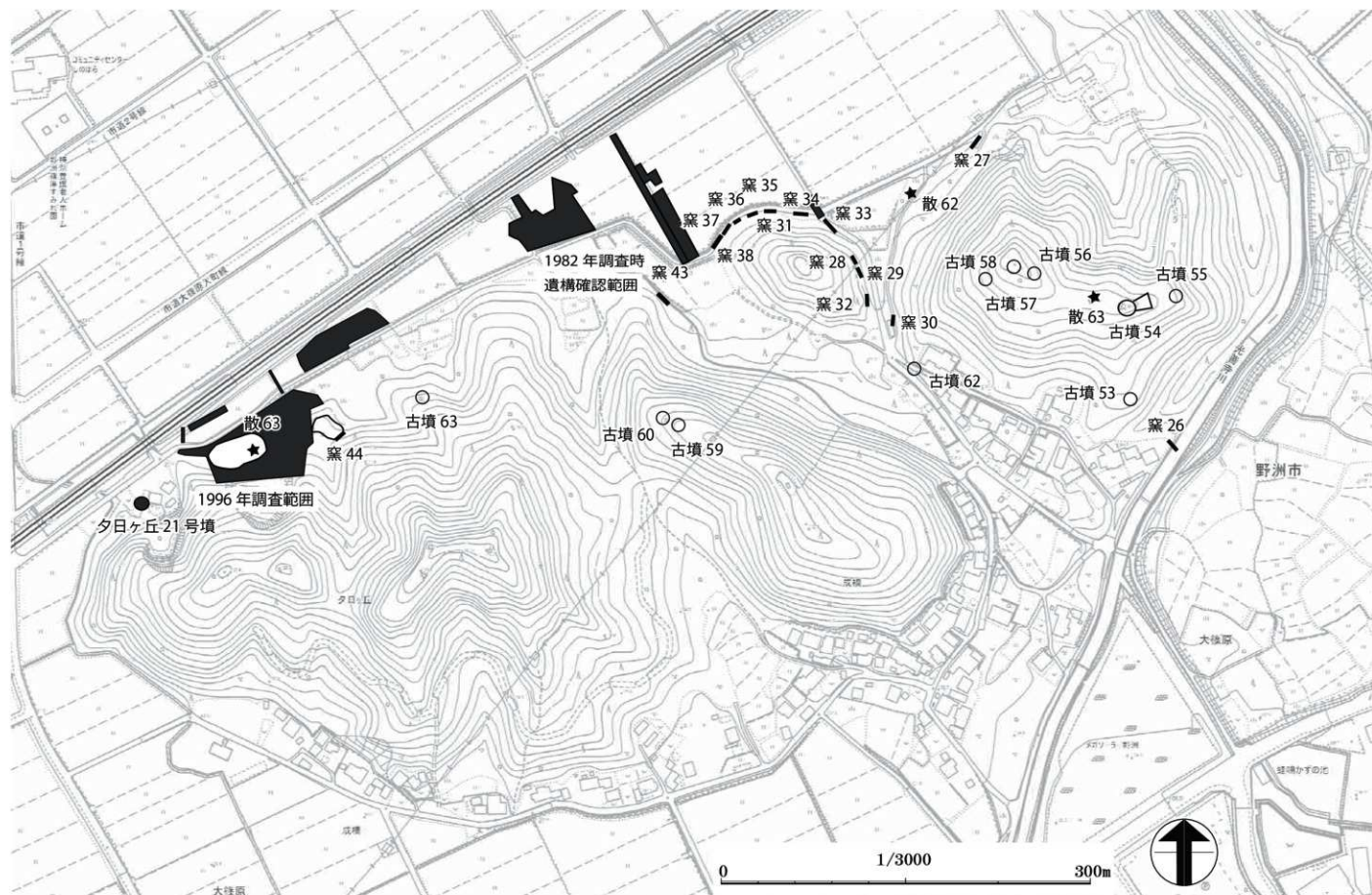


図27 成橋支群窯・散布地・古墳分布図 (図23、24、25を基に作成)

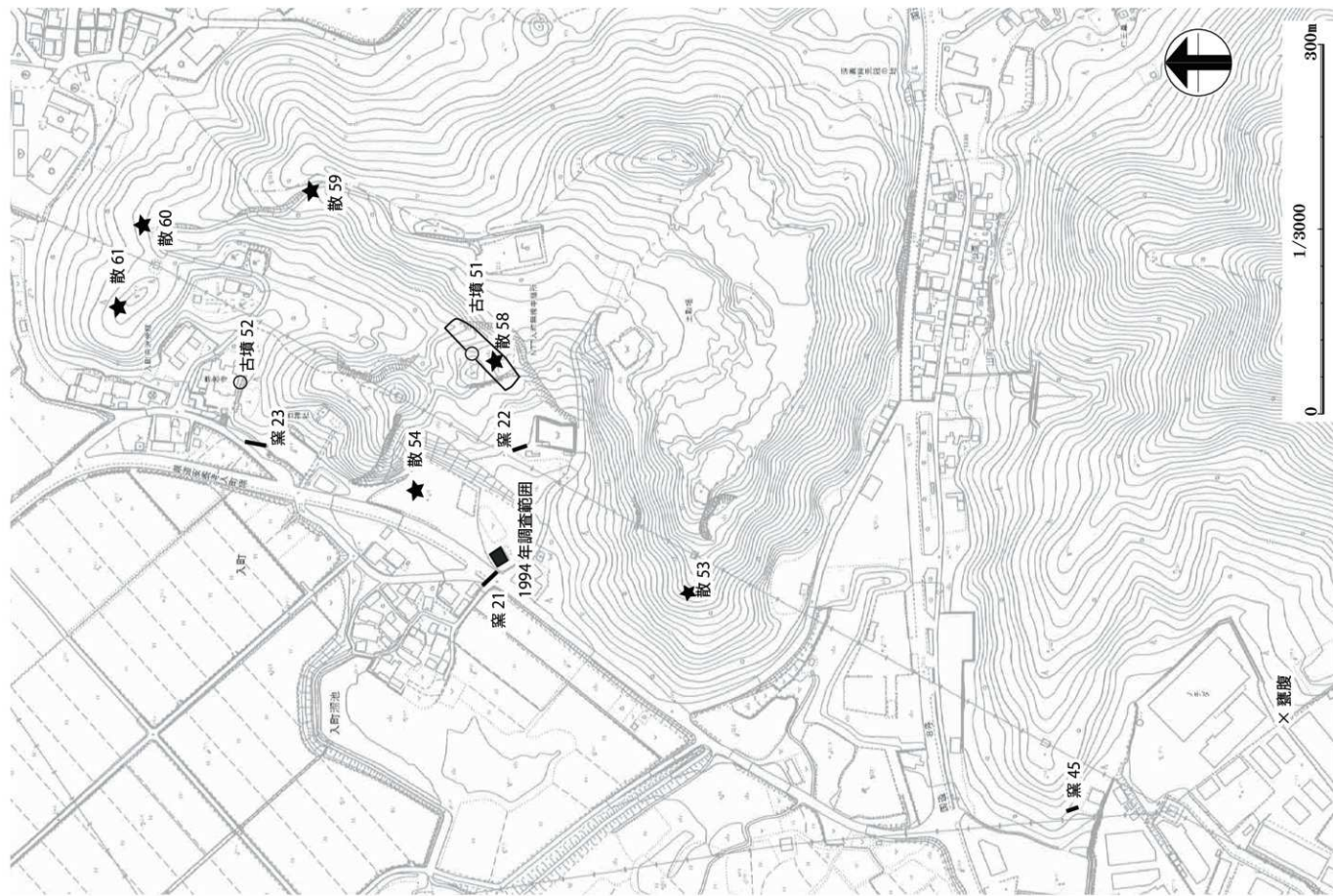


図 28 入町支群・大篠原支群窯・散布地・古墳分布図 (図 23、24 を基に作成)

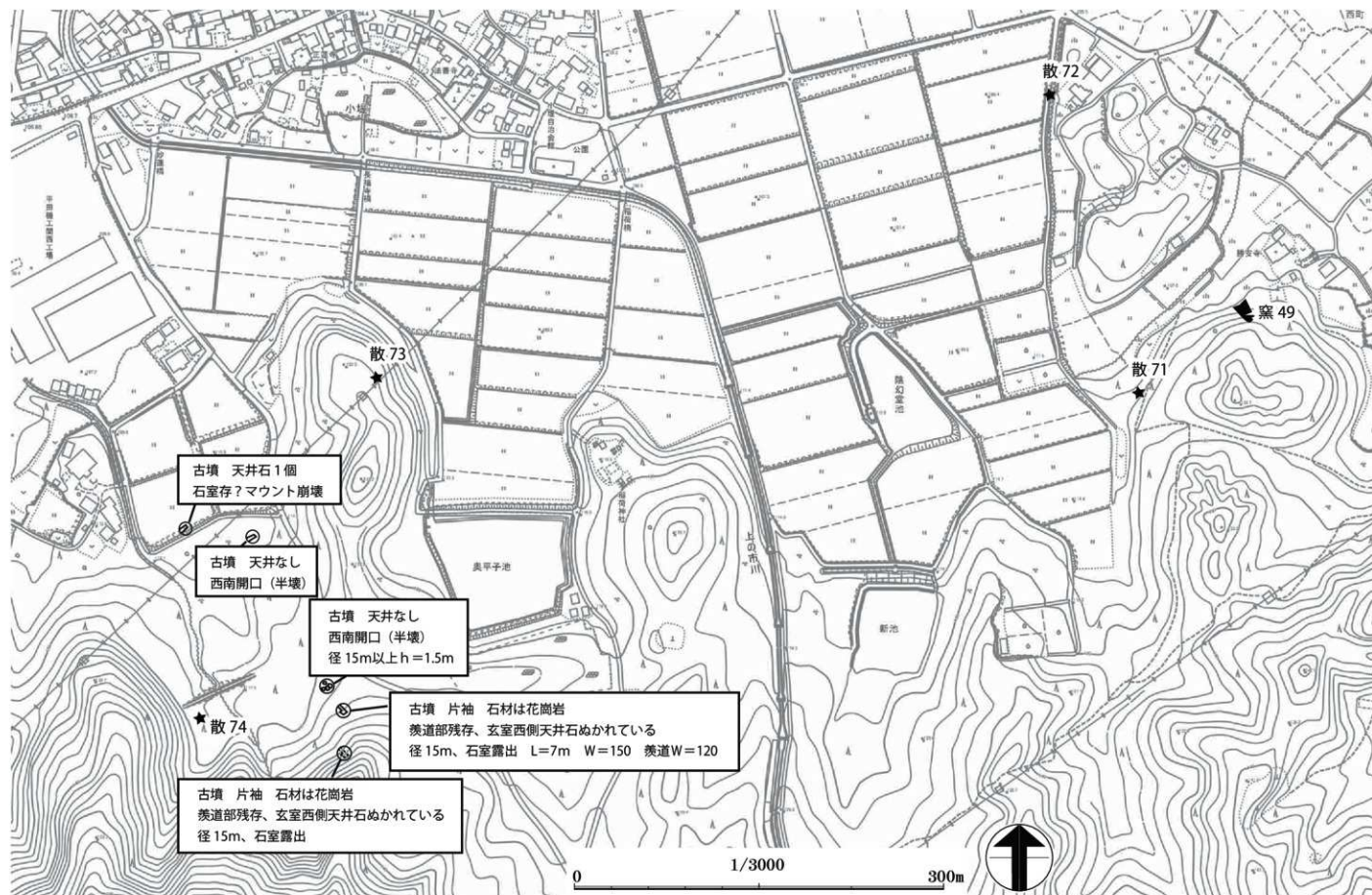


図29 大篠原南支群、吉祥寺遺跡内窯・散布地・古墳分布図 (図26を基に作成)

第3章 野洲市内出土の小型釜とその周辺

はじめに

野洲市内では小型釜が散発的ではあるが出土することがある。小型釜は脚部をもつ三足釜の小型品（小型三足釜）や、土師器釜・瓦質土器釜の小型品を指す。本稿では小型釜について整理して、市内の埋蔵文化財に係る基礎資料のひとつとすることと、野洲周辺の小型釜と比較することで形状や出土時期等についての検討を行いたい。

なお小型釜としては口径が11cm未満のものを扱う。集成段階では14cm前後の小型品も多く確認したが、標準サイズである20cm前後の半分以下と想定されるものを小型品として扱った。

研究史

小型釜について、以下のような研究史がある。宇野隆夫氏は中世食器様式を概観し、煮炊具について言及する中、ミニチュアの小型釜を取り上げている。ここでは小型釜を京都・鍋の資料として提示しており、使用痕についても注目している[宇野 1997]。また同時期に、鍋柄俊氏によっても取り上げられており、京都で散発的に出土することから、中世Ⅰ期後半以降の土製煮炊具の資料として提

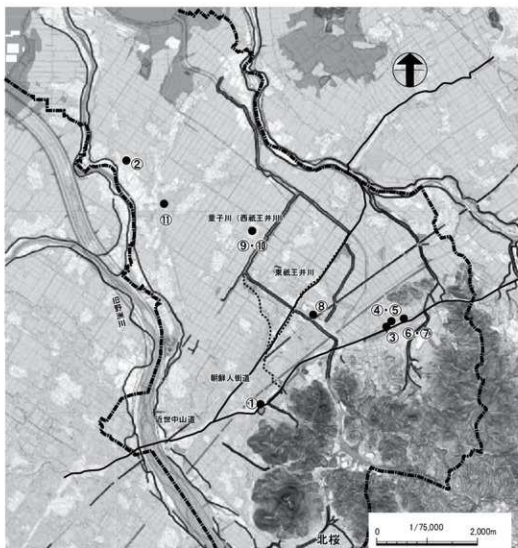


図1 野洲市出土小型釜位置図
(国土地理院地図をベースマップに使用)

示されている【鋤柄 1997】。また奥井智子氏も北山城の土製煮沸具の様相を示す中で小型釜についても述べており、12世紀後半以降、三足釜を金属模倣品と捉えるとともに口径が10cmほどの小型品もほぼ並行して確認できるとしている【奥井 2007】。また新田和央氏も中世後期の煮炊具の変遷を述べる中で、小型三足付羽釜は中世後期にも存続するとし、実用品とは考えられないとしている【中井・佐藤・新田 2022】。

以上のように小型釜、また小型三足釜は主に京都から出土するものとされ、中世の資料として報告されてきた。

問題点

上記のように小型釜は京都を中心に報告されており、近江において小型釜の出土事例が散発的であることも相まって把握・集成作業が行われていない。また時期的な変遷や他地域との形状の比較を行っていない現状にある。

1. 野洲市内の出土事例

野洲出土の小型釜については一部報告書内で集成されている⁽¹⁾。その後の調査で追加された資料もあり、新たに紹介する。

①小篠原遺跡

令和3年(2021)に行われた調査で土坑(SX01)から出土している。当遺構からは土師器釜が出土している⁽²⁾。またSX01を切るSK04からは黒色土器碗や壺(信楽)等が出土している。

当調査では瓦質土器三足釜が多量に出土している⁽³⁾。担当者は確認された55基以上の土坑を採土土坑と想定し、瓦質土器三足釜が接合関係の個体がないことから近接地で生産され、破断面が黒化した個体があることから、焼成途中で破断して不良品となった個体を処分したと想定している⁽⁴⁾。当該地周辺で生産されていたと仮定すると小型三足釜と瓦質土器三足釜は同じ工人集団によって製作されていたことが考えられる。

②井口遺跡

平成22年(2010)の調査で遺物包含層より出土している。遺物包含層は土師器皿(Sh)、焙烙や甕(信

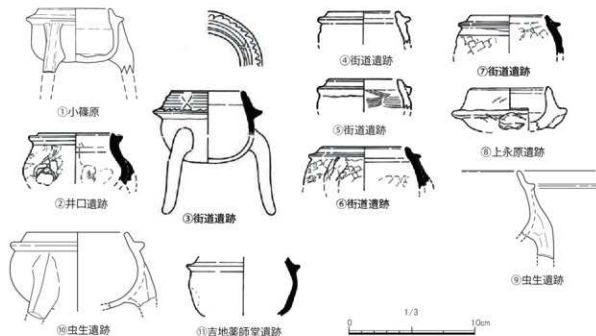


図2 野洲市出土小型釜

楽) など 14 世紀後半～15 世紀代の遺物を含む。黒色土器碗は出土しておらず、遺物包含層の年代としては 13 世紀までは遡らないと考えられる。

③街道遺跡

昭和 60 年 (1985) に行われた調査で SD01 から出土している。SD01 からは青磁碗、土師器釜、瓦質土器釜、土師器皿、山茶碗、片口鉢・甕 (常滑) などが出土している。

なお、SD01 出土土器は森降氏が近江の土器編年Ⅲ—3 段階の基準資料として挙げている資料となる [森 1986]。森氏の編年ではⅢ段階は 13 世紀後半～14 世紀とし、Ⅲ-3 段階は 14 世紀初頭としているが、SD01 では土師器皿で京都の 7 A-7 B 段階ものが含まれ、常滑の甕 (5～6a 型式) や片口鉢の型式 (6a 型式) から見ても 13 世紀後半から 14 世紀初頭とした方が正しいと思われる⁽⁵⁾。また口縁端部内面に沈線が確認できないことから黒色土器生産の終焉に近づく時期と想定される⁽⁶⁾。これは黒色土器碗の時期の重要な問題を内包しており、野洲において黒色土器生産は 14 世紀初頭～

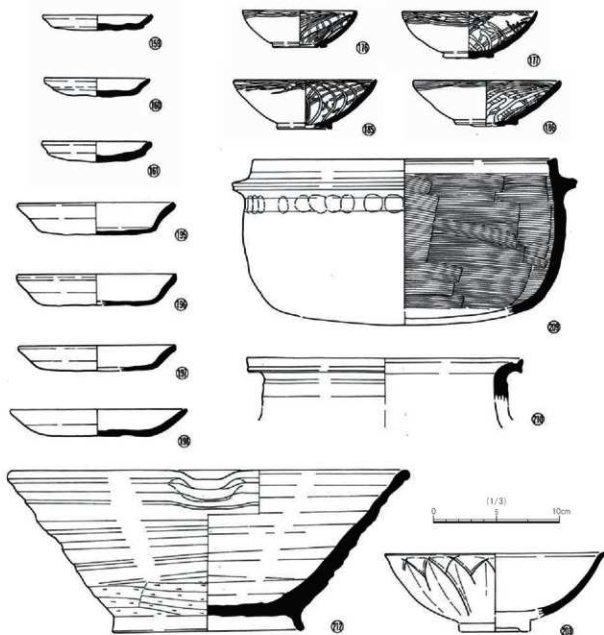


図3 街道遺跡 SD01 出土遺物

前半で終焉を迎える可能性がある⁽⁷⁾。

なお、後述するようにSD01から出土している小型三足釜(③)はいぶしが良好で口縁端部外面に段をもつことから京都からの搬入品の可能性が高い⁽⁸⁾。

④街道遺跡

平成18年(2006)に行われた調査で包含層から出土している。

⑤街道遺跡

④と同じ調査でSD404から出土している。SD404からは土師器皿、黒色土器碗も出土している。時代は13世紀と考えられる。

⑥街道遺跡

平成22年(2010)に行われた調査でSX01から出土している。SX01からは土師器皿、黒色土器碗、瓦質土器釜、瓦質土器三足釜、甕(常滑)が出土している。時代は13世紀中～14世紀初頭と考えられる。

⑦街道遺跡

⑥と同じ調査で包含層から出土している。

⑧上永原遺跡

平成21年(2009)に行われた調査でSD01から出土している。SD01からは土師器皿、黒色土器碗、焙烙、管状土鉢、東播系須恵器鉢(Ⅲ-4類)、土師器壺、瓦質土器火鉢などが出土している。SD01は様々な時期の遺物が出土しているが13世紀代の土器が主体を占め、16世紀に埋没したと考えられる。

⑨虫生遺跡

令和5年度の調査でSD10から出土している。溝の年代としては5～6a型式の片口鉢(常滑)や7A段階の土師器皿、黒色土器碗等から13世紀中～後半と想定できる。SD10は下層の遺構であり、上面の遺構からも13世紀後半～14世紀前半の遺物(片口鉢・常滑、黒色土器碗など)が出土することから⁽⁹⁾ごく短時間で埋没したと想定できる遺構である。

またSD10出土遺物は外面に煤が付着した瓦質土器三足釜や黒色土器碗、土師器皿、内外面に刃物傷がみられる折敷の底板などが含まれ、当時のごく一般的な食膳様式を示していると考えられる⁽¹⁰⁾。

⑩虫生遺跡

⑨と同じ調査で包含層から出土している。⑨の個体とは破断面の胎土が若干違うことから別個体と考えられる。

⑪吉地薬師堂遺跡

昭和63年(1988)の調査でSX11103から出土している。SX11103からは土師器皿、黒色土器碗、東播系須恵器鉢(Ⅲ-1類)なども出土している。

なお吉地薬師堂遺跡からは14世紀代の山茶碗(東濃型)や石鍋⁽¹¹⁾、至徳4年の墨書を持つ直縁大皿なども出土している⁽¹²⁾。搬入土器が比較的多く出土することから湖上交通と深いかわりのある遺跡であることが想定される。

2. 野洲市内の出土事例の特徴

(1) 形状について

野洲市内出土小型釜は口縁端部外面にミガキなどが施され、段となるものは少ない。また罅部は上方に丸みを帯びながら上がるもの(②)、下方に丸みを帯び下がるもの(⑥・⑦)、そのまま真っすぐ横方向に貼り付けるもの(④・⑧・⑩)などが確認できる。また、罅部と脚部が離れるもの(②)、

鐏部直下ないし鐏部に脚部が付着する形のもの(⑥・⑧・⑨・⑩)がある⁽¹³⁾。

(2) 出土場所について

野洲市内では近世中山道沿いに位置する街道遺跡の出土例が4例と多い。また上永原遺跡(⑧)の北側には近世の朝鮮人街道が通るが、朝鮮人街道は中世段階でも美濃下街道として機能していた。また井口遺跡(②)、吉地薬師堂遺跡(⑪)は旧野洲川、また湖岸近くに位置している。虫生遺跡(⑨・⑩)についても南側に童子川が通る。童子川は西祇王井と呼ばれ、流路が条里制地割の規制を強く受けた人工河川である。祇王井川は平清盛の寵愛を受けた祇王が平清盛に申し出て開かれた用水と伝わる河川で、佐野静代氏は文献資料や水利、荘園との関係性などから祇王井は12世紀頃には開削されていたと考えられている[佐野 1997]。

上記のことから、小型釜は街道沿い、もしくは河川、湖岸などの近くで出土する傾向があることが判明した。このことから湖上交通・陸上交通との関わりが示唆され、絶対数としては少ないものの一定程度三足釜は運ばれている可能性がある。また中山道沿いの小篠原遺跡周辺で生産されていたとすると、そのまま街道を通じ運ばれていた可能性がある。

(3) 時期について

野洲市内では13世紀代のものが多く、14世紀代のものも確認できる⁽¹⁴⁾。

(4) 用途について

小型釜の用途について、各氏の見解を整理する。

宇野隆夫氏はミニチュアの小型釜について、火にかけた痕があり、何らかの煮炊に用いたことがわかるとし、煎じ薬等の用途を想定している[宇野 1997]。また森隆氏は香炉と想定している⁽¹⁵⁾。一方で鍋柄俊夫氏は釜の小型品について、そのままの器形で金属製品との関係がうかがわれ、成形が極めて精巧であり、底部外面などの被熱痕跡も明瞭でないため、日常品ではない使われ方も考えるべきとしている[鍋柄 1995]。また新田氏も実用品とは考えられないとしている[中井・佐藤・新田



図4 野洲市出土小型釜使用痕

2022]。

このように小型釜の用途として、実用品という意見と共に実用品でない、もしくは日常的な使い方ではないという意見がある。

野洲市出土の小型釜には被熱痕が確認できるものがある。以下被熱痕や煤の付着状況に注目し用途について若干検討を行いたい。

(1) 街道遺跡 (⑥)

外面と口縁端部内面に煤が付着し、体部外面に一部炭化物が確認できる。内面の喫水線はさほど荒れない。

(2) 吉地薬師堂遺跡 (⑪)

外面下部に煤・炭化物が付着する。煤は底部にかけてより強く付着する。

(3) 虫生遺跡 (⑩)

外面罅部以下全面に煤が付着する。煤は底部にかけてより強く付着する。炭化物の付着(コゲ)は確認できず、複数回の使用とは考えにくい。

(4) 井口遺跡 (②)

外面下部に一部煤が付着する。煤は底部にかけてより強く付着する。下から熱を受けたと想定できる。コゲは確認できず複数回の使用とは考えにくい。

以上のように野洲市出土の小型釜には煤などの使用痕が確認できる例がある。一方で煤が付着していないものも認められる(④・⑤)。なお焼成はやや軟質のものが多い。

また使用している例は基本的に外面罅部より下に煤が認められることから真下から熱を受けていることがわかる。また内面に粒状剥離が認められず内面にオコゲや汚れなどが不明瞭なため、汁物もしくはゆでるなど煮炊きとして使った可能性がある。一方で煤やコゲはさほど集積しておらず、使用頻度としてはさほど多くなかったと思われる。

3. 野洲市周辺の事例(滋賀)

以上野洲市内出土の事例を取り上げたが、次に滋賀県内出土小型釜と若干の比較を行いたい。なお実測図では小型三足釜と同時に脚部が不随しない小型釜も集成した。小型釜に関して、本来脚部が不随するが残存度から脚部の図化が行われていないものも多くあると思われる。

(1) 形状について

滋賀県内の出土のものは野洲市内出土のものと同様に罅部は上方に丸みを帯び上がるものと下方に丸みを帯び下がるもの、そのまままっすぐ横方向に貼り付けるものなどが確認できる。一方で小型釜が同じ遺構からまとめて出土した法勝寺遺跡出土小型釜は様々な罅部形状をもつことから罅部の形状は製作者個人レベルでの差の可能性がある。

(2) 出土場所について

出土遺跡の分布としては野洲郡・栗太郡など湖南部が多い傾向がある。また湖岸に比較的近い箇所での出土が多い。特質すべきは大津の関津遺跡・関津城遺跡から7個出土していることが挙げられる。関津遺跡は琵琶湖湖上交通の南側の終着点で倉敷地と考えられる遺跡であり、北陸・東海物資は関津遺跡で集積(選別・積み替え?)されていた可能性が指摘されている[佐藤 2024]。近江で生産された小型釜は関津で集積、もしくは携行品として運ばれたため、関津からの出土数が多いと想定される。

一方で坂本城遺跡・坂本里坊遺跡など坂本周辺からも多く出土している。また出土した小型三足釜に関しては口縁端部外面に沈線が確認でき段となる(⑳)。後述するように京都から出土している小型三足釜は口縁端部外面に段を持つ例が非常に多い。中世において坂本は、東国・北陸から京都への

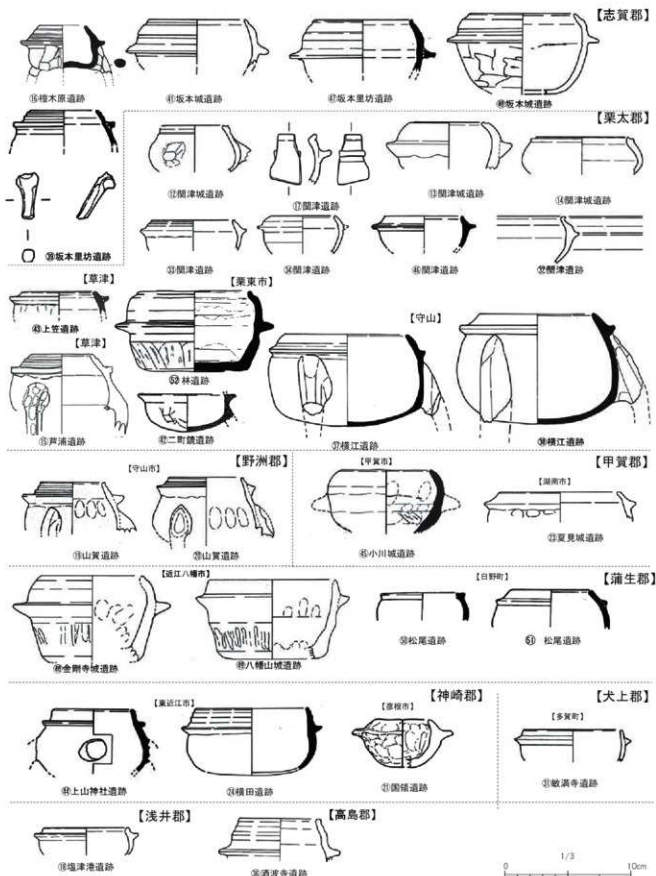


図5 滋賀県内出土小型釜(1)

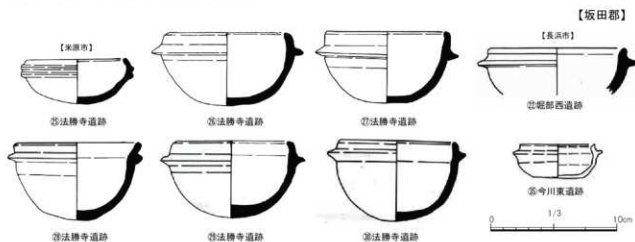


図6 滋賀県内出土小型釜(2)

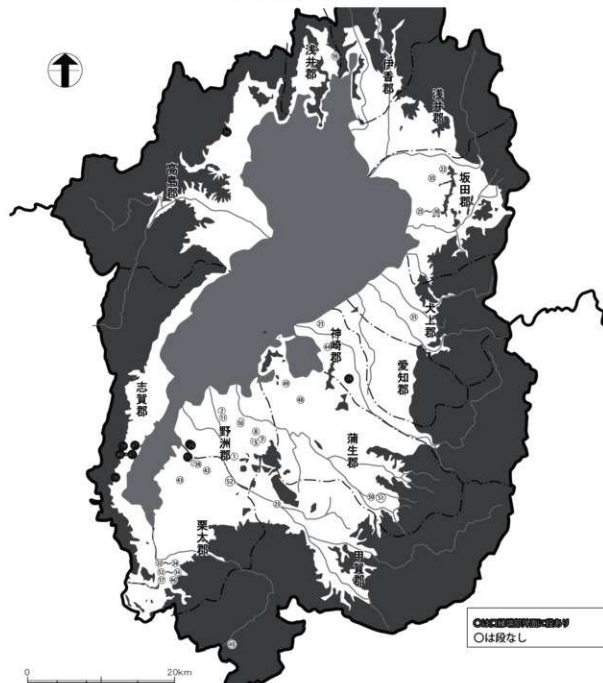


図7 滋賀県内出土小型釜分布図

物資輸送の要衝としての役割を果たし、多くの交通業者である馬借や車借、金融業を営む土倉、問屋、商人が集住しており、各地の山門領から集められた年貢・物資は、下坂本から上坂本へ、そして延暦寺へと運送された[大津市教育委員会 2003]。これらのことから坂本は京都と関わりが強いことが小型三足釜の形状からも裏付けられる。

(3) 時期について

時期としては13世紀～14世紀のものが多い⁽¹⁶⁾。なお、11世紀末～12世紀前半の法勝寺出土例も見られる一方、15～16世紀代にも確認できる。

4. 野洲市周辺の事例（京都など）

小型釜は京都からも出土することから、今度は京都出土の事例も取り上げたい【図8】⁽¹⁷⁾。京都出土の小型三足釜については口縁端部外面にミガキを施し段となるものが圧倒的に多い。一方脚部をもたないものに関しては段を持たないものが多く出土している。京都出土のものは13～14世紀代のものが多く、一部15世紀代にも確認できる⁽¹⁸⁾。

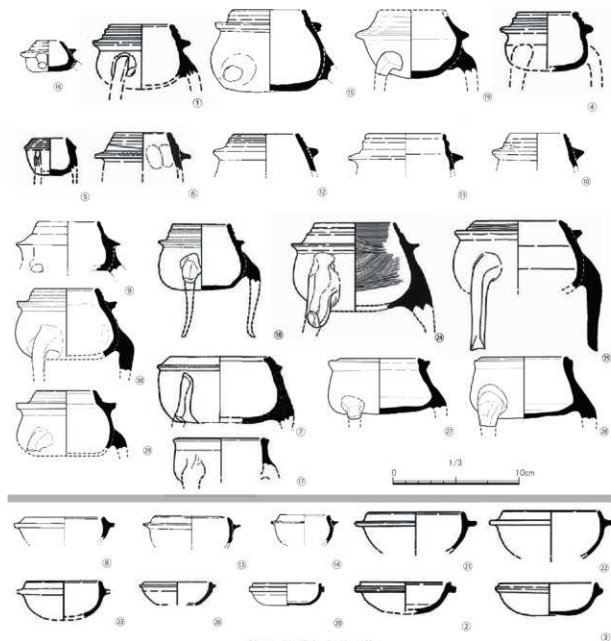


図8 京都出土小型釜

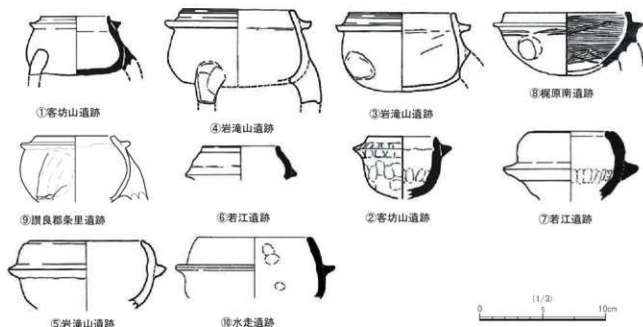


図9 大阪出土小型釜

また小型釜は大阪からも出土する【図9】。樟葉周辺の小型釜(⑧・⑨)は脚部が比較的厚く⁽¹⁹⁾、和泉周辺の小型釜は脚部が鐙部と離れ、比較的脚部が薄い傾向にあるようである(①・③・④)。

以上野洲周辺の事例を挙げた。このように各地域によって若干形状の差異があるようである。またこれによって小型釜の産地の特定や形状の影響等を指摘できる可能性がある。

では形状以外には差異が現れるのか口径に着目して比較を行いたい【図10】。母数が少ないものの、各地域とも6cm前後のものが多い。また若干の差があるものの滋賀や大阪出土の小型釜は6cm前後と8～9cm前後の2段階のピークがみられる。口径9cmをピークとするものは一人用に対応する可能性があり、口径6cm以下のものと用途が違う可能性もある。京都出土の小型釜・小型三足釜に関しては3cm未満のものがある一方、4～8cmの一つのピークに集中している。3cm未満のものは実用品と考えにくいことから京都出土のものは他地域と若干様相が異なるようである。

5. 野洲周辺出土事例と野洲出土事例の形状と変遷について

宇野氏は三足の土釜について、胴部最大径の位置、頸部などの形態により変遷を追えるとしている[宇野1997]。また三足釜は口縁部内傾気味から外傾していく方向へ変化があるという[中井・佐藤・新田2022]。ここでは小型三足釜の変遷を鐙部や脚部の位置からも分析を試みるのと同時に口縁部の傾きなどが三足釜と同様の変遷をたどるか検討したい。

【図11】が変遷表である。小型三足釜に関して、時代を経ると京都では鐙部が上に上がることで口縁部が短くなる傾向にある。これは滋賀でも同様で15世紀～16世紀には口縁端部から鐙部の間隔がかなり短いものも登場する(②・⑫・⑬)。鐙部も形骸化し鐙部の張り出し高さも低くなる。また鐙部は上に上がることで脚部と鐙部の間隔は開く傾向にある。14世紀前後に鐙部と脚部が離れはじめるがこれは各地域とも同じようである。また通常サイズの三足釜のように時代の変化に伴い口縁部内傾気味から外傾していく傾向も小型三足釜で確認できる。山科本願寺跡出土のものなど(⑩・⑰・⑱)は体部が直立気味になり、それに伴い口径も大きくなっている。

脚部を持たないと判断できるものに関しては【図12】を作成した。なお本来は焼成から瓦質のものと土師器のものを分けるべきであるが、小型三足釜でも土師質のものがあることや実見していないものもあり分別せず純粋に脚部を持たないものを取り上げた。

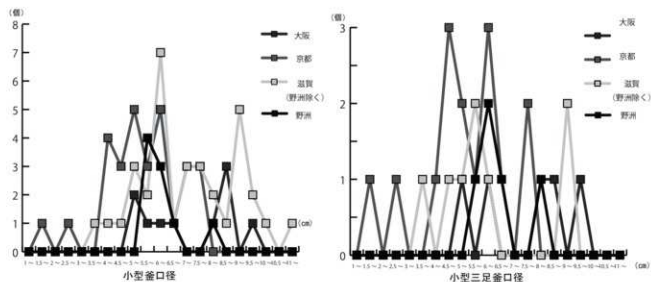


図10 小型釜口径比較図

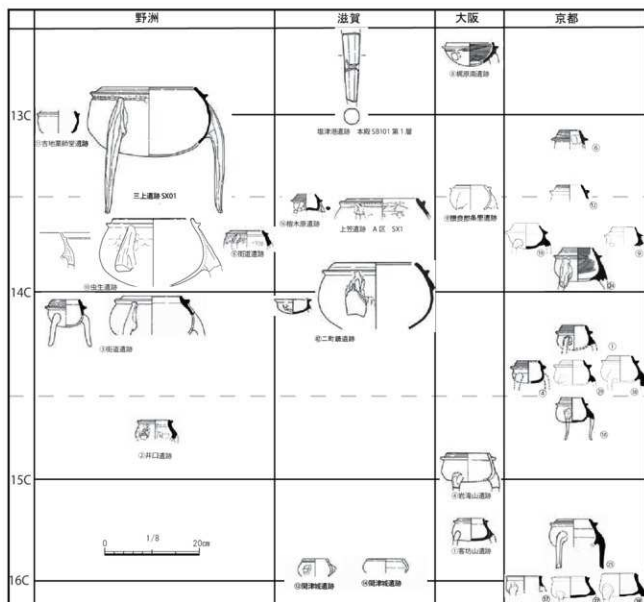


図11 小型三足釜・三足釜変遷図

	野洲	滋賀	大阪	京都
13C				
	瓦上遺跡 5001 土師器釜 (S=1/78)	法勝寺遺跡 近江川東遺跡	②宮内山遺跡	
14C				
	南遺跡 5001 土師器釜 (S=1/78)	市街地遺跡		溝 0303 出土土器 ②宮内山 1442 出土片持土器
				
	南遺跡 5001 瓦質土器釜 (S=1/78)			
15C	※釜については細分を行っていない また、釜の通長を示した図でなく、或る程度の時期 比定ができるものを挙げています			
16C				
		市八幡山城遺跡 金剛寺城遺跡		0 1/8 20cm

図 12 小型釜（脚部なし）

脚部を持たない釜は土師器釜と瓦質土器釜の小型品と思われる。例を挙げると 12 世紀以前の法勝寺出土のものは比較的体部が丸みをもつため土師器釜等の影響を受け、京都の平安京左京二条四坊十町 2 区土坑 1442 出土の小型釜は瓦質土器釜と形状が類似していることから (②・③)、瓦質土器釜の小型品と判断される。

脚部を持たないものについては 14 世紀前後に比較的多く確認できるが 11 世紀末～15・16 世紀まで確認できる。また 15 世紀代には体部下半にヘラミガキを施すものも確認できるようになる。

まとめ

以上本稿では限定的な資料に基づくものではあるが、野洲市小型釜出土事例や、また周辺での小型釜出土事例から若干の検討を行った。その結果次のことが判明した。

- ①小型三足釜の出土する年代としては 13～14 世紀がおおい。一方 15～16 世紀にも確認できる。三足釜が確認できなくなる後も小型品は製作されている。
 - ②野洲市出土小型釜は琵琶湖や川、もしくは街道近くの遺跡で出土する傾向にある。
 - ③小型釜に関して、滋賀県内では野洲郡や栗太郡など琵琶湖南部で多く出土する。
 - ④小型三足釜に関して小篠原遺跡の事例などから野洲市で生産されていた可能性がある。また栗太郡など周辺にも供給していたことも考えうる。
 - ⑤京都は 13～15 世紀において小型三足釜に関して口縁部外面に段をもつものが大多数であり、同時期の野洲市出土のものと対照的である。また、坂本周辺出土のものは段をもつ三足釜がほとんどで坂本周辺は京都の影響を受けていることを再確認できる。
 - ⑥小型三足釜の形状の変遷としては時代を経るにつれて口縁部が上方に上がり、口縁部が短くなるのと同時に脚部と口縁部の間隔が開く傾向がある。また口縁部の張り出し高さも 15 世紀頃を境に低くなる。傾きも内傾から外傾し口径も大きくなる。
 - ⑦小型釜の用途に関して断言はできないが野洲市出土のものに使用痕が確認できる事例がある。一方使用痕が確認できる事例でも複数回の使用は想定しづらい。
- また、資料を集成する中で、12～14 世紀における近江の土器編年について、他地域との比較が

ら黒色土器碗や瓦質土器釜、瓦質土器鍋の出現年代が若干遡る可能性があることが判明した。

なお、本稿では各遺跡の性格から見た分布、分布からみた小型釜の流通、形状の変化の背景など十分な検討が行えていない。資料としても集成できた事例が少なく、より多くの資料を集成した上での比較検討を行う必要がある。また実見できていない資料がほとんどであり、より詳細な使用痕に関わる考察などは今後の課題としておきたい。

(渡邊)

謝辞

本稿を書くきっかけとなったのは令和6年12月に第7回近江土器研究会で虫生遺跡出土の小型三足釜を実見していただき助言いただいたためである。その際にご助言いただいた方に改めて御礼申し上げます。

佐藤亜聖 藤本史子 岡智康 川嶋泰輔 近江の土器研究会の方々 野洲市教育委員会の方々

[注]

- (1) 滋賀県野洲市教育委員会 2011『平成22年度野洲市内遺跡発掘調査年報』
- (2) 定形碗も出土しているが混入か。
- (3) 三足釜はやや胎土が軟質焼成であること、器壁が総じて厚手なこと、また胎土から在地生産が森氏や奥井氏により想定されている[森1986、奥井2004]。
- (4) 焼粘土塊や鉄滓も出土していることから、鍛冶工房も同時に操業されていた可能性がある。
- (5) 奥井氏が13世紀中～13世紀後半の基準資料として挙げている三上遺跡SX01の出土遺物としては[奥井2004]、裏(常滑・4型式)、片口鉢1類(常滑・3～4型式)、東播系須恵鉢(Ⅲ-1類)、同安室系青磁皿(D期)があることからSX01出土遺物は12世紀第四半期～13世紀前半の資料と捉えられる。このことから2000年代以降の資料の増加や他地域の土器の研究の進展に伴い、森氏の土器編年設定以降、土器の年代観について若干の揺動が発生している。なお、三上遺跡SX01から出土している黒色土器碗の口縁部内面は沈線を持つものがほとんどで、口縁部外面は横方向のミガキを施している。
- 一方で三上遺跡SX01からは瓦質土器鍋も出土している。本稿で時期推定の参考資料として取り上げた鶴橋氏による近江における煮炊具の消長表では受け口状の口縁部を持つ瓦質土器鍋は13世紀末から出土するとされている[鶴橋1997]。このことから瓦質土器鍋に関して年代観の揺動が生じている。また今回小型釜出土遺跡・遺構として取り上げた虫生遺跡SD10からは瓦質土器釜が出土している。瓦質土器釜は13世紀中には確認できるという意見とともに[奥井2007]、13世紀末～14世紀初頭に京都から流入したという意見がある[三尾2012]。SD10は13世紀中～後半の片口鉢1類(常滑・5～6a型式)、京都系土師器皿(7A段階)等が出土しており、13世紀中～後半の遺構と考えられることから黒色土器碗の年代観が若干変化するのと同時に瓦質土器釜についても年代観が変化する可能性がある。なお、瓦質土器三足釜についても近江では13世紀初頭からみられるとされている[奥井2007]、塩津港遺跡の本殿SB101第1層(12世紀第二四半期～12世紀第四半期)から瓦質土器三足釜の脚部が出土していることから[滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2019]、北山城と同様に12世紀後半に近江でも確認できる可能性がある。なお森氏は12世紀後半から確認できるとしている[森1986]。このように近江の中世土器の出現時期や年代観に関しては各研究者によりまちまちである。近江における中世前半期の土器編年については別稿を記したい。
- (6) 畑中氏も黒色土器碗の編年をする上で、時代を経るにつれ口縁部内面の沈線をもつ資料の比率が下がる事を指摘している[畑中1997]。
- (7) 森氏は黒色土器碗の終焉を14世紀中ごろとしており[森1986]、木戸氏は14世紀後半～15世紀に至らないまでを想定している[木戸1989]。
- (8) 平安京左京七条二坊五町井戸130(⑥)出土小型三足釜も同様に臀部にキザミを施している。
- (9) 上面の遺構から出土した黒色土器碗はSD10出土のものが口縁部内面に沈線を持つものに対し、口縁部内面に沈線を持たないものがほとんどである。
- (10) なお、溝からは小型黒色土器碗が出土している。小型黒色土器碗について鳥羽氏が指摘するように[鳥羽2007]、仏具の六器として使用している可能性があり、また出土したものは口縁部に一部打ち欠けがみられるが現状での段階で欠損が生じたか不明である。なお、SD10出土遺物には密教関連のものは確認できていない。また金属製品の六器碗は野洲市内では令和元年に調査を行った小瀬原遺跡から出土している。
- (11) 中主町教育委員会 1989『昭和62年度 中主町内遺跡発掘調査年報』

- (12) 滋賀県野洲郡中主町教育委員会 1990『古地茶師堂遺跡、光相寺遺跡発掘調査報告書』
- (13) 脚部について、野洲出土の三足釜は足の先端部が屈曲する例が多い。小型釜に関しては同様に屈曲する可能性があるが脚部の先端の形状までわかる資料は出土していない。
- (14) 年代の根拠としては 報告書の記載年代と合わせ共伴ないし同一の遺構から出土している土器の年代観を参考にした。また土器の年代観としては焙烙や瓦質土器釜・鍋などの煮炊具は三尾次郎氏や森降氏、常滑焼等は中野晴久氏、信楽焼については畑中英二氏、東播磨鉢については佐藤聖聖氏、土師器皿については平尾政幸氏、近江系黒色土器については森氏や畑中英氏の論考を参考にした。
- (15) 野洲市文化財保護課執務室内で提示してある森氏の編年表による。
- (16) 膳所城においても16世紀末以降の小型釜を確認しているが、鈐部が体部下半にあり、茶釜等の小型品と考えられることから今回は除外している。
- (17) 京都出土小型釜は数が膨大なため一部の集成のみにとどまっている。
- (18) 14世紀以降青磁の香炉など三足の形状をもつ土器に影響を受けた可能性もある。
- (19) 藤本氏のご教示による。

【参考文献】

- 宇野隆夫 1997『中世食器様式が意味するもの』『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 国立歴史民俗博物館
- 齋藤俊夫 1995『瓦質土器』概説 中世の土師器・陶磁器 真陽社
- 齋藤俊夫 1997『中世食器の地域性 畿内周辺～近江～』『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 国立歴史民俗博物館
- 奥井智子 2004『近江における中世土器研究』『中近世土器の基礎研究』XVIII 日本中世土器研究会
- 奥井智子 2007『畿内における土製煮沸具の様相』『中近世土器の基礎研究』21 日本中世土器研究会
- 松島真弓・木立雅朗 2016『中世の土鍋による炊飯方法：草戸千間町遺跡の土器使用痕分析』『月刊考古学ジャーナル』4 No.682 ニューサイエンス社
- 佐藤聖聖 2022『第4章 東播磨須恵器』『新版 概説中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会
- 佐藤聖聖 2024『土器から見た中世都市奈良』『第42回 中世土器研究会 都市の流通～中世前期の土器・陶磁器から～』中世土器研究会
- 小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年の研究～日本律令の土器様式の成立と展開、7～19世紀～』京都編集工房
- 佐野静代 1997『古代末期～中世の開発期と平野部荘園の灌漑水利』『歴史地理学』39巻2号
- 中野晴久 2022『第1節 東海諸窯』『新版 概説中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会
- 中野晴久 2013『中世常滑窯の研究』愛知学院大学大学院文学研究科歴史学専攻
- 平尾政幸 2019『土師器再考』『洛史』第12号（公財）京都市埋蔵文化財研究所
- 三尾次郎 2012『近江湖東地域の中世後期における土製煮沸具の組成変化～焙烙・瓦質製品を中心として～』『淡海文化財論叢』第四輯 淡海文化財論叢刊行会
- 畑中英二 2007『続信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版
- 畑中英二 1997『第4節 近江型黒色土器編年の作業前提』『三堂遺跡～野洲町富設甲所在～』滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会
- 木戸雅寿 1989『近江における15～16世紀の土器について』『中近世土器の基礎研究』V 日本中世土器研究会
- 中井淳史・佐藤聖聖・新田和史 2022『第7章 近畿』『新版 概説中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会
- 森 隆 1986『滋賀県における古代末・中世土器』『中近世土器の基礎研究』II 日本中世土器研究会
- 藤本史子 2023『中世土器の生産と流通』『ヒストリア』300号 大阪歴史学会
- 島羽正剛 2007『瓦器小境にみる特異な使用痕跡に関する考察（その2）』『中近世土器の基礎研究』21 日本中世土器研究会

滋賀県内出土小型釜一覧①

番号	市町村名	発掘名	発掘の経緯	所在地	出土遺物	跡の概要	年代	口徑	底	器高	地域	使用期	調査者	調査出土人	備考	参考文献
1	野洲市	中野原	地盤	野洲市小幡宮子字ノ下1151番	30A	有	13世紀	6.3	なし	-	中野原	なし	-	土器	「内河野原」	滋賀県野洲市教育委員会2022「第9年度野洲市発掘調査報告書」
2	野洲市	中野原	地盤	野洲市小幡宮子字ノ下1151番	30A	有	13世紀	6.3	なし	-	中野原	なし	-	土器	「内河野原」	滋賀県野洲市教育委員会2022「第9年度野洲市発掘調査報告書」
3	野洲市	中野原	地盤	野洲市小幡宮子字ノ下1151番	30A	有	13世紀	6.3	なし	-	中野原	なし	-	土器	「内河野原」	滋賀県野洲市教育委員会2022「第9年度野洲市発掘調査報告書」
4	野洲市	中野原	地盤	野洲市小幡宮子字ノ下1151番	30A	有	13世紀	6.3	なし	-	中野原	なし	-	土器	「内河野原」	滋賀県野洲市教育委員会2022「第9年度野洲市発掘調査報告書」
5	野洲市	中野原	地盤	野洲市小幡宮子字ノ下1151番	30A	有	13世紀	6.3	なし	-	中野原	なし	-	土器	「内河野原」	滋賀県野洲市教育委員会2022「第9年度野洲市発掘調査報告書」
6	野洲市	中野原	地盤	野洲市小幡宮子字ノ下1151番	30A	有	13世紀	6.3	なし	-	中野原	なし	-	土器	「内河野原」	滋賀県野洲市教育委員会2022「第9年度野洲市発掘調査報告書」
7	野洲市	中野原	地盤	野洲市小幡宮子字ノ下1151番	30A	有	13世紀	6.3	なし	-	中野原	なし	-	土器	「内河野原」	滋賀県野洲市教育委員会2022「第9年度野洲市発掘調査報告書」
8	野洲市	中野原	地盤	野洲市小幡宮子字ノ下1151番	30A	有	13世紀	6.3	なし	-	中野原	なし	-	土器	「内河野原」	滋賀県野洲市教育委員会2022「第9年度野洲市発掘調査報告書」
9	野洲市	中野原	地盤	野洲市小幡宮子字ノ下1151番	30A	有	13世紀	6.3	なし	-	中野原	なし	-	土器	「内河野原」	滋賀県野洲市教育委員会2022「第9年度野洲市発掘調査報告書」
10	野洲市	中野原	地盤	野洲市小幡宮子字ノ下1151番	30A	有	13世紀	6.3	なし	-	中野原	なし	-	土器	「内河野原」	滋賀県野洲市教育委員会2022「第9年度野洲市発掘調査報告書」
11	野洲市	中野原	地盤	野洲市小幡宮子字ノ下1151番	30A	有	13世紀	6.3	なし	-	中野原	なし	-	土器	「内河野原」	滋賀県野洲市教育委員会2022「第9年度野洲市発掘調査報告書」
12	大津市	中野原	地盤	野洲市小幡宮子字ノ下1151番	30A	有	13世紀	6.3	なし	-	中野原	なし	-	土器	「内河野原」	滋賀県野洲市教育委員会2022「第9年度野洲市発掘調査報告書」
13	大津市	中野原	地盤	野洲市小幡宮子字ノ下1151番	30A	有	13世紀	6.3	なし	-	中野原	なし	-	土器	「内河野原」	滋賀県野洲市教育委員会2022「第9年度野洲市発掘調査報告書」

— 67 —

茲賀巢內出土小型釜一斚③

[illegible]

京都出土小型釜一覽②

— 70 —

第4章 西河原森ノ内遺跡第1次発掘調査出土遺物報告補遺

調査地 野洲市西河原字森ノ内 467 番地 1 外
 調査原因 中主町土地区画整理事業
 調査期間 昭和 59 年 (1984) 4 月 2 日～
 昭和 60 年 (1985) 3 月 31 日
 調査面積 調査対象面積 8,100㎡のうち約 7,900㎡

1. はじめに

西河原森ノ内遺跡第1次発掘調査の成果は、『西河原森ノ内遺跡第1・2次発掘調査概要』(中主町 1987) および『西河原森ノ内遺跡第1・2次発掘調査報告書』(中主町 1990A・B) に記載されている。しかしながら、前者は腰帯貝¹⁾「石帯」(石製丸輪) 1 点の報告文と写真(裏面)が掲載されているけれども、後者は整理対象から漏れてしまい事例報告のないまま刊行されてしまった。

腰帯貝(鈔帯貝)に関しては、平成 12 年(2000)の第 5 回古代官衙・集落研究会「鈔帯をめぐる諸問題」の報告書で「鈔帯貝集成表」が作成され、滋賀県は西河原森ノ内遺跡例をふくめた 30 遺跡 50 点の出土例が示されている(奈良文化財研究所 2002)。また、

同書では、雨森智美氏が県内の鈔帯出土遺跡について類型化と性格づけをおこない、交通路との関係を指摘している(雨森 2002)。

本補遺では、西河原森ノ内遺跡第1次発掘調査で出土した「石帯」を報告し、あわせて平成 14 年(2002)以降に出土した県内出土資料を追加・集成した一覧表を作成する。本補遺は、西河原遺跡群²⁾を再検討するための基礎資料のひとつに位置づけたい。

2. 西河原森ノ内遺跡の概要(図 1)

西河原森ノ内遺跡は、琵琶湖東岸に所在する野洲市の北部沖積低平地に形成された、弥生時代から江戸時代にかけての集落跡・官衙跡として周知されている。とくに、本遺跡は天武朝³⁾の木簡が出土する地方官衙跡として広く知られている。遺跡の主な特徴は次のことがあげられる(市 2008、畑中 2008A・B、大橋 2015 他)。

①遺跡は当時の琵琶湖岸部に位置し、文末史料 01～03 等の解釈により、中央とも関連する港湾管理施設や駅家の設置が想定される。

②遺跡の盛期は 7 世紀後半～8 世紀前半である。

③木簡や墨書土

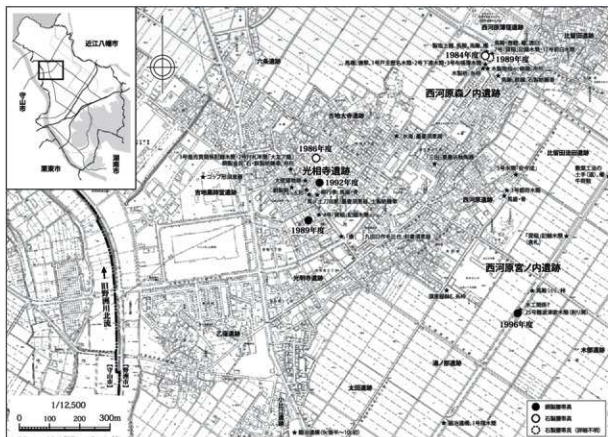


図 1 野洲市内の腰帯貝等出土地位置図(平成 23 年国産「野洲市都市計画図」(縮尺 1/25,000) N-NE-20-3、N-NE-30-1 をベースマップに使用)

器、陶磁等の文字関係資料が多数出土する。④畿内系暗文土師器が多数出土する。⑤出土する須恵器は焼け歪み、亀裂が入ったもの、窯壁や別の器体が融着したものが一定量混入する。⑥唐白(杵)、馬蹴、唐壺、糸棒、下駄、馬鞍、蓋罐、馬蹄、牛荷鞍、櫛、櫛、ねずみ返し、祭祀具等、多種多量の木製品が出土する。以上の諸点により、当遺跡周辺一帯は、安評家・野洲郡家もしくはその関連施設であった可能性が高い。

3. 西河原森ノ内遺跡出土の石製腰帯具

(図1・3、表2、写真1)

西河原森ノ内遺跡は、昭和59年度(1984)の第1次発掘調査B区下層包層より、1点の石製丸軀(図3-7)が出土している。

丸軀は、裏面の一部が欠けたものの、ほぼ完形である。最大幅(縦)2.65cm、最大長(横)4.35cm、厚さ0.6cm。重さは14.7g。垂孔をあけない無孔のもの。裏面には、縦平行の溝り穴を3ヶ所に配し、そのうち中央上部の溝り穴に破損が認められる。

表面は丁寧に研がれる。側面の研磨は表面にくらべて光沢が弱く、裏面にいたっては加工痕をのこす粗い仕上げにとどまる。色調は、灰白色の地に暗灰色の斑がまじる。石材は蛇紋岩と推測されている。

時期は、丸軀が遺構外の出土であることから、検出された堆積土層の年代観をみる。B区上層は奈良時代末から平安時代前期(中主町1990B)、同下層は飛鳥・奈良時代[7世紀後半～8世紀代](中主町1990A)に捉えられている(徳綱2011)。けれども、当該資料の時期を奈良時代と位置づけるには違和感がある。それは以下のことによる。

①田中広明氏による腰帯具の編年的研究では、本例は第Ⅲ期～第Ⅳ期に分類され、おおむね8世紀末～10世紀後葉に出土事例がある(田中2003)。

②木村泰彦氏は、長岡京⁽⁴⁾で出土する石製帯飾り(鈿具)に有孔と無孔の両方が存在すること、そして石材のほぼ9割が黒色系で占められることを見だしている(木村1992・2002)。

③平尾政幸氏は、平安京出土の石製鈿具が前代の黒色系から緑色系へと色調の主流を移しながらも、その他多種多様な石材使用がすすむことを指摘する。また、石製丸軀の幅/長比が時期的な変化をあらわすものとかんがえている(平尾2002)。西河原森ノ内遺跡例の比率は約0.61であり、平尾氏が示す平安京の数値0.65よりさらに小さい。

④本調査地南東に隣接する第5次発掘調査第2遺構面は「8世紀後半～9世紀末の最も新しい官衙式遺構群」(野洲市2006)と認識されている⁽⁵⁾。

以上を考慮にいくれば、西河原森ノ内遺跡例の時期は、8世紀末～9世紀に位置づけるのが穏当である。

西河原森ノ内遺跡は、平成元年度(1989)に中主町教育委員会が実施した第5次発掘調査でも「石帯」の出土が報告されている(滋賀県1991)。しかしながら、報告書には「石帯」の記載がなく(野洲市2006・2007)、収蔵資料も確認することができなかった。よって、本事例は資料の有無をふくめた詳細が不明のため、今回の集大成作業から除外した。今後、資料が確認できた段階であらためて報告したい。

4. 旧野洲郡内遺跡出土の腰帯具

(図1～6、表1・2・5、写真1)

旧野洲郡内の腰帯具は、7遺跡から計17点が出土している。

(1) 旧野洲郡1 (現野洲市/旧中主町・旧野洲町)

野洲市内における腰帯具は、図1・4に示したとおり、西河原・吉地地域の西河原宮ノ内遺跡と光相寺遺跡の2遺跡から銅製10点、西河原森ノ内遺跡と光相寺遺跡の2遺跡から石製2点、あわせて3遺跡(5地点)から12点が出土している。

腰帯具の時期と各遺跡からの出土数量は、西河原宮ノ内遺跡が銅製のみの組成で8世紀前半3点(図2-1・3・11)と8世紀後半2点(図2-14・22)、光相寺遺跡の銅製が8世紀後半5点(図2-8・10・15・23・29)、石製が8世紀末～9世紀1点(図3-10)、西河原森ノ内遺跡が石製で8世紀末～9世紀1点(図

3-7、写真1)となる。種類は丸軀、^{しんたい}巡方、^{しんたい}蛇尾があり、^{しんたい}鈿具はない。

西河原宮ノ内遺跡は倉院に比定され(大橋2015他)、一画および周辺には鍛冶、木工、漆、製糸・製織工房があった。光相寺遺跡は平成元年度(1989)調査地周辺より「三宅」「三宅家、その北で「石邊君」「馬」「稲邑」の墨書土器、2号木簡「大友ア龍」等が出土



写真1 西河原森ノ内遺跡第1次調査 石製丸軀 (ほぼ原寸大)

写真撮影: 市川昭司(代表 市川昭司)

しており、西河原森ノ内遺跡に次ぐ西河原遺跡群の中核、あるいは氏族の居宅として捉えられている⁹⁰⁾。

西河原宮ノ内遺跡の3点をのぞく腰帯具は、いずれも西河原遺跡群が盛期を過ぎて、律令体制の弛緩が顕著となりはじめた「最も新しい官衙遺構群」(野洲市2006)に伴出するものと位置づけられる。

西河原遺跡群の郡家と駅家は、8世紀前半から中葉以降に東山道⁹¹⁾が通過する小篠原遺跡群⁹²⁾への移転を想定するかんがえがある(山尾1995・1997、畑中2008A・B、市2008他)。しかしながら、現状は小篠原遺跡群にくわえて、市南部の諸遺跡⁹³⁾から腰帯具の出土は認められない。たいてい、光相寺遺跡と西河原森ノ内遺跡は8世紀後半以降も腰帯具が出土している。また西河原遺跡の5号木簡「安今成」は9世紀後葉のものである。8世紀中葉以降の西河原遺跡群は、主要な行政機能を失いながらも港湾管理施設等は維持されたとかんがえておきたい(細川2021他)。とすれば、腰帯具の所有は官人の存否でなく施設(遺構)の性格に関係するのではないかと見えてくれる。

銅製腰帯具と同じ古代の銅製品には銭貨がある。表5は市内遺跡出土状況を示したもので、史料08を参考に奈良時代と平安時代に分けて見てみる。奈良時代は、和同開珎が比較的広範囲から出土している。なかでも、数量は夕日ヶ丘北遺跡の61枚を最多として、光相寺遺跡の12枚がつづく。平安時代初期は、西河原森ノ内遺跡の他、前代からつづく光相寺遺跡、光明寺遺跡に見られる。9世紀中葉以降は、西河原遺跡群北半の西河原森ノ内遺跡(中主町1995)と吉地大寺遺跡、西河原薄窪遺跡に見られるが、10世紀になると木部遺跡に限られる。木部遺跡は、古墳時代後期に木部天神前古墳の築造や交通関連施設の配置にくわえて、銅鏡を模した7世紀代の土師器鏡が出土する等、西河原遺跡群成立前史を紐解くうえで重要な遺跡のひとつである。市内遺跡出土銭貨の様相は、8世紀中葉以降も西河原・吉地地域北半部等に地域拠点が存続したこと、そして主要施設の配置あるいは運営主体に変化があったことを傍証する資料ともなる。

(2) 旧野洲郡2(現守山市・現近江八幡市)

旧野洲郡の現守山市における腰帯具は、図4に示したとおり、市北部の服部遺跡と笠原南遺跡、南部の中島遺跡、金森東遺跡の4遺跡(4地点)から銅製5点が出土している。

服部遺跡は旧野洲川北流と南流分岐点の北にある。旧野洲川南流左岸にある笠原南遺跡は、遺跡南東に佐々木街道がはしり、南西にむかえば赤野井道へ、北東にいけば服部遺跡南を経て西河原へとつながっていた。

また近隣の小河川が江戸時代の津出し港⁹⁴⁾である大曲(村浜)へ通じる。中島遺跡と金森東遺跡は、旧野洲川本流あるいは分流といわれる境川の右岸にあり、それぞれ小河川が野洲浦、赤野井港(赤野井浜遺跡)へ通じる。そして、これら小河川の下流には、共通して式内社が鎮座する。西河原森ノ内遺跡石製丸轆出土地からの直線距離は、服部遺跡が西南西へ約2.5km、笠原南遺跡、中島遺跡、金森東遺跡が南西へ約3.86km、約6.6km、約6kmに位置している。

腰帯具の時期と各遺跡からの出土数量は、服部遺跡が8世紀前半1点(図2-2)と8世紀後半～9世紀初頭1点(図2-5)、笠原南遺跡が8世紀後半1点(図2-17)、中島遺跡が8～10世紀1点(図2-25)、金森東遺跡が8～9世紀[奈良時代カ]1点(図2-27)となる。種類は中島遺跡に鉸具、金森東遺跡に鉈尾があり、服部遺跡は丸轆、笠原南遺跡は巡方とそれぞれ異なる。

服部遺跡出土銅製丸轆(図2-2)の表金具垂孔四隅には、外側へ放射状にのびる1条の切込みがある。これは垂孔部のバリ取りや角を出すために先行して切削した線引きと理解しておきたい。同様の痕跡は、高島市永田北遺跡(永田遺跡)巡方(図2-20)にも見える。

服部遺跡は官衙跡に比定され(滋賀県史1980)、その他の遺跡も墨書土器や三彩施軸陶器、木製人形等が出土しており、官衙関連施設とかんがえられる。

現近江八幡市の旧野洲郡域においては、腰帯具の出土は認められていない。

5. 滋賀県内遺跡出土の腰帯具

(図1～6、表1～4)

(1) 出土遺跡と数量

令和6年(2024)12月現在、滋賀県内では38遺跡から計67点の律令期腰帯具⁹⁵⁾が出土している。平成14年(2002)以降、8遺跡17点が追加された。

出土遺跡と数量の内訳は、銅製腰帯具が20遺跡37点、石製腰帯具が23遺跡30点となる。

(1)-1. 複数の出土遺跡と数量 1遺跡から複数の腰帯具が出土する事例は、野洲市光相寺遺跡6点・西河原宮ノ内遺跡5点、近江八幡市中大の湖南遺跡4点、高島市永田北遺跡(永田遺跡)4点、竜王町ブタイ遺跡3点、栗東市手原遺跡3点・岡遺跡3点等がある。完帯の出土はないけれども、竜王町ブタイ遺跡例(図2-12・13・24)は同一の腰帯につけられていた可能性がある。野洲市光相寺遺跡、栗東市高野遺跡・手原遺跡・岡遺跡、大津市穴太遺跡の5遺跡は銅製と石製腰帯具の双方が出土している。

(1)-2. 旧郡別の出土遺跡と数量 旧郡別の腰帯具出土遺跡と数量は、表3で示したとおり、野洲郡の7遺跡17点がもっとも多く、次いで栗太郡8遺跡13点⁽¹²⁾、滋賀(志賀)郡9遺跡13点、蒲生郡4遺跡10点、犬上郡5遺跡6点、高島郡2遺跡5点、伊香郡・坂田郡・神崎郡がそれぞれ1遺跡1点となる。

銅製腰帯具は、野洲郡6遺跡15点、蒲生郡2遺跡7点、栗太郡7遺跡7点、滋賀郡2遺跡2点、高島郡2遺跡5点、犬上郡1遺跡1点となる。

石製腰帯具は、野洲郡2遺跡2点、蒲生郡2遺跡3点、栗太郡4遺跡6点、滋賀郡8遺跡11点、伊香郡1遺跡1点、坂田郡1遺跡1点、犬上郡4遺跡5点、神崎郡1遺跡1点となる。

すると、表4で示したとおり、銅製腰帯具は野洲郡が県内最多の出土数であったのが、石製腰帯具は滋賀郡が逆転する。そして犬上郡が石製腰帯具の出土数を増やしている。銅製腰帯具は8世紀前半～9世紀前半、石製腰帯具は8世紀末～10世紀末と、重複する時期は一定あるものの材質の違いがおおよそその時期差としてあらわれる。銅製から石製への変更・転換や石製腰帯具の普及は、その入手・出土数量に変化がある地域と、栗太郡のように変化のない地域がある。

(1)-3. 出土遺跡の分布 腰帯具出土遺跡の分布は、いくつかの地域的なまとまりが認められる。

銅製腰帯具は、旧野洲郡西平、旧栗太郡北端と南西端の瀬田川沿いに複数箇所、その他は旧滋賀郡南志賀・穴太地域、旧高島郡の永田地域、旧犬上郡日夏地域、旧蒲生郡と旧神崎郡境の下豊浦地域、旧蒲生郡の山面地域等、それぞれ各郡に出土が認められる。

石製腰帯具は、旧野洲郡西河原・吉地地域、旧栗太郡岡・手原地域、旧滋賀郡錦織・南志賀・穴太地域および堅田・真野地域、旧犬上郡敏満寺周辺の複数箇所に、その他は旧東浅井郡井口地域、旧神崎郡佐野町地域、旧蒲生郡浅小井町地域および宮井町地域等、それぞれ各郡に出土が認められる。

(1)-4. 使用開始期の出土遺跡の分布 8世紀前半の腰帯具は、野洲市西河原宮ノ内遺跡丸轡2点(図2-1・3)・巡方1点(図2-11)、守山市服部遺跡丸轡1点(図2-2)、竜王町ブタイ遺跡巡方2点(図2-12・13)・鉤貝1点(図2-24)、大津市南滋賀遺跡丸轡1点(図2-4)が出土しており、守山市金森東遺跡(図2-27)と栗太市手原遺跡(図2-30)の鉤貝に可能性がある。古代近江国で腰帯具を最初に入手できたのは、滋賀郡(錦郷)、栗太郡(治田郷または「高野郷」)、野洲郡(馬道郷)あるいは(山本郷)、蒲生郡(周恵郷)となる。8世紀後半以降は広範囲に普及する。

(1)-5. 出土遺跡の位置 腰帯具出土遺跡の位置は、以下に大別できる。

①街道沿い(栗太市手原遺跡、草津市矢倉口遺跡、大津市横尾山古墳群・関津遺跡・錦織遺跡・南滋賀遺跡・穴太遺跡、高島市永田北遺跡〔永田遺跡〕等)

②河川沿い(守山市服部遺跡・中島遺跡・金森東遺跡、竜王町ブタイ遺跡、栗太市辻遺跡・高野遺跡・雲仙寺遺跡、大津市関津遺跡・中村遺跡、長浜市井口遺跡、彦根市品井戸遺跡、多賀町大門池南遺跡、東近江市野瀬遺跡等)

③湖岸沿い(野洲市西河原森ノ内遺跡・西河原宮ノ内遺跡・光相寺遺跡、近江八幡市中大の湖南遺跡、大津市浮御堂遺跡、彦根市妙光寺遺跡等)

④その他(多賀町土田遺跡、甲良町下之郷遺跡等)

以上の遺跡は、官衙や官衙関連施設(駅家、港湾管理施設、物資集積施設、手工業生産施設等)、寺院関連施設、一般集落、古墳・墓等の性格が想定される。

(2) 出土遺構

腰帯具の出土遺構は、遺構外が39点を占め、溝跡・流路跡17点、ピット・柱穴跡6点、土坑(竈壇ふくむ)4点、井戸跡1点となる。

銅製腰帯具は、37点のうちピット・柱穴跡4点、溝跡・流路跡16点、遺構面・包含層8点、不明・その他9点となる。

石製腰帯具は、30点のうち柱穴跡2点、井戸跡(混入または伝世品か)1点、溝跡1点、土坑(竈壇ふくむ)4点、包含層13点、不明・その他9点となる。

出土遺構の特徴は、銅製が溝跡・流路跡の出土数16点と事例が多いのにたいして、石製は土坑(竈壇)からの出土が一定認められる。材質の転換は、腰帯使用後のとり扱いや出土遺構(廃棄、埋納、保管、副葬等)に変化をもたらしたとかがえることもできよう。

(3) 種類・内容

鉄製や木製腰帯具の出土は認められない。また、製造・生産にかかわる鋳型や未製品の出土もない。

(3)-1. 種類 銅製は、37点のうち丸轡11点、山形(山形金具/丸轡)⁽¹³⁾1点、巡方16点、鉤貝2点、鉤尾6点、不明1点となる。鉤足(脚鉤)および鉤穴の数は、丸轡が3ヶ所、巡方が4ヶ所を基本とするが、守山市服部遺跡(図2-2)、栗太市雲仙寺遺跡(図2-9)、野洲市光相寺遺跡(図2-10)の丸轡は4ヶ所、山形に分類した大津市関津遺跡例(図2-6)は3ヶ所に鉤足がある。鉤穴をもつ事例は、野洲市西河原宮ノ内遺跡丸轡(図2-3)・巡方(図2-14・22)にある。図2-14は巡方裏金具、図2-22は馬具の可能性がある。

石製は、30点のうち丸轡10点、巡方19点、鉤尾

1点となる。草津市矢倉口遺跡丸軋は、裏面左右2ヶ所に横1列の潜り穴を設ける。貫通式の鉋穴をもつ事例は、彦根市品井戸遺跡丸軋(図3-3)と大津市錦織遺跡巡方(図3-12)にある。石製鉋尾(図3-25)は、栗東市岡遺跡から出土している。大津市中村遺跡巡方(図3-23)は、一辺4.8～5.3cmとし、県内最大である。

裏金具をともなう銅製腰帯具は、丸軋が守山市服部遺跡例(図2-2)、大津市南滋賀遺跡例(図2-4)、巡方に竜王町ブタイ遺跡例(図2-12・13)、野洲市光相寺遺跡例(図2-15)、大津市穴太遺跡例(図2-21)、鉋尾に栗東市高野遺跡例(図2-28)、大津市横尾山古墳群例(図2-31)の8事例を確認した。裏金具は、図2-2例をのぞいて垂孔がある。ただし、単体で出土した野洲市光相寺遺跡巡方裏金具(図2-23)は垂孔がない。裏金具を付けた銅製腰帯具は、帯皮に装着された状態で埋没したことが復元できるものの、前に述べたとおり完帯としてそろわない。

県内の遺跡から出土する腰帯具は、鋳直しや補修・再利用のための回収・収集(奈良国立文化財研究所1975^[4]、木下2008他)の他、腰帯としての役割を終えた後に分割し、分有されたことも考慮にいれる必要がある(田中2023他)。

(3)-2. 内容 8世紀中葉に施行された史料05『令義解』^{「養老衣服令」}の記事は、一品以下五位以上が金銀装腰帯、六位以下を烏油腰帯と規定している。五位以上と六位以下の大別は、平安時代の史料11『延喜式』にも記載が認められる。

金装腰帯具は、野洲市西河原宮ノ内遺跡丸軋・巡方(図2-1・14)、守山市金森東遺跡鉋尾(図2-27)、栗東市手原遺跡鉋尾(図2-30)の計4点に可能性があり、これに渤海使がもたらしたと推測される大津市穴太遺跡の帯金具(図2-21)がくわわる(岡田有2024)。金製や銀製、銀装の腰帯具の出土は認められない。

烏油腰帯具は、黒漆を塗布した腰帯具と見てよいとすれば、銅製は野洲市西河原宮ノ内遺跡丸軋・巡方(図2-3・11)・光相寺遺跡巡方(図2-15)、守山市服部遺跡丸軋(図2-5)・笠原南遺跡巡方(図2-17)、栗東市辻遺跡鉋尾・高野遺跡鉋尾(図2-28)、大津市横尾山古墳群鉋尾(図2-31)・関津遺跡山形(図2-6)等、石製は大津市浮御堂遺跡巡方(図3-21)等に可能性がある。石製は、黒色系の石材を使用した栗東市岡遺跡巡方・鉋尾(図3-13・25)、大津市錦織遺跡巡方(図3-12)・榎木原遺跡巡方(図3-16)・穴太遺跡巡方(図3-14)、多賀町土田遺跡巡方・大門池南遺跡丸軋等もこれにふくまれる可能性がある。

その他の石製腰帯具は、史料10『日本後紀』の記

事にある雄石腰帯を構成するものとかがえられる。ただし、草津市矢倉口遺跡メノウ製丸軋は史料07『白玉帯』、史料11『白玉腰帯』にあたる可能性がある。

腰帯は、唐の服制にならって8世紀初頭に成立した身分表象する道具のひとつである。けれども、腰帯は大きさや身体への装着部位等を考慮すると、金銀装や白色系腰帯具をのぞけば、衣服(礼服・朝服)にくらべて視覚的効果は大きくなかったとかがえられる。

6. おわりに

本補遺では、これまでに西河原森ノ内遺跡第1次発掘調査の石製丸軋を報告し、あわせて滋賀県内の遺跡から出土した律令期の腰帯具について整理した。最後に気づいた点を記し、まとめにかえたい。

(1) 野洲市内の腰帯具出土遺跡は、西河原・吉地地域の西河原森ノ内遺跡、西河原宮ノ内遺跡、光相寺遺跡の3遺跡(5地点)であり、西河原遺跡群に限られる。

西河原遺跡群出土の腰帯具12点は、時期と出土数量を整理すると、以下のとおりである。

① 8世紀前半(銅製) 西河原宮ノ内遺跡3点

② 8世紀後半(銅製) 西河原宮ノ内遺跡2点

光相寺遺跡5点

③ 8世紀末～9世紀(石製) 光相寺遺跡1点

西河原森ノ内遺跡1点

西河原宮ノ内遺跡は、大型倉庫址採取穴跡より「貸稲(出挙)」記録木簡(倉札)[7世紀末～8世紀初頭]が出土したことから、倉院に比定される。その一画には鍛冶・木工・漆・製糸等の生産工房が配された。西河原森ノ内遺跡と光相寺遺跡^[15]は、西河原遺跡群の中心的な遺跡(地点)で、安評家・野洲群家として舟や馬をそなえ前代からの交通手段を充実させていた。

西河原遺跡群は、鏡山窯跡群で生産された須恵器[7世紀後半～8世紀前半]の集積地のひとつになっており(滋賀県他2001、畑中2008B)、須恵器や布、米等の徴税、貢進、出荷等の実務と管理を担っていた。

西河原遺跡群の包括的な再整理を行った畑中英二氏は「西河原遺跡群においては、第4期^[16]のうちに大幅な規模縮小をみせ、以降は光相寺遺跡など限定された場所のみで遺構・遺物がみられる」と位置づけた(畑中2008A②)。しかしながら、西河原森ノ内遺跡は光相寺遺跡と同様に8世紀末以降も腰帯具や銭貨(隆平永寶等)を保有していた。湖岸部の西河原遺跡群と内陸部の小篠原遺跡群の関係は再検証が必要だが、西河原遺跡群は8世紀後半以降も地域拠点として存続したとかがえたい。一方、律令体制の崩壊や環境変化は経営主体と範囲の再編を促し、木部遺跡や五条遺

跡(兵主神社周辺)等への回帰と拡散を想定できよう。

(2) 野洲市内の遺跡出土腰帯具のうち、鍍金(金メッキ残存)した銅製丸柄と巡方が西河原宮ノ内遺跡から出土しており、史料05の金装腰帯具にあたる可能性がある。

(3) 滋賀県内の腰帯具出土遺跡の位置は、①街道沿い、②河川沿い、③湖岸沿い、④その他に大別できる。遺跡の内容は、官衙や官衙関連施設(駅家・港湾管理施設、物資集積施設、手工業生産施設等)、寺院関連施設、一般集落、古墳(追善供養、境界祭祀等)・墓(被葬者着用、副葬等)等が想定される。

腰帯具と駅家の関係については、浜田久美子氏が境界祭祀と関連づけて言及している(浜田2024)⁽¹⁷⁾。

平川南氏は、疫病神に饗応し厄災を防ぐという駅家における祭祀行為をあきらかにした(平川2009・兵庫県2009)⁽¹⁸⁾。このような他所からやってくる疫病やケガレ祓いの信仰・行為は、人や物資の往来が多い港湾管理施設、物資集積施設、手工業生産施設、さらには寺院関連施設⁽¹⁹⁾等でも行われていた可能性がある。

(4) 滋賀県内の遺跡出土腰帯具は、完帯で出土する事例はないけれども、近接して複数の腰帯具が出土する事例はある。これらは再利用を目的に収集された可能性がある。また、腰帯具は交易・流通にかかわる貨幣、米、糸・布、各種原材料等と同様に、交換財としての使用も一定考慮する必要がある(田中2023他)。

(5) 滋賀県内の遺跡出土腰帯具は、単体で出土する事例が多い。腰帯具は、装身具として官職を得た者の存在を直接示すものであるが、出土遺跡の内容を考慮にいと、施設に付随するもの、あるいは施設の性格に関係するものとして位置づけることもできる。さらに腰帯具は、腰帯としての役割を終えた後に分割し、分有された可能性がある(田中2023他)。この他、地方の官人は、複数の飾り具をつけた腰帯を必要としていなかったと推測することもできよう。

(6) 銅製から石製への変更・転換や石製腰帯具の普及は、その入手・出土数量に変化がある地域と、旧栗太郡のように変化のない地域がある。詳細な地域区分では、旧野洲郡西河原・吉地地域(馬道郷)あるいは(山本郷)、旧栗太郡岡・手原地域(治田郷または(高野郷)、旧滋賀郡南志賀地域(節部郷)の3地域が変化のない地域である。この3地域は、古代近江国で最初に銅製腰帯具を入手した地域のうちに入っている。

(7) 出土遺構は、銅製の溝跡・流路跡の出土数が多いのにたいして、石製の土坑(墓坑)からの出土がかわる。材質の転換は、腰帯使用後のとり扱いや出土遺構に変化をもたらしたとかがえられることでもある。

(8) 腰帯は、大きさや身体への装着部位等を考慮すると、金装装や白色系をのぞく黒色系の腰帯具は、衣服(礼服・朝服)にくらべて視覚的効果は大きくなかった。そのため、平安時代初期には、烏油腰帯にわかり難石の腰帯具が普及したものとかがえられる。

(9) 遺跡出土腰帯具は、本来の使用目的である官人所有の腰帯飾り具の他、①再利用を目的とした収集品あるいは交換財、②官衙関連施設(駅家・港湾管理施設・物資集積施設・手工業生産施設等)における祓の料物、③官衙・荘園関連施設あるいはその関係者の証明物等の可能性も考慮にいれる必要がある。個別の特定は、その他の用途等をふくめて今後の課題としたい。

(10)(3)・①の「街道沿い」について、古代近江国は官道やその他幹線道路と別に、湖東・湖南地域にいわゆる「山の道」を想定するかんがえがある。丸山竜平氏は『竜王町史』に「小森太三郎氏によると、築師八重谷には奈良路と呼ばれる古道が今も残り、築師一駕輿丁を経て野寺からシナド越にて川合あるいは上羽田にいたるもの」と紹介している(丸山1987)。山尾幸久氏は「山側の集落を連ねる古道」として「彦根市島居本で浜街道と一つになるのだが、多賀町敏満寺、秦荘町蚊野、布施山・雪野山などを経て、八重谷越で甲西町菩提寺に出、栗東町岡を経て勢田橋でまた浜街道と一つになる」と推測している(山尾1997)。

この山側の集落跡や古墳をつなぐ「山の道」の詳細な経路はあきらかでないけれども、多賀町や甲良町の腰帯具出土遺跡の分布は、この道の存在を肯定的に捉えることもできよう。野洲市は甲西町(現湖南市)菩提寺を西へ抜けると、小河川沿いの南桜、北桜、三上にて。大山川沿いは土馬〔7世紀後半か〕が出土した北桜南遺跡(野洲町1985)、次いで円墳(仮称:西田井古墳)〔7世紀〕(井上2020)を内包する西田井遺跡(野洲市2005)がある。小山川沿いは、塚の本古墳〔陶器TK209 型式/飛鳥1期〕(野洲町1986)や古代の川津と推測した北桜遺跡(野洲市2012)があり、小字名に「地京(大海道他)」「馬足(塚之本、溝掛け)」「天造(湯之口他)」「内大(天皇前、寺前他)」が見える(角川他1979)。さらに、野洲川の左(対)岸では、腰帯具が出土した栗東市辻遺跡・高野遺跡・手原遺跡・岡遺跡、そして草津市矢倉口遺跡へつながる。大山川の流路は野洲川本流に合流した後、旧野洲川本流あるいは分流といわれる境川へつづくことも留意される。

岡田雅人氏は「野路岡田から、栗太郡の北の方へ延びる東山道のライン」に課題があることを提起し、栗東市「手原までの間が東山道、東山・東海道であって、

手原から分岐して東海道が分かれていく」というかんがえを示した(岡田 2023)。雨森智美氏は7世紀後半代には「近世中山道に踏襲される古代東山道に先行して、やや内陸よりのルートがあった可能性」を指摘しており(雨森 2021)、この点は筆者も賛同する。

以上、まとめとしては複数的内容となり、腰帯具の多様性を提示したのみで、それぞれの背景を説明できないまま課題としてのこしてしまった。

西河原森ノ内遺跡をはじめとする西河原遺跡群は、昭和56年(1981)²⁰を発端とした発掘調査成果の蓄積により、古代湖岸部に点在した公的施設の一事例として一定評価の見通しが定まりつつある。しかし、既往調査成果の一部は未報告であったり、報告から漏れた資料も少なからず存在する。西河原遺跡群の発掘調査はつづいていくが、その実態解明の深化には既往調査成果の見直しや再整理等も必要とかながえる。

文末となりましたが本補遺作成にあたっては、花田勝広氏、徳網克己氏、岩崎茂氏、畑本政美氏、進藤武氏、岡田雅人氏、鈴木茂氏、岡山仁美氏、芦塚晶太氏、渡邊貴洋氏、野洲図書館の方々からご教示とご協力を賜りました。しるして、感謝を申し上げます。(河合)

【史料】01～03には西河原森ノ内遺跡出土土簡の釈文を掲載する(濱 2011他)。腰帯(鈿帯)に関する史料は、高島英之氏(2002)、平尾政幸氏(2002)、田中弘明氏(2003)が詳細に整理されており、04以下に代表的な史料をあげておく(黒板他『新訂増補 国史大系』吉川弘文館より抜粋)。

01 西河原森ノ内2号木簡〔7世紀後葉〕〔下達木簡〕

・「檢□伝之我持往籍者馬不得放我者反来之故是故トア

」※二文字目は「直」または「首」カ

・「自舟人率而可行也 其籍在処者衣知評平五十戸臣波博士家」

02 西河原森ノ内7号木簡〔7世紀末～8世紀初葉〕

〔廿カ〕 〔貨帳〕記録木簡

・「百廿馬馬驛□每倭

ア進加久支付束」

・「刀良女六十束」

03 西河原森ノ内11号木簡〔7世紀末～8世紀初葉〕

〔前白木簡〕 〔謹カ〕 〔別カ〕

・「十一月廿二日自京大夫御前□白奴首□□□□」

・「□西尔□□大龍命坐□ 今日□□ □□□□」

04 『續日本紀』和銅五年(712)五月癸酉条

五月…癸酉。禁^ハ六位以下以^ハ白銅及銀^ハ筋^ハ革^ハ帶^ハ上。

05 『令義解』衣服令朝服条(『養老令』の官撰注釈書)一品以下。五位以上。並^ハ色^ハ羅頭巾。衣色同^ハ礼服^ハ。牙^ハ白^ハ。金^ハ銀^ハ装^ハ腰^ハ帶^ハ。白^ハ襪^ハ。烏^ハ皮^ハ履^ハ。六位。深^ハ緑^ハ衣^ハ。七位。浅^ハ緑^ハ衣^ハ。八位。深^ハ羅^ハ衣^ハ。初^ハ位。浅^ハ羅^ハ衣^ハ。並^ハ白^ハ。

襪頭巾。く。白^ハ筋^ハ。職^ハ事^ハ。烏^ハ油^ハ腰^ハ帶^ハ。白^ハ袴^ハ。白^ハ襪^ハ。烏^ハ皮^ハ履^ハ。役^ハ徒^ハ。服^ハ色^ハ。朝^ハ庭^ハ公^ハ事^ハ則^ハ服^ハ之^ハ。

※養老令は天平宝字元年(757)5月勅令により施行。

06 『令義解』衣服令武官朝服条(『養老令』の官撰注釈書)衛府有^ハ。…金^ハ銀^ハ装^ハ腰^ハ帶^ハ。…其^ハ志^ハ以上^ハ。…烏^ハ油^ハ腰^ハ帶^ハ。…兵^ハ衛^ハ。…烏^ハ油^ハ腰^ハ帶^ハ。…主^ハ帥^ハ。…烏^ハ油^ハ腰^ハ帶^ハ。…朝^ハ庭^ハ公^ハ事^ハ則^ハ服^ハ之^ハ。衛^ハ士^ハ。…白^ハ布^ハ帶^ハ。…朝^ハ庭^ハ日^ハ則^ハ服^ハ之^ハ。

07 『日本後紀』延暦十四年(795)十二月丙子条十二月…丙子。聽^ハ參議已上^ハ白^ハ玉^ハ帶^ハ。

08 『日本後紀』延暦十五年(796)十二月辛酉条十二月辛酉。…禁^ハ鈿^ハ帶^ハ。以^ハ支^ハ錢^ハ銀^ハ一也。

※延暦15年は隆平永寶の初鑄年。以後、新貨は小型化。

09 『日本後紀』大同四年(809)五月癸酉条五月…癸酉。聽^ハ五位已上通用^ハ白^ハ木^ハ筋^ハ。其^ハ白^ハ玉^ハ玕^ハ等^ハ腰^ハ帶^ハ者^ハ。亦^ハ依^ハ延^ハ暦^ハ十五^ハ年^ハ正^ハ月^ハ。十八^ハ年^ハ正^ハ月^ハ兩^ハ度^ハ格^ハ。自^ハ除^ハ禁^ハ制^ハ。一^ハ如^ハ常^ハ例^ハ。

10 『日本後紀』弘仁元年(810)九月乙丑条九月…乙丑。公卿奏議言。…又去^ハ大同二年八月十九日下^ハ。彈^ハ正^ハ臺^ハ。例^ハ云^ハ。鑲^ハ石^ハ腰^ハ帶^ハ。畫^ハ筋^ハ大^ハ刀^ハ。及^ハ素^ハ木^ハ鞆^ハ襪^ハ。獨^ハ射^ハ汗^ハ草^ハ鹿^ハ狸^ハ熊^ハ皮^ハ等^ハ。一^ハ切^ハ禁^ハ斷^ハ者^ハ。臣^ハ等^ハ商量^ハ。鑲^ハ石^ハ得^ハ。造^ハ實^ハ多^ハ人^ハ。至^ハ于^ハ着^ハ用^ハ。亦^ハ復^ハ難^ハ損^ハ。鈿^ハ銅^ハ具^ハ者^ハ。以^ハ漆^ハ塗^ハ成^ハ。動^ハ易^ハ剥^ハ落^ハ。今^ハ難^ハ易^ハ各^ハ異^ハ。價^ハ直^ハ是^ハ同^ハ。為^ハ幣^ハ幣^ハ一也。…伏^ハ望^ハ鑲^ハ石^ハ及^ハ毛^ハ皮^ハ等^ハ。悉^ハ罷^ハ用^ハ之^ハ。…直^ハ隨^ハ士^ハ民^ハ便^ハ。蒙^ハ得^ハ其^ハ所^ハ。並^ハ許^ハ用^ハ之^ハ。…

※大同2年(807)。

11 『延喜式』彈正臺凡^ハ白^ハ玉^ハ腰^ハ帶^ハ。聽^ハ三位以上及四位參議着^ハ用^ハ。玕^ハ玕^ハ。馬^ハ頭^ハ。斑^ハ斑^ハ。象牙^ハ。沙^ハ魚^ハ皮^ハ。紫^ハ檀^ハ五位已上通用。

凡^ハ紀^ハ伊^ハ石^ハ帶^ハ隱^ハ文^ハ者^ハ。及^ハ定^ハ磨^ハ石^ハ帶^ハ參議已上。刻^ハ鑲^ハ金^ハ銀^ハ一^ハ帶^ハ唐^ハ帶^ハ。五位已上並聽^ハ着^ハ用^ハ。紀^ハ伊^ハ石^ハ帶^ハ白^ハ皙^ハ者^ハ。六位已下不^ハ得^ハ用^ハ之^ハ。

凡^ハ烏^ハ肩^ハ帶^ハ。聽^ハ六位以下着^ハ用^ハ。但^ハ有^ハ通^ハ天^ハ文^ハ一^ハ者^ハ。不^ハ在^ハ聽^ハ限^ハ。

※『延喜式』は、延喜5年(905)編さんに着手し、延長5年(927)に完成。

注

(1) 統一した考古学用語は定まっておらず、研究者によって鈿具、鈿帯具、帯具、帯飾り具、帯金具、石帯他が使用されている。本稿では、田中弘明氏(田中 2002)にしたがい「腰帯具」をもちいる。ただし、各研究者の論考の引用・参照部分は、基本的にその用語をもちいた。腰帯具の構成は、割製・石製を別として、鈿具、瓦鈿、山形、逆方、菱形とした。

(2) 西河原遺跡群は、西河原森ノ内遺跡、西河原宮ノ内遺跡、西河原遺跡、島ノ部遺跡、光相寺遺跡、吉地東御堂遺跡、吉地大寺遺跡を指すもの(畑中 2008A ①)で、野洲市西河原から古地を中心に木部や八木にひろがる遺跡の総称。前後する時期の遺跡分布を考慮すれば、その範囲は兵主神社を中心とする兵主十八郷の氏子園についても着目する必要がある。

西河原遺跡群の時期は、第1期は7世紀中葉、第2期は7世紀後葉、第3期は7世紀末～8世紀初葉、第4期は8世紀前半、第5期は8世紀後半、第6期は8世紀末～9世紀初葉、第7期は9世紀中葉、第8期は9世紀後葉に区分されている(畑中 2008A ②)。

(3) 天武天皇の在位期間、飛鳥時代の673年～686年。本稿の内容に関しては、(山根 1990A・B、中 2008、大橋 2015他)に詳しい。

- (4) 長岡京は、延暦3年(784)～延暦13年(794)に存続した都城。
- (5) 第5次発掘調査第2遺構面標高は約86.3～86.4m。第1次発掘調査B区上層遺構面の標高は86.1～86.5m〔奈良時代～平安時代前期〕とし、下層遺構面の標高は85.7～85.9mである。西河原森ノ内遺跡第1次発掘調査B区上層遺構面直上の茶畑色粘土層からは、古代銭貨「隆平永衡」(初暦年796年)1枚が出土している(中主町1990B)。
- (6) 西河原森ノ内1号木簡〔8世紀前半〕には、馬廻郷の戸主名に大友主寸、石辺直王三、三宅連麻呂、大友行仁が記される。大友主寸は、いわゆる渡人村主の土著渡人一族である。その他木簡の内容を加味すると、西河原遺跡群の管理運営には中央政府の指示を受けた多数の渡来系氏族・集団が移住し、活動していたことがうかがえる(大橋2015等)。
- (7) 野洲郡における東山道の路線は、辻田村朝氏による検証の結果、現状では足利健良氏の庵元ルートが有力になっている(辻田2010)。
- (8) 小篠原遺跡群は、とくにその範囲が定まっているものではないが、隣接して古代の遺構および遺物が確認できる小篠原遺跡(陶甕、漆器土器、灯明器、木製下駄等)と安城寺遺跡(コップ形須恵器、二輪陶器浄瓶、阮地陶器扁鏡、灯明器等)、下々塚遺跡(陶甕、人面土器、割製鉢、木製下駄等)、中畑・古里遺跡(陶甕、木甕、人形等)、市三宅東遺跡(黒書人面土器、木製下駄、馬廐等)、久野部遺跡等の範囲としておく。陶甕の出土数量は、小篠原遺跡群と西河原遺跡群に大差ない。
- (9) 主な古代の遺跡は北坂遺跡、北坂南遺跡、南坂北遺跡、市三宅東遺跡、富坂遺跡、富坂東遺跡、福林寺遺跡、辻町遺跡、中北遺跡、大篠原西遺跡、大篠原東遺跡、夕日ヶ丘北遺跡等があげられる。
- (10) 江戸時代、野洲郡の津止し港は、野洲市の辻町村と家穂川田の村々には頭浦(現近江八幡市)。三上・中畑・野洲村は市野井浦(現守山市)、富坂沢村と西河原村は野田浦、竹生(旧田村)は大曲村浜(現守山市)としていた。この動線や港の位置が古代まで遡るとはかんがえがたいが、参考資料として提示しておく(寺井1987、森崎2016、野洲市2017)。
- (11) 1件令制において、県内から出土した古墳時代中期の帯金具は、筆者の検索範囲で栗東市新開1号墳に1条分の帯鉤3点・鉄具1点、近江八幡市車塚古墳に鉤板4点・刺金1点(銅鍍帯金具)がある。
- (12) 平成16年度(2004)に栗東市高野遺跡から出土した割製帯鉤具裏面(裏金具)2点(栗東市地保2006)は、詳細な分析のため計上していない。
- (13) 田中広明氏(田中2002等)と平尾政幸氏(平尾2002)の分類による。
- (14) 報告書は「まとまりがなく、難多量のものふんでいるところから、改訂のために寄せあつめたものようである」と記している。(奈良国立文化財研究所1975)
- (15) 「五十戸家」「土刀自家」黒書土器(里長、女性純率者の存在か)、「康」九田田作比毛出」刻書土器(人名+品目+調略か)が出土している。木下義信氏は「物質授受がなされた地点」と位置づける(濱他2009)。
- (16) 注(2)のうち、8世紀後半(田中2008A)。
- (17) 浜田久美子氏は、大津市穴太遺跡から出土した割製帯金具(図2-21)を、瀬海使由來のものとして「人京するための境界祭祀を行い、その料物として帯金具を使用し」とかんがえている(前田2024)。
- (18) 平尾氏は、兵庫県明石市築港出土第4号木簡の記載内容について、「日本書紀」を参考に、聖家の門前で「御馳走の土器」に盛り、投針等に対して寛宥するという祭祀行為「をあらかじめした(平川2009)」。これを受けた報告者は「聖家の門での祭祀は、馬が持ちこむケガレや鬼を神に奉納にいたる祭祀の可能性を考へ」「祀にまつる寛宥については、『今昔物語集』四第一五「賀茂足行道を子の保護に伝ふる語」において、御馳走を食べ、造り物の馬や舟に乗りて帰て行く鬼の姿が描写されている」ことを紹介している(兵庫県2009)。
- 市内道路出土の土馬は、角建一氏の研究があり、西河原森ノ内遺跡1点〔7世紀後半～8世紀前半〕、光相寺遺跡9点〔7世紀前半～8世紀後半〕、吉地薬師堂遺跡2点〔7世紀中頃～8世紀代〕、光明寺遺跡1点〔奈良時代〕、瀧ノ部遺跡4点〔7世紀後半〕、木塚遺跡3点〔7世紀後半～8世紀〕、小篠原遺跡4点〔7～8世紀〕、安城寺遺跡1点〔7世紀前半〕、中畑・古里遺跡1点〔8世紀前半〕、辻町遺跡2点〔7世紀後半～8世紀〕、大篠原東遺跡6点〔7～8世紀〕、北坂南遺跡1点〔7世

紀後半〕の計35点がしられる(角2008・2017)。大篠原東遺跡は、鶴山宮跡群と藤原東宮・大藤原東宮と関連している。

旧野洲郡のうち現守山市内道路出土の土馬は、渡賀南遺跡に1点〔7世紀後半～8世紀か〕がしられる(堀2012)。

木製舟形(立休)は、西河原森ノ内遺跡第2次発掘調査B区下層遺構面溝跡SD2201より1点(全長27.8cm)〔奈良時代〕、吉地薬師堂遺跡第2次発掘調査B区溝跡SD2105より1点(全長16cm)〔古代末～中世Ⅱ/13世紀か〕が出土している(中主町1990A・C)。

- (19) 運河や耕地拡大等にかかわる僧侶・寺院関係者の所持品の他、「7世紀後半に交通路沿いに建立された地方寺院や、8世紀後半以降に村落レベルまで展開した地域社会の周縁に建立された寺院」(藤本2023)は、「律令国家が民衆に調度物を陸路・人担で運送することを強制したことにもない、多くの人々が都鄙間交通に苦しみ状況に対し、仏教の布教活動として展開された」(松原2009)と指摘されている。
- (20) 本発掘調査は、吉地大寺遺跡第1次調査となる(中主町1990D)。

文献

- 南森智美(2002)「混賀氏の持幣」「持幣をめぐる諸問題」独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所
- 南森智美(2007)「地方官衙関連遺跡の概観-近江国栗太郡での検討から-」『考古学調査・小笠原好孝先生追悼記念論集』小笠原好孝先生追悼記念論集刊行会
- 南森智美(2011)「7世紀の湖内-終焉遺跡を中心に」『淡海文化財論叢』第十三編、淡海文化財論叢刊行会
- 市 大樹(2008)『西河原木簡群の世界』『古代地方木簡の世紀-文字資料からみた古代の近江-』混賀県立安土城考古博物館・財団法人混賀県文化財保護協会
- 井上竜也(2020)「西田井遺跡出土の土師製土製品について」『令和元年度野洲市文化財調査概要報告書』野洲市教育委員会
- 内田保之(2006)「『延喜式』諸国駅伝馬条と近江の交通路-伝馬供給施設をめぐって」『紀要』第19号、財団法人混賀県文化財保護協会
- 内田保之(2008)「近江における古代官道に関する調査-現状と課題」『人間文化』第24号、混賀県立大学人間文化学部研究報告24号、公立大学混賀県立大学人間学部
- 内田保之(2023)「紙上報告 古代栗太郡の官道」「古代の郡役所と豪族 栗太郡衙遺跡発掘35年」栗東市教育委員会・公益財団法人栗東市スポーツ協会、サンライズ出版
- 大津市教育委員会(1985)「真野神社遺跡Ⅲ 真野北部土地区改良区は場整備事業に伴う発掘調査報告書、大津市埋蔵文化財調査報告書(8)」大津市教育委員会(1989)「穴太遺跡(弥生時代区)発掘調査報告書-一般国道161号(西大津バイパス)建設に伴う大津市埋蔵文化財調査報告書(15)」
- 大津市教育委員会(1992)「穴太砂遺跡発掘調査報告書-一般国道161号(西大津バイパス)建設に伴う大津市埋蔵文化財調査報告書(20)」大津市教育委員会(2009)「大津市埋蔵文化財調査年報-平成19(2007)年度」
- 大津市教育委員会(2017)「真野神社発掘調査報告書Ⅲ 郡市計画道路3・4・21号道路改良事業に伴う、大津市埋蔵文化財調査報告書(107) 大橋信孝(2015)「近江における文字文化の受容と渡来人」『国立歴史民俗博物館研究報告』第194集、国立歴史民俗博物館
- 大橋信孝(2017)「鶴山古宮跡群と草部屯倉、ブライ遺跡出土木簡に接して」『淡海文化財論叢』第九編、淡海文化財論叢刊行会
- 大橋信孝(2023)「調議2 栗太郡の郡司と古代豪族」『古代の郡役所と豪族 栗太郡衙遺跡発掘35年』栗東市教育委員会・公益財団法人栗東市スポーツ協会、サンライズ出版
- 大平 茂(2016)「兵庫県内の祭祀遺跡・祭祀遺物の研究成果」『ひょうご歴史研究紀要』創刊号、兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室
- 岡田雅人氏(2023)「計議(賀茂足行)岡田氏の係と今後の展望」『古代の郡役所と豪族 栗太郡衙遺跡発掘35年』栗東市教育委員会・公益

- 財団法人東京スポーツ協会、サンライズ出版
- 岡田有矢(2024)「講演」大津市六太遺跡と金剛花文帯金具」『横浜ユーラシア文化館紀要』第12号、横浜ユーラシア文化館
- 香川県教育委員会(2018)『坂野・東二五遺跡』中小規模河川赤山川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 角 建一(2008)「土馬に関する二、三の考察」『野洲川下流北岸の様相』、『吾々の考古学』和田晴吉先生追悼記念集刊行会
- 角 建一(2017)「土馬に関する二、三の考察 補遺」『古地楽堂遺跡・大塚原遺跡出土事例について』『野洲市歴史民俗博物館研究紀要』第21号、野洲市歴史民俗博物館
- 「角川日本地名大辞典」編集委員会・竹内理三編(1979)『角川日本地名大辞典』25 滋賀県、角川書店
- 蒲生町教育委員会(1989)『はつ場整備関係遺跡発掘調査報告書1』蒲生町文化財資料集(7)
- 川端 弘(1987)「第一章 第二節 2 東山道(中山道)」『野洲町史』第一巻 通史編1、野洲町
- 木下義信(2008)『騎帯-投入たちの身だしなみ-』『古代地方木器の世紀-考古資料から見た古代の近江-』滋賀県立安土城考古博物館・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 木村孝彦(1992)「長岡京の跡目」『長岡京考古文化論叢』中山修一先生喜記念事業会
- 木村孝彦(2002)「騎帯から石袴へ」『騎帯をめぐる諸問題』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所
- 草津市教育委員会(2011)『草津市文化財年報18-平成21(2009)年度事業年報』草津市文化財調査報告書86
- 葛野泰樹(1999A)「古代近江国における湖上交通と河川交通について」『史学論集-佛教学部文学部史学創設三十周年記念-』佛教学部文学部史学創設三十周年記念論集刊行会
- 葛野泰樹(1999B)「考古学からみた古代木上交通に関する一試論-特に『律と波し』を中心にして-」『龍溪史学』第25号、龍溪史学会
- 黒板光男・国史大系編集委員会(1977)『新訂増補 国史大系(普及版) 日本紀』(1981A)『新訂増補 国史大系(普及版) 令義解』(1981B)『新訂増補 国史大系(普及版) 令義解 第三』(1981C)『新訂増補 国史大系(普及版) 續日本紀 前篇』(1981D)『新訂増補 国史大系(普及版) 延喜式 後篇』(2000)『新訂増補 国史大系 第十巻 日本紀略前篇』吉川弘文館 ※『日本紀略 前篇』は黒板光男の単独編集
- 齊藤一彦(2016)「近江国野洲郡西河原村関係文書について」『野洲市歴史民俗博物館研究紀要』第20号、野洲市歴史民俗博物館
- 滋賀県教育委員会(1991)『平成元年度滋賀県埋蔵文化財調査年報』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1975)『根本原遺跡発掘調査報告書-南近江度寺瓦葺』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1981A)『根本原遺跡発掘調査報告書-南近江度寺瓦葺』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1981B)『国道365号バイパス工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-高月町井ノ口遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1983)『大伴遺跡発掘調査報告書』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1985A)『はつ場整備関係遺跡発掘調査報告書8』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1985B)『妙楽寺遺跡Ⅱ』宇賀川災害復旧助成事業に伴う
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1986A)『はつ場整備関係遺跡発掘調査報告書XⅡ-1』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1986B)『原宮平拓地等農地整備事業関係発掘調査報告書-浅小井(高木)遺跡』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1987)『笠原南遺跡発掘調査報告書』一般道近見上野近江八幡線特殊改良第1種工事に伴う
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1988)『横尾山古墳群発掘調査報告書』一般国道一(京浜バイパス)関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1989)『高木(浅小井)遺跡』はつ場整備関係遺跡発掘調査報告書XⅡ-2
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1990A)『下之郷遺跡』はつ場整備関係遺跡発掘調査報告書XⅡ-2
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1990B)『下之郷遺跡・法善寺遺跡』はつ場整備関係遺跡発掘調査報告書XⅡ-4
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1992)『編織遺跡-近江大津宮開道遺跡-』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1993)『南近江遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2001)『西河原森ノ内遺跡Ⅱ』軌道近見上野近江八幡線改良工事に伴う中主町内遺跡(VI)
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2002)『緊急地域雇用特別交付金事業に伴う出土文化財管理業務報告書』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2005)『芦刈遺跡・大中の湖南遺跡』はつ場整備関係(経営体育成基盤整備)遺跡発掘調査報告書32.2
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2008)『琵琶湖西南部の湖底・湖岸遺跡』琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書8
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2010A)『関津遺跡Ⅲ』はつ場整備関係(経営体育成基盤整備)遺跡発掘調査報告書37.4
- 滋賀県教育委員会・守山市教育委員会(1980)『服部遺跡発掘調査概報』財団法人滋賀県文化財保護協会(2010B)『関津遺跡-近江の南の玄関口-』シリーズ近江の文化財002
- 財団法人滋賀県文化財保護協会(2010C)『琵琶湖の港と船』シリーズ近江の文化財003
- 公益財団法人滋賀県文化財保護協会(2023)『おのみ文化財通信』vol.56
- 公益財団法人滋賀県文化財保護協会(2024)『西河原森ノ内遺跡-比留田法田遺跡 湯ノ部遺跡』滋賀県文化財保護協会調査報告第1集
- 財団法人滋賀県総合研究所(1984)『びわ湖上流埋蔵文化財-水資源開発公社琵琶湖開発事業建設部』
- 高島英之(2002)『文献史料からみた日本古代の騎帯』『騎帯をめぐる諸問題』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所
- 多賀町教育委員会(2006)『古代、土田に役所があった?』展示解説資料集
- 田中広明(1993)『腰帯の考察』『研究紀要』第10号、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田中広明(2002)『腰帯の姿と諸問題』『騎帯をめぐる諸問題』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所
- 田中広明(2003)『地方の集落と古代の官人-考古学が解く古代社会の権力構造』柏書房
- 田中広明(2023)『石部の南に、多数の石製腰帯が出土した二つの遺跡-』『研究紀要』第37号、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 中主町教育委員会(1987)『西河原森ノ内遺跡第1・2次発掘調査概報』中主町文化財調査報告書第9集
- 中主町教育委員会(1990A)『西河原森ノ内遺跡第1・2次発掘調査報告書1』中主町文化財調査報告書第21-1集
- 中主町教育委員会(1990B)『西河原森ノ内遺跡第1・2次発掘調査報告書2』中主町文化財調査報告書第21-2集
- 中主町教育委員会(1990C)『古地楽堂遺跡第2次発掘調査報告書1』中主町文化財調査報告書第22-1集
- 中主町教育委員会(1990D)『中主町土田地区整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』光明寺遺跡1~6次・10次・12次・14次調査、古地楽寺遺跡1・2次調査
- 中主町教育委員会(1991)『平成元年度中主町内遺跡発掘調査年報』中主町文化財調査報告書第30集
- 中主町教育委員会(1993)『平成3年度中主町内遺跡発掘調査年報』中主町文化財調査報告書第36集

中主町教育委員会 (1994)「平成4年度中主町内道路発掘調査年報」中主町文化財調査報告書第41集

中主町教育委員会 (1995)「平成6年度中主町埋蔵文化財発掘調査集報」中主町文化財調査報告書第45集

中主町教育委員会 (2001)「平成11年度中主町内道路発掘調査年報」中主町文化財調査報告書第60集

辻川哲朗 (2005)「近江地域出土の古代銭貨」『紀要』第18号、財団法人滋賀県文化財保護協会

辻川哲朗 (2008)「古代銭貨の流通」『古代地方木簡の世紀-文字資料からみた古代の近江-』滋賀県立土山考古博物館、財団法人滋賀県文化財保護協会

辻川哲朗 (2010)「近江・西河原道跡部と古代東山道-地方官衙と交通路をめぐって」『古代文化』第61巻第4号、財団法人古代学協会

辻川哲朗 (2012)「近江国野洲・甲賀郡をめぐって一試考-大江山流域の集落地帯を手がかりとして」『紀要』第25号、財団法人滋賀県文化財保護協会

寺井秀太郎 (1987)「第五章 第一節 4 納税」『野洲町史』第二巻 通史編2、野洲町

徳川克己 (2011)「西河原道跡部とその周辺」『尾根道と地域文化-林博通先生退任記念論集-』林博通先生退任記念論集刊行会

徳川克己 (2014)「小学「大道」から見た古代近江の官道」『野洲市歴史民俗博物館研究紀要』第18号、野洲市歴史民俗博物館

中村順則 (2002)「地方社会における位階」「路帯をめぐって諸問題」独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所

奈良国立文化財研究所 (1975)「平城宮発掘調査報告Ⅵ」奈良国立文化財研究所学報第23冊

独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所 (2002)「路帯をめぐって諸問題」

能登川町教育委員会 (1996)「能登川町埋蔵文化財調査報告書第38集 法皇寺道跡 (6・8次)」

畑中英二 (2008A)「①第三章 西河原森ノ内道跡部を掘る」、②「本文編2 考古学からみた西河原道跡部」『古代地方木簡の世紀-文字資料からみた古代の近江-』滋賀県立土山考古博物館、財団法人滋賀県文化財保護協会

畑中英二 (2008B)「西河原道跡部を掘る」『古代地方木簡の世紀-西河原森ノ内道跡部から見たもの-』財団法人滋賀県文化財保護協会、滋賀県立土山考古博物館、サンライズ出版

濱 修・木下義信 (2009)「西河原道跡部における文書行政の在り方について-坂の出土を中心に-」『紀要』第22号、財団法人滋賀県文化財保護協会

濱 修 (2011)「滋賀・西河原森ノ内道跡 (第八・一二・一四・一八号)」『木簡研究』第三三号、木簡学会

浜田美子 (2024)「講演3 高瀬使と六太道跡」『横浜ユース文化館紀要』第12号、横浜ユース文化館

彦根市教育委員会 (1985)「竹ヶ鼻廃寺・品井戸道跡 (第4次)」市道小泉・河原橋改良工事に伴う、彦根市埋蔵文化財調査報告書第8集

彦根市教育委員会 (2024)「古代近江道の成り立ちと西河原道跡部」野洲市歴史民俗博物館 (歴史講座資料)

兵庫県教育委員会 (2009)「築道跡-一般国道483号北近畿圏自動車道春日山道路Ⅱ事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、兵庫県文化財調査報告書第360冊

平川 南 (2009)「兵庫県朝来市山崎町 築道跡出土木簡」『築道跡』兵庫県教育委員会、兵庫県文化財調査報告書第360冊

平尾政幸 (1999)「平安京の石製帯飾り具」『リーフレット京都 No.123、財団法人京都府埋蔵文化財研究所、京都府考古資料館

平尾政幸 (2002)「平安京の石製帯具とその生産」『研究紀要』第7号、財団法人京都府埋蔵文化財研究所

藤本 誠 (2023)「地方から都を往來する人びと-地方豪族類-運路大を中心として」『古代の交通と神々の景観-港・坂・道-』八木書店

堀川修平 (2021)「熊香堂を考ふる (1)-東国行幸と近江-」『淡海文化財論叢』第十三輯、淡海文化財論叢刊行会

堀 真入 (2012)「滋賀県内出土の土器について-律令制祭祀を考ふる基礎作業-」『淡海文化財論叢』第十四輯、淡海文化財論叢刊行会

松原弘宣 (2009)「古代の宿泊施設」『日本古代の交通と情報伝達』汲古書院 (初出は2004年)

丸山竜平 (1987)「第一編 第一章 第四節 古墳の出現と展開」『竜王町史』上巻、竜王町役場

守山市教育委員会・守山市立埋蔵文化財センター (1984)「金森東道跡発掘調査概報」

守山市教育委員会 (1985)「守山市文化財調査報告書第22冊-中島道跡発掘調査報告書」

守山市教育委員会 (2005)「金森東道跡 (第30次)・金森道跡 (第2次)発掘調査概要報告書」金森町土地区画整理事業に伴う発掘調査

野洲市教育委員会 (2005)「1987年度埋蔵文化財調査年報」

野洲市教育委員会 (2006)「野洲市内道路発掘調査集報Ⅴ」

野洲市教育委員会 (2007)「西河原森ノ内道跡第5次・光相寺道跡第2次発掘調査概要報告書補遺」

野洲市教育委員会 (2012)「平成23年度野洲市埋蔵文化財調査概要報告書2」

野洲市教育委員会 (2017)「平成28年度野洲市内道路発掘調査年報」

野洲市教育委員会 (2019)「平成30年度野洲市文化財調査概要報告書」

野洲町教育委員会 (1985)「昭和59年度野洲町内道路発掘調査概要」

野洲町文化財資料集1984.3

野洲町教育委員会 (1986)「昭和60年度野洲町道跡部発掘調査概要」

野洲町文化財資料集1985.1

山尾幸久 (1990A)「第5章 西河原森ノ内道跡出土木簡」『西河原森ノ内道跡第1・2次発掘調査報告書Ⅰ』中主町文化財調査報告書第21.1集

山尾幸久 (1990B)「森ノ内道跡出土の木簡をめぐって」『木簡研究』十二号、木簡学会

山尾幸久 (1995)「第5章 676年の環の木簡」『環ノ部道跡発掘調査報告書Ⅰ』環道発見15野近八幡橋改良工事に伴う中主町内道跡 (Ⅱ)、滋賀県教育委員会、財団法人滋賀県文化財保護協会

山尾幸久 (1997)「古代近江の早馬道」『古代の日本と渡来文化』学生社

栗東市教育委員会・財団法人栗東市文化体育振興事業団 (2004A)「1987年度栗東町埋蔵文化財発掘調査資料集」

栗東市教育委員会・財団法人栗東市文化体育振興事業団 (2004B)「栗東市埋蔵文化財調査報告2003年度年報」

栗東市教育委員会・財団法人栗東市文化体育振興事業団 (2006)「栗東市埋蔵文化財調査報告2004年度年報」

栗東市教育委員会・財団法人栗東市文化体育振興事業団 (2008A)「霊仙寺道跡発掘調査報告書」栗東市文化財調査報告書第8冊

栗東市教育委員会・財団法人栗東市文化体育振興事業団 (2008B)「高野道跡発掘調査報告書」栗東市文化財調査報告書第15冊

栗東市教育委員会・財団法人栗東市文化体育振興事業団 (2010)「手原道跡発掘調査報告書」栗東市文化財調査報告書第22冊

栗東町教育委員会・財団法人栗東町文化体育振興事業団 (1990)「同道跡発掘調査報告書Ⅰ次・2次・3次調査」

栗東町教育委員会・財団法人栗東町文化体育振興事業団 (1999)「1980～1982年度栗東町埋蔵文化財発掘調査資料集」

栗東町教育委員会・財団法人栗東町文化体育振興事業団 (2000)「栗東町埋蔵文化財発掘調査1998年度年報」

財団法人栗東町文化体育振興事業団 (1993)「栗東町埋蔵文化財発掘調査1992年度年報」

財団法人栗東町文化体育振興事業団 (1997)「栗東町埋蔵文化財調査1995年度年報Ⅱ-手原道跡-」

竜王町教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会 (2019)「ブライ道跡発掘調査報告書Ⅱ」竜王町埋蔵文化財発掘調査報告書第16集

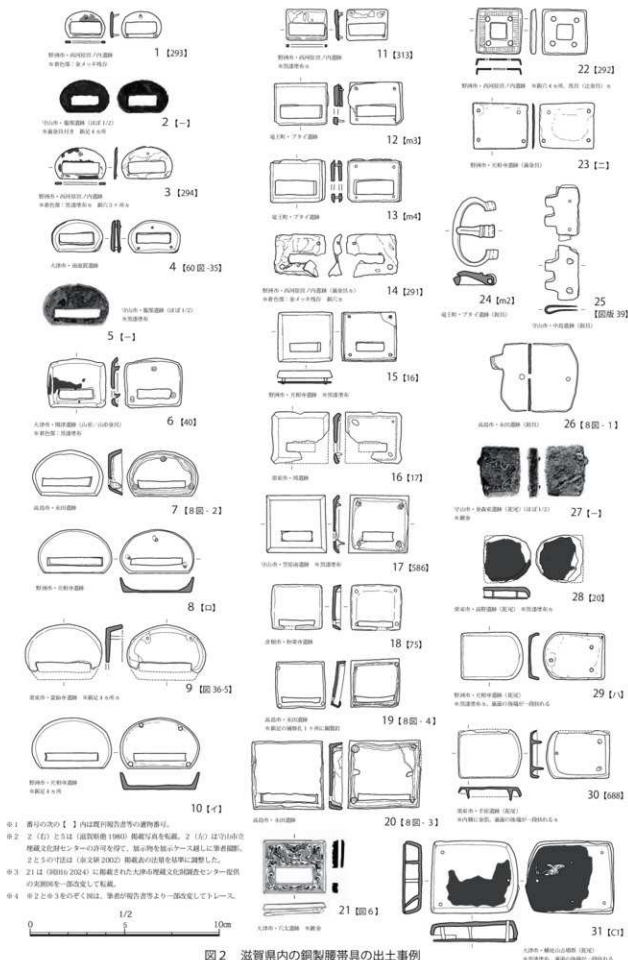


図2 滋賀県内の銅製腰帯具の出土事例

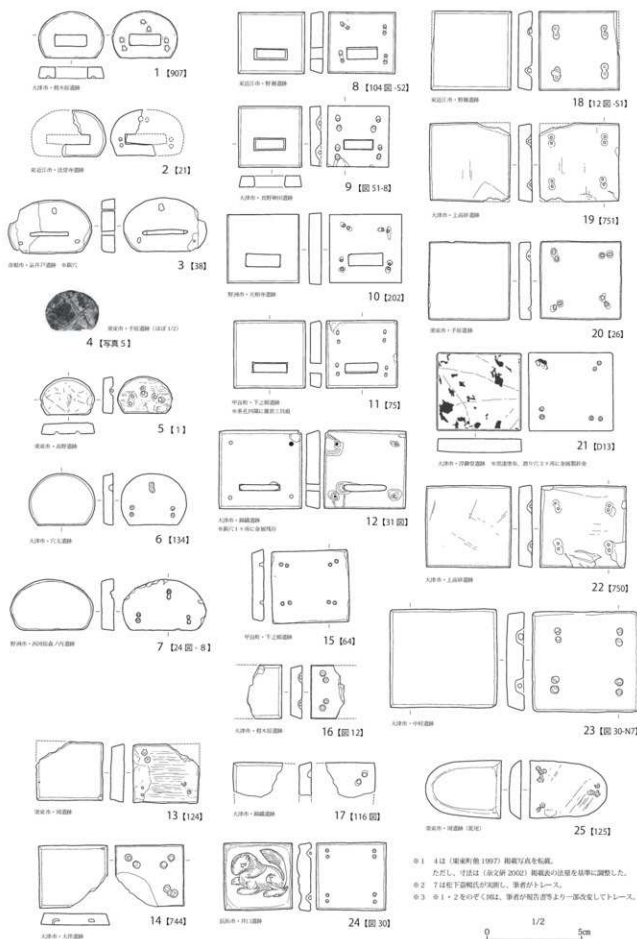


図3 滋賀県内の石製腰帯具の出土事例

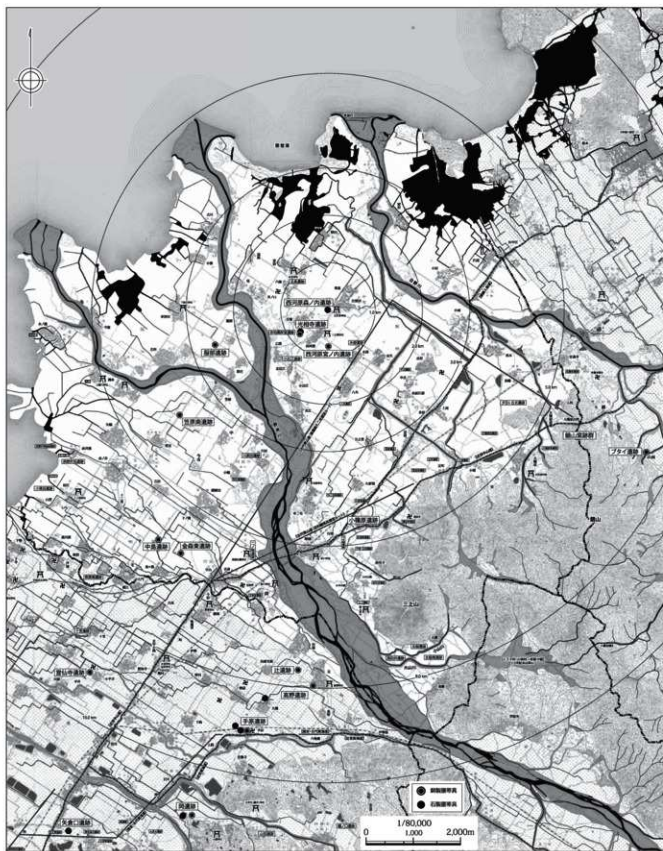


図4 旧野洲郡周辺における腰帯具の出土遺跡分布図 (大日本帝国陸地測量部発行、明治27年製版「八幡」、同年製版「石部」、明治28年製版「和禮村」、同年製版「明田」、同年製版「草津」、同年製版「北里村」(いずれも縮尺1/20,000)をベースマップに使用)

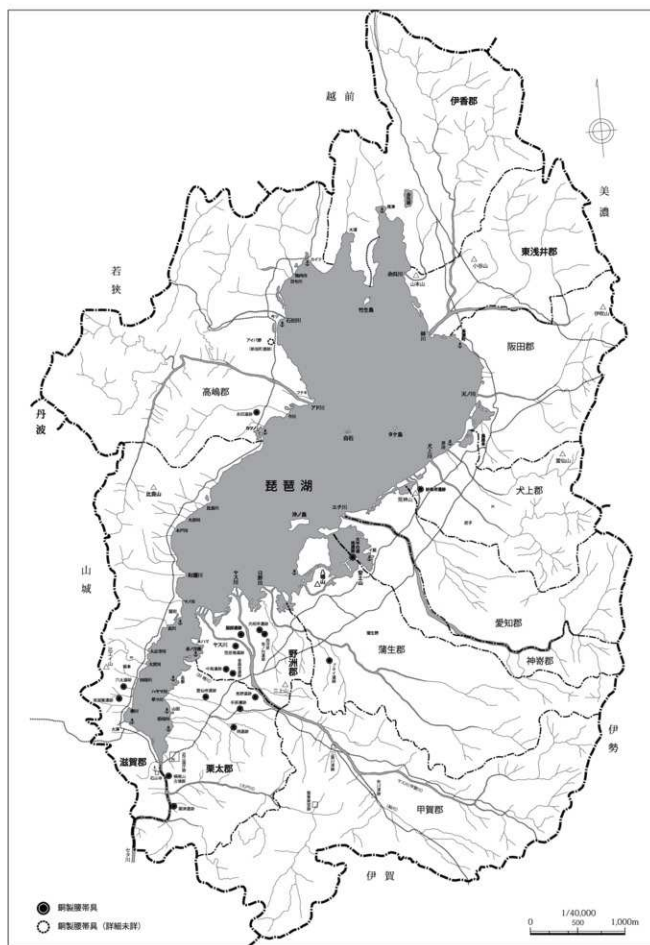


図5 滋賀県内の銅製腰帯具の出土遺跡分布図 (明治31年調査「滋賀県管内全図」(縮尺1/280,000)をベースマップに使用)

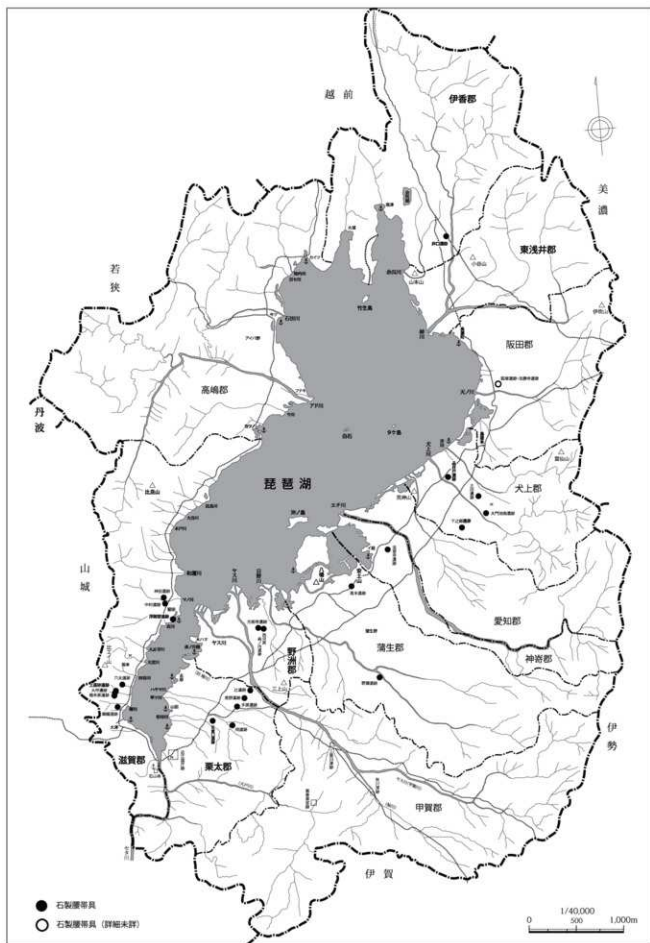


図6 滋賀県内の石製腰帯具の出土遺跡分布図 (明治31年調査「滋賀県管内全図」(縮尺 1/280,000) をベースマップに使用)

表1 滋賀県内の銅製腰帯具出土事例一覧

[illegible]

(表1のつづき)

No.	本誌 遺物 番号	遺跡名 遺跡番号	調査 年度 次数	調査 地区	遺構 遺構番号	遺構 番号	内容	最大径 (縦横)	最大厚 (縦横)	最大長さ (縦横)	保存 状況 (縦横)	時期 () は推定	備考	その遺物の主な遺構・遺物	文献
18	図 2-24	ブライ遺跡	2016 年	5	大溝 S121	2	灰土	3.7	2.4	-	-	7 世紀後半～8 世紀 (8 世紀前半)	-	-	埼玉大 2019
19	-	大ノ内湖前遺跡	1964 年	1 次	大溝	1.8	2.9	-	0.5	-	-	(8 世紀後半)	-	-	埼玉大 2002
20	-	大ノ内湖前遺跡	1965 年	2 次	大溝	1.73	2.8	-	0.5	-	-	(8 世紀後半)	-	-	埼玉大 2002
21	-	大ノ内湖前遺跡	1966 年	3 次	大溝	2.6	2.8	-	0.5	-	-	(8 世紀後半)	-	-	埼玉大 2002
22	-	大ノ内湖前遺跡	1966 年	3 次	大溝	1.8	2.45	-	0.5	-	-	(8 世紀後半)	-	-	埼玉大 2002
◎ 大ノ内湖前遺跡															
23	-	上野遺跡	1998 年	-	S14「上野」 (堀入り)	2.47	3.2	0.6	-	-	-	奈良時代～平安時代 (8 世紀後半～9 世紀 後半)	-	-	奈良大 2000
24	図 2-28	高野遺跡	2004 年	-	S11	2.5	2.47	0.23	0.53	-	-	奈良時代 (8 世紀)	-	-	奈良大 2006
-	-	高野遺跡	2004 年	-	S11	2.5	2.47	0.23	0.53	-	-	奈良時代 (8 世紀)	-	-	奈良大 2006
-	-	高野遺跡	2004 年	-	S11	2.5	2.47	0.23	0.53	-	-	奈良時代 (8 世紀)	-	-	奈良大 2006
25	図 2-30	手前遺跡	2008～ 2009 年	S1	S11	3.3	2.6	0.1	0.48	-	-	奈良時代～平安時代 (8 世紀後半～9 世紀 後半)	-	-	奈良大 2010
26	図 2-16	同遺跡	2003 年	-	朽ノ溝 SP-19	2.7	3.0	0.25	0.38	0.45	?	奈良時代 (8 世紀)	-	-	奈良大 2010
27	図 2-9	堀ノ内遺跡	2007 年	-	S13-S15 堀ノ内遺跡	2.9	4.1	0.2	0.85	0.24	2.8	(8 世紀後半)	-	-	奈良大 2004B
28	図 2-31	堀ノ内遺跡	1985～ 1987 年	-	S11 堀ノ内遺跡	3.8	4.6	0.2	0.97	-	-	(8 世紀後半)	-	-	奈良大 2004B
-	-	堀ノ内遺跡	1985～ 1987 年	-	S11 堀ノ内遺跡	3.7	4.6	0.1	-	-	-	(8 世紀後半)	-	-	奈良大 2004B
29	図 2-6	同遺跡	2004～ 2007 年	197 4	S1 堀ノ内遺跡	2.6	3.1	0.16	0.4	0.5	1.8	奈良時代～平安時代 (8 世紀後半～9 世紀 後半)	-	-	奈良大 2010A
◎ 堀ノ内遺跡															
30	図 2-4	南原遺跡	1979 年	54-2	S11 堀ノ内遺跡	1.7	2.7	0.25	-	0.5	1.8	(8 世紀後半)	-	-	奈良大 1993
-	-	南原遺跡	1979 年	54-2	S11 堀ノ内遺跡	1.7	2.73	0.15	-	0.55	1.82	(8 世紀後半)	-	-	奈良大 1993
31	図 2-21	大ノ内湖前遺跡	2002 年	-	S11 堀ノ内遺跡	2.7	3.2	?	0.28	0.85	2.0	奈良時代～平安時代 (8 世紀後半～9 世紀 後半)	-	-	奈良大 2004

(表1のつづき)

本館 蔵書 番号	遺跡名	発掘 年度	調査 年度	調査 回数	調査 範囲	出土品	遺構	報告 番号	内容	最大幅 (縦横)	最大長 (縦横)	最大厚 (縦横)	高さ (縦横)	発見 品数 (縦横)	時期 () は推定	備考	その他の主な遺構・遺物	文庫
32	Ⅲ-2.7 (北江遺跡)	高島市	1984年	1回	北江地区 北江	青銅色 土器	8Ⅲ-2 土器	8Ⅲ-2	丸瓶	2.4 (縦横)	3.7 (縦横)	0.1 (縦横)	0.75 (縦横)	0.4 (縦横)	2.5 (縦横)	9世紀末～10世紀 末～9世紀初め	新定「三世紀」 本館「倉庫入庫」(倉庫蔵) 遺跡上層「土」(土器)、遺物 新定「三世紀」 本館「倉庫入庫」(倉庫蔵)	遺跡後 1985A
33	Ⅲ-2.19 (北江遺跡)	高島市	1984年	1回	北江地区 北江	銅色 土器	8Ⅲ-4 土器	8Ⅲ-4	土器	2.4 (縦横)	2.4 (縦横)	0.1 (縦横)	0.4 (縦横)	0.3 (縦横)	1.9 (縦横)	9世紀末～10世紀 末～9世紀初め	新定「三世紀」 本館「倉庫入庫」(倉庫蔵)	遺跡後 1985A
34	Ⅲ-2.20 (北江遺跡)	高島市	1984年	1回	北江地区 北江	銅色 土器	8Ⅲ-3 土器	8Ⅲ-3	土器	3.5 (縦横)	3.7 (縦横)	0.18 (縦横)	0.65 (縦横)	0.5 (縦横)	2.9 (縦横)	9世紀末～10世紀 末～9世紀初め	新定「三世紀」 本館「倉庫入庫」(倉庫蔵)	遺跡後 1985A
35	Ⅲ-2.26 (北江遺跡)	高島市	1984年	1回	北江地区 北江	銅色 土器	8Ⅲ-1 土器	8Ⅲ-1	土器	3.5 (縦横)	4.5 (縦横)	0.1 (縦横)	- (縦横)	- (縦横)	- (縦横)	9世紀末～10世紀 末～9世紀初め	新定「三世紀」 本館「倉庫入庫」(倉庫蔵)	遺跡後 1985A
36	Ⅲ-2.27 (北江遺跡)	高島市	1984年	1回	北江地区 北江	銅色 土器	8Ⅲ-1 土器	8Ⅲ-1	土器	3.5 (縦横)	4.5 (縦横)	0.1 (縦横)	- (縦横)	- (縦横)	- (縦横)	9世紀末～10世紀 末～9世紀初め	新定「三世紀」 本館「倉庫入庫」(倉庫蔵)	遺跡後 1985A
37	Ⅲ-2.18 (北江遺跡)	高島市	1985年	1回	北江地区 北江	銅色 土器	8Ⅲ-1 土器	8Ⅲ-1	土器	3.5 (縦横)	4.5 (縦横)	0.1 (縦横)	- (縦横)	- (縦横)	- (縦横)	9世紀末～10世紀 末～9世紀初め	新定「三世紀」 本館「倉庫入庫」(倉庫蔵)	遺跡後 1985A

表2 近畿圏内の石製磨製土器事例一覧 (本表は、奈良文化財研究所編「2002」Ⅱ 全国出土磨製土器調査成果「調査」訂正をのこった。各都、県別名及び図説を参考とする。)

本館 蔵書 番号	遺跡名	発掘 年度	調査 年度	調査 回数	調査 範囲	出土品	遺構	報告 番号	内容	最大幅 (縦横)	最大長 (縦横)	最大厚 (縦横)	高さ (縦横)	発見 品数 (縦横)	時期 () は推定	備考	その他の主な遺構・遺物	文庫
1	Ⅲ-3.7 (西河原遺跡)	野洲市	1984年	1回	西河原地区 B	土器	8Ⅲ-8 土器	8Ⅲ-8	丸瓶	2.65 (縦横)	4.35 (縦横)	0.6 (縦横)	- (縦横)	- (縦横)	9世紀末～10世紀 末～9世紀初め	新定「三世紀」 本館「倉庫入庫」(倉庫蔵)	遺跡後 1985A	
2	Ⅲ-3.10 (西河原遺跡)	野洲市	1986年	1回	西河原地区 C	土器	8Ⅲ-5 土器	8Ⅲ-5	土器	3.6 (縦横)	3.6 (縦横)	0.7 (縦横)	- (縦横)	0.6 (縦横)	9世紀末～10世紀 末～9世紀初め	新定「三世紀」 本館「倉庫入庫」(倉庫蔵)	遺跡後 1985A	
3	Ⅲ-3.11 (西河原遺跡)	野洲市	1985年	1回	西河原地区 C	土器	8Ⅲ-5 土器	8Ⅲ-5	土器	3.6 (縦横)	3.6 (縦横)	0.7 (縦横)	- (縦横)	0.6 (縦横)	9世紀末～10世紀 末～9世紀初め	新定「三世紀」 本館「倉庫入庫」(倉庫蔵)	遺跡後 1985A	
4	Ⅲ-3.18 (西河原遺跡)	野洲市	1983年	1回	西河原地区 1	土器	8Ⅲ-5 土器	8Ⅲ-5	土器	4.1 (縦横)	4.2 (縦横)	0.7 (縦横)	- (縦横)	- (縦横)	9世紀末～10世紀 末～9世紀初め	新定「三世紀」 本館「倉庫入庫」(倉庫蔵)	遺跡後 1985A	
5	Ⅲ-3.8 (西河原遺跡)	野洲市	1984年	2回	西河原地区 5	土器	8Ⅲ-5 土器	8Ⅲ-5	土器	3.2 (縦横)	3.5 (縦横)	0.6 (縦横)	- (縦横)	0.5 (縦横)	9世紀末～10世紀 末～9世紀初め	新定「三世紀」 本館「倉庫入庫」(倉庫蔵)	遺跡後 1985A	
6	Ⅲ-3.5 (西河原遺跡)	野洲市	1987年	1回	西河原地区 6	土器	8Ⅲ-5 土器	8Ⅲ-5	土器	1.9 (縦横)	2.9 (縦横)	0.5 (縦横)	- (縦横)	- (縦横)	9世紀末～10世紀 末～9世紀初め	新定「三世紀」 本館「倉庫入庫」(倉庫蔵)	遺跡後 1985A	

(表2のつづき)

No	本館 遺物 番号	遺跡名	発掘 年度	調査 回数	調査 町名	遺構	報告 番号	内容	最大幅 (縦横)	最大長 (縦横)	最大厚 高さ	垂直幅 (縦横)	時期 () は推定	備考	その他の主な遺構・遺物	文献	
7	図3-4	手取遺跡	1992年	1次	栗東市	丹波川S359 土層 (図3-6)	参考図録 (図3-5)	丸堀	1.82	2.83	0.55	-	縄文時代 (8世紀末 ～9世紀初め)	地蔵石系	付随物 紐状土器など (図 4-1) 遺物類	栗東市遺跡 1993 栗東市遺跡 1997	
8	図3-20	手取遺跡	1981年	1次	栗東市	S3-1 朽付 (図3-6)	26 / 参考図録 (図3-6)	溝方	4.11	4.31	0.62	-	11世紀前半 ～(8世紀末～9世紀 初め)	地蔵石系	寺内物、石製物、瓦製品 類など	栗東市遺跡 1987 栗東市遺跡 1990	
9	図3-13	同遺跡	1987年 a	2次	栗東市	68号土層	124	溝方	3.1	3.5	0.7	-	(8世紀末～9世紀 初め)	地蔵石系	栗東市遺跡 (7世紀後半～9 世紀末)	栗東市遺跡 1990	
10	図3-25	同遺跡	1987年	2次	栗東市	T-0	SX-4	掘削	3.1	4	0.7	-	(8世紀末～9世紀 初め)	地蔵石系	延喜寺遺跡 (907年)、瓦、等	栗東市遺跡 1990	
11	—	大谷土遺跡	2009年	1次	京都市	S24	写真	丸堀	?	?	?	-	奈良時代 (8世紀末～9世紀 初め)、2世紀～3世紀の 遺り穴	Mノウ「(白土層)」の遺構 遺跡、遺跡の上層には本瓦、 物部、備前、丹波、栗東、 山崎、等 (705年)、新土層、 代・遺物、等	京都市 2011		
◎ 遺跡群																	
12	図3-12	神尾遺跡	1975年	50.3 (第5)	大津市	谷戸堀 (図3-6)	31 堀	31 堀	溝方	4.15	4.3	0.74	0.3	平安時代 (9世紀初 め～10世紀初め)	灰土系 穴に土器類あり	近江大津市河原遺跡	近江市遺跡 1992
13	図3-17	同遺跡	1979年	54.5 (第5)	大津市	S3027 (第5)	116 堀	116 堀	溝方	1.8	2.6	0.65	-	平安時代 (8世紀末 ～9世紀初め)	灰土系 灰土系 (灰土系)	近江大津市河原遺跡	近江市遺跡 1992
14	図3-16	船大谷遺跡	1973年	1次	大津市	B 7C-48	埋没土層 土層	812	溝方	2.85	1.7	0.62	-	7世紀 ～(8世紀後半～9世紀 初め)	灰土系 灰土系 (灰土系)	船大谷遺跡 (第1期) 灰土系 は大津時代、灰土系～Vは 平安時代	近江市遺跡 1975
15	図3-1	船大谷遺跡	1977・ 1978年	3次	大津市	SX102 土層	907	907	丸堀	2.5	3.5	1.2	0.6	縄文1期～V期2 期 (8世紀後半～9世紀 初め)	灰土系 灰土系 (灰土系)	船大谷遺跡 (第1期) 灰土系 は大津時代、灰土系～Vは 平安時代	近江市遺跡 1981A
16	図3-14	大津遺跡	1980・ 1981年	1次	大津市	谷戸堀	744	744	溝方	3.6	3.1	0.71	-	(8世紀後半～9世紀 初め)	灰土系	船大谷遺跡 (第1期) 灰土系 は大津時代、灰土系～Vは 平安時代	近江市遺跡 1983
17	図3-22	土取遺跡	1987年	1次	大津市	1 土層	750	750	溝方	4.2	4.4	0.7	-	平安時代 (9～10世紀初め)	灰土系	平安時代 (第1期) 灰土系 は大津時代、灰土系～Vは 平安時代	大津市遺跡 1982
18	図3-19	土取遺跡	1987年	1次	大津市	1 土層	751	751	溝方	4	4.2	0.6	-	平安時代 (9～10世紀初め)	灰土系	平安時代 (第1期) 灰土系 は大津時代、灰土系～Vは 平安時代	大津市遺跡 1982
19	図3-6 (谷戸堀群)	大津遺跡	1985年	1次	大津市	134	134	丸堀	2.7	3.5	0.5	-	(8世紀後半～9世紀 初め)	灰土系	切取大津市河原遺跡、オランダ 遺跡、神尾式カマド、新土層、 第三土、土・土器類群、木 屑土層、和服類 (705年)、神 尾土層 (705年)	大津市遺跡 1985	

報告書抄録

ふりがな	れいわろくねんど やすしぶんかざいちょうさがいようほうこくしょ
書名	令和6年度 野洲市文化財調査概要報告書
シリーズ名	野洲市文化財調査報告
シリーズ番号	101
編集者名	野洲市教育委員会文化財保護課
編集機関	野洲市教育委員会文化財保護課
所在地	〒520-2492 滋賀県野洲市西河原2400番地 野洲市北部合同庁舎2階 ℡077-589-6436
発行年月日	西暦 2025 年 3 月

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名等	所在地	市町村	遺跡番号					
虫生遺跡	野洲市八夫2479番地	252107	342-027	35° 05'46"	136° 01'49"	20231016～ 1110	167.0	給食センター 室外機用架台
鏡山古窯址群	野洲市	252107						
西河原森ノ内遺跡 (1次調査)	野洲市西河原字森ノ内 467番地1外	252107	343-013	35° 06'17"	136° 01'12"	19840402～ 19850331	7,900	中主町土地区 画整理事業

所収遺跡名等	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
虫生遺跡	集落跡	弥生～江戸	溝跡	須恵器・土師器・ 灰輪陶器	
鏡山古窯址群	生産遺跡			須恵器	
西河原森ノ内遺跡 (1次調査)	集落跡・ 官衙跡	弥生～江戸	溝跡・掘立柱 建物跡	弥生土器・須恵器・ 木製品・石製腰帶具	

野洲市文化財調査報告101

令和6年度

野洲市文化財調査概要報告書

印刷・発行 令和7年(2025)3月

編集・発行 野洲市教育委員会文化財保護課

滋賀県野洲市西河原2400番地

〒520-2492 TEL.077-589-6436

印刷・製本 奥野印刷株式会社